

LIXIL *eye*

建築・まちづくりから生活文化を探求する情報誌「リクシル・アイ」

no. 2

April 2013

特集

- | | | |
|---|------------|---------------------------|
| 1 | 新・生き続ける建築 | 森山松之助 |
| 2 | 建築ソリューション | 香川県庁舎 |
| 3 | まちづくりの今を見る | 廃校リノベーションで地域に根差した新しい拠点づくり |



風景をデザインする 海外編

自然とアートの中の住まい

韓国・ソウル特別市

ソウルは2010年、世界デザイン首都に選定され、そのため、現在も美的でゆとりのある韓国の首都をつくらうという先端的な流れがある。

このプロジェクトは、ソウルの漢江北部にある高級住宅エリアに立地する集合住宅「漢南ザ・ヒル(HANNAM THE HILL)」のランドスケープデザインである。

韓国の伝統的な自然観は日本とは異なる。例えば日本の桂離宮のように、自然を縮景し、平坦地に池と起伏ある山をつくるなど、庭園の美学を求めるものではない。韓国の代表的な庭園、昌徳宮の「秘苑」のように、自然の岩をそのまま景石とし、水の流れを細工して、自然をありのままに受け入れる美意識を持つ。言い換えれば、日本は住宅敷地内に美しい自然をつくり出すが、韓国は美しい自然の中に住宅を建てる、という大きな差だ。

ここは、3-12階建ての集合住宅32棟に600世帯が住む大規模な都市型住宅群だ。そこで、韓国近代住宅景観の新しい可能性、新しいコミュニアル(共同的)な空間の可能性、それらがここで花開くようにしたいと思った。このため「水の広場」では、地層を抽象化した壁の滝と、水と緑の連続景観が住宅群を包み、詩的インパクトを与えるランドスケープを目指した。

佐々木葉二

Yoji Sasaki

プロジェクト概要

名称：漢南ザ・ヒル(HANNAM THE HILL)

所在地：韓国ソウル特別市漢南洞

主要用途：集合住宅

発注者：Han's Jaram Co., Ltd

ランドスケープ設計：佐々木葉二+風コンサル

タラント環境デザイン研究所

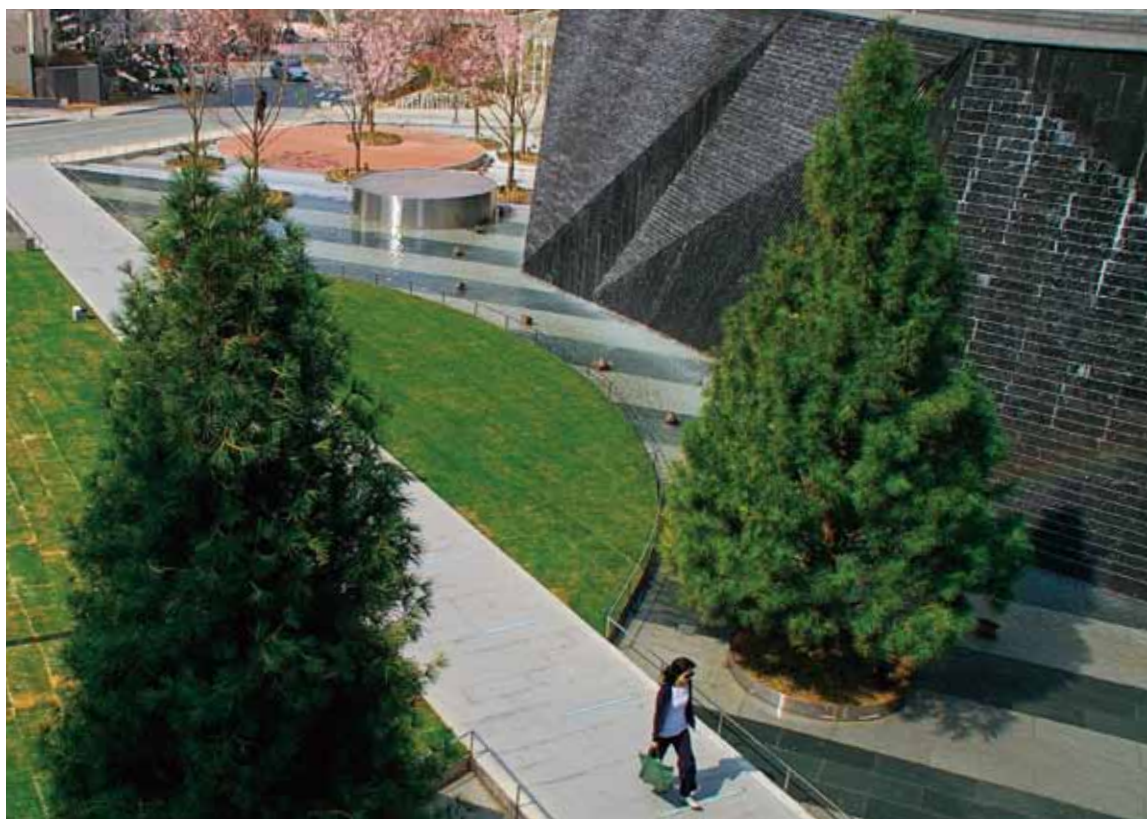
敷地面積：11.15ha

工期：2008.9-2011.1

ささき・ようじ—京都造形芸術大学教授、ランドスケープ・アーキテクト/1947年生まれ。神戸大学卒業、大阪府立大学大学院修士課程修了。カリフォルニア大学大学院・ハーバード大学大学院客員研究員。帰国後、風コンサルタント環境デザイン研究所設立。2000年より現職。

主なランドスケープ作品：さいたま新都心 けやき広場[2000]、六本木ヒルズ[2003]、シンガポール理工科系専門学校[2007]など。

主な著書：『佐々木葉二 作品集』[マルモ出版/2004]、『ランドスケープの近代』[共著、鹿島出版会/2010]など。



水の広場：滝からは霧と虹が発生し、静かな水音が背景になる【写真：吉武宗平】

表紙写真：
香川県庁舎 [撮影：フォワードストローク]

次号 [LIXIL eye] no.3は、
2013年10月発行予定です

02 [風景をデザインする 海外編]
自然とアートの中の住まい —— 佐々木葉二

04 **特集1 | 新・生き続ける建築 — 2**
森山松之助

04 [本論] 斜めに構えた人生 親しみやすい作風 —— 古田智久

08 [作品] 久邇宮御常御殿
御成婚記念御涼亭 (現・旧御涼亭 (台湾閣))
片倉館

14 [年譜] 略歴 | 主な作品

15 **特集2 | 建築ソリューション — 2**
香川県庁舎

22 [序論] 平和と民主主義の建築 —— 藤森照信

24 [鼎談] 新時代に挑戦した先駆者
日本文化の未来のために、香川県庁舎は持続可能であってほしい。
—— 神谷宏治 | 佐藤竜馬 | 古谷誠章

37 [対談後記] 日本の伝統とモダニズムの相剋を超え、戦後の民主主義を体現する —— 古谷誠章

38 [ARTIST at HOME] — 2
金属造形・渡辺遼さんとブロンズ鑄造・須田貴世子さんの巻 —— 中村好文

42 **特集3 | まちづくりの今を見る — 2**
廃校リノベーションで地域に根差した新しい拠点づくり

44 [序論] 資産としての建築ストックの利活用について —— 三橋博巳

46 [本論] 求められる廃校施設の有効活用 未来につなごう「みんなの廃校」プロジェクト —— 斎藤憲一郎

48 [インタビュー] まちの背景を見つめ、廃校という器から新しい価値を生み出す —— 清水義次

50 [事例1] 地域コミュニティの核となるアートセンター「3331 Arts Chiyoda」

52 [事例2] ここにしかない学校を観光資源に「三代校舎ふれあいの里」

54 [事例3] 冷涼な気候を活かした地場産業の創出「白神フーズ」

56 [事例4] 国内初のマンガ文化の総合的拠点「京都国際マンガミュージアム」

58 [素材を語る]
“知覚ゲーム”としてのガラスの泡 —— 石川修次

60 [TOPICS]
「住の先へ」—— 懐かしい未来の家を考える「HOUSE VISION 2013 TOKYO EXHIBITION」 —— 榎 泰将

64 [INFORMATION]
施工事例 index | LIXILからのご案内 | ギャラリーイベント | LIXIL出版 新刊案内

68 [新・建築家の往復書簡] — 2
危ない旅の理想はアルチュール・ランボー —— 隈 研吾 | 妹島和世

LIXIL eye no.2
2013年4月20日発行

発行：株式会社 LIXIL
編集発行人：安岡淳也
マーケティング本部
LIXIL eye 編集室
〒100-6007
東京都千代田区霞が関3-2-5
霞が関ビルディング11階
Tel: 03-6273-3628
Fax: 03-6273-3539
制作：株式会社森戸アソシエイツ
協力：フォンテルノ(02.42-57頁)
デザイン：松田洋一
印刷：竹田印刷株式会社

*本誌記事の無断転載を禁じます
*本文中の敬称は省略させていただきます

森山松之助

Matsunosuke Moriyama

明治2年、大阪に生まれた森山松之助は、学習院、一高を経て、帝大造家学科に入学。結核のため周囲より少し遅れたスタートになったが、成績は優秀で卒業論文と卒業設計では首位を占めた。病弱のため30歳を過ぎてても定職には就かずでしたが、処女作になった生涯の友・血脇守之助の診療所を後藤新平に見初められたことが縁で、森山は台湾に活躍の場を与えられた。そこで才能を開花させ、その後15年あまりを台湾総督府営繕課で腕を振るった。台湾総督府新庁舎など、手掛けた官庁建築の多くは今も大事に使われ続けている。しかし、森山はなぜか早々と台湾に見切りをつけ、活躍の場を東京に移した。その後は和風、洋風、中国風、モダニズム建築と多彩な様式を巧みに使い分け、東京歯科医学専門学校を始めとする民間建築を多数手掛けた。「新・生き続ける建築」の第2回は、今まであまり注目されることのなかった森山松之助という建築家の特異な生涯と、その作品に光を当てた。



【所蔵：森山慶之助】

はじめに

片倉館の入り口は、斜め45度内側を向いている。まるで森山松之助が斜めに構えて「よう、また来たか」と言っているようだ。設計者・森山松之助は明治2年に生まれ、昭和24年に亡くなった。いわば日本近代をほぼすべて生きた人物だが、回り道が多い遅咲きの人生だった。結核のため病弱だったが、学生時代から遊郭に入り浸った。しかし、建築家としての腕は確かで多くの代表的な台湾の公共建築を設計した。洋風建築に優れていたのはもちろん、帰朝後は和風からモダニズムまで高いデザイン力を見せた。設計に向き合う姿勢は実直で、宮家の御殿から工場や倉庫まで同様に取り組んだ。建築作品は多彩、人生も波乱万丈であった。

名家に生まれるが地位や権力に反抗

森山松之助は外交官・森山茂^[1]の長男として生まれたが、両親の離婚から叔父の五代友厚^[2]の家で育てられた。家庭の愛情に恵まれず、父への反抗心から、以後も地位や名声には興味を示さず斜めに構えた人生を送った。姉の愛子は、高山歯科医学院を創設した高山紀齋^[3]と結

婚する。森山は学習院尋常中学校、第一高等学校を経て、明治26年に帝国大学工科大学造家学科に入学する。この年の3月、一高時代の後輩・中條精一郎の下宿で、生涯親交が続く血脇守之助^[4]と出会い、高山歯科医学院への入学を勧めた。その後、血脇は高山歯科医学院の経営を引き継ぎ、東京歯科大学の創始者となる。森山は28歳で大学を卒業し、以後大学院に5年間在籍し、「造家上換気及び暖房」を専攻した。大学卒業後の10年間は、結核のせいか定職に就かず、仕事としては嘱託、講師、執筆活動などしか確認できない。一方、私生活では芸者遊びで散財し、親から勘当されて借金取りに追われ、友人宅を転々としていた。この間、岡田時太郎の家に4年ほど居候する^[5]。岡田は辰野金吾のもとから独立し、岡田工務所を設立した直後なので、設計を手伝っていたのであろう。その頃の岡田の作品は牛久シャトーと軽井沢の三笠ホテルだが、両者とも森山らしい意匠であり、関与の可能性がある。岡田が満州へ行くことになり、森山は自らが設計した血脇邸兼診療所に居候をした。そこへ医者仲間の後藤新平^[6]が訪れ、診療所の建物を気に入り、設計者を尋ねたところ森山が居合わせ、台湾行きを勧められたと伝えられている^[7]。辰野金吾推薦説^[8]もあるが、血脇の影響も考えられる。血脇は明治33年に台湾渡航を願い出たが、日本の歯科界のためにと高山紀齋から慰留され断念した経緯があった。森山は37歳でやっと嘱託とはいえ定職に就いたが、台湾行きは結核患者として相当な冒険だった。

台湾総督府営繕課での活躍

日本占領時代の台湾は、児玉源太郎が第4代総督だった明治31年から39年に、民政長官・後藤新平により都市基盤が整備された。当初、日本人は木造建築を主体に考えていたが、白蟻被害により数年で建て替えざるを得ない建築も出てきた。また、台風の度に大被害を受ける経験から、風土に合った建築が求められていた。日本にとって初の植民地となった台湾経営は、本土でできない理想の都市を実現しようとしたもので、営繕組織も新進気鋭であった。その代表例が鉄筋コンクリートの導入であった。尾辻國吉が書いた『明治時代の思ひ出』^[9]によると、それまで台湾総督府営繕課では、鉄筋コンクリートを床や屋根など部分的に用いていたが、台北市電話交換局で最初全鉄筋コンクリート造に踏みきった。これは、森山松之助の台湾での初仕事で、明治42年に竣工した。日本初の全鉄筋コンクリート造事務所建築は、遠藤於菟設計の三井物産横浜支店と言われているが、それより2年早いことになる。つまり、日本人建築家で最初に全鉄筋コンクリート造事務所建築を設計したのは森山であると言えるだろう。もちろん台湾総督府営繕課の技術蓄積があってこそだが、後年、辰野金吾も視察に来て、壁の薄さに驚いている。ただし、台北市電話交換局は小規模な2階建てだったため、試験的に全鉄筋コンクリート造にしたようである。同年竣工の土木部庁舎は大規模であったこともあり、壁体は煉瓦造で、各階床を鉄筋コンクリート造にして手堅く設計された。

台湾総督府の営繕課は組織で設計しているため、個人名を出していない。意匠の決定権は課長にあったと考えられるが、帝大卒の技師が何人もいた中で、担当者が誰だったか、つまり誰の筆で誰のデザインかは、興味深いところである。担当者を知る資料には、前出の尾辻の文章、および中條精一郎の文章^[10]などがあり、それを参考に裏付けするしかない。担当者を推測するもう一つの目安として意匠がある。森山は卒業設計の「UNIVERSITY HALL」で、背面入り口両側に2本の塔を付け、その上に反りがある方形屋根を用いている。この形は独特で、他の建築家の作風にはあまり見られない。台湾総督府営繕課の建築でこの方形屋根が現われた場合は、森山の関与が考えられる。

台湾総督府新庁舎建設への道

森山松之助は多くの作品を台湾に残したが、台湾総督府新庁舎を建てるために台湾へ行ったと言っても過言ではない。台湾総督府新庁舎のコンペは、森山が台湾に来た翌年の明治40年に行われた。結果は甲賞なしで乙賞に長野宇平治案が選ばれた。『総督府物語』^[11]によれば、台湾総督府時代の公文書により、森山が実施設計の中心人物だったことが判明している。長野案と実施では大きく異なり、地上60mの塔、両翼を強調するペディメントやオーダーなど、



台湾総督府新庁舎(現・總統府)【1919】RC造、一部煉瓦・石造4階建、地下1階。長野宇平治案とは大きく異なり、中央・両翼部の強調が中央政府にふさわしい意匠となっている。ルスティカオーダーによる過大な装飾が南国らしい【国定古蹟】【写真：筆者】



台中州庁(現・台中市政府)【1913】煉瓦造2階建。縦長の伸びやかなプロポーション。マンサード屋根は通風冷却用と考えられる【市定古蹟】【写真：筆者】
台北州庁(現・監察院)【1915】煉瓦造2階建。セセッションの影響を受け、様式の解体と混合が現われている独特な意匠である【国定古蹟】【写真：筆者】
台南州庁(現・国立台湾文学館)【1916】煉瓦造2階建。戦災を受け、最近まで低い勾配屋根だったが、台湾の人々の尽力により、豊かな影りみのマンサード屋根やドームが戦前の姿に復元された【国定古蹟】【提供：トリップアドバイザー】

【1】 森山茂【1842-1919】明治2年から10年まで日朝関係を専門とする外交官として活躍し、元老院議員、富山県知事を経て、明治27年から亡くなるまでの25年間は貴族院議員を務めた
【2】 五代友厚【1836-85】薩摩藩士として英国留学。倒幕に活躍し、明治維新後は判事となるが、1年で官を辞し、以後、大阪財界人として活躍した
【3】 高山紀齋【1851-1933】明治5年から11年までアメリカで歯科医学を学んで帰国し、黎明期の日本歯科医学教育の体制づくり、歯科界の結束づくりに尽力。東京歯科大学の前身、高山歯科医学院を創設した
【4】 血脇守之助【1870-1947】24歳で歯科医師を目指し高山歯科医学院に入学。明治34年に高山歯科医学院を継承するかたちで東京歯科医学院(後の東京歯科大学)を設立し、血脇歯科診療所を開設。以後、歯科医学教育はもちろん、日本歯科医師会会長として歯科界の運営に尽力した。野口英世を支援したことで有名
【5】 森山と岡田時太郎の接点は不明だが、明治34年10月号の『建築雑誌』の転居欄に「岡田時太郎方」とあるため、居候していたと思われる。また同誌明治38年3月号の転居欄には「血脇方」と記載がある
【6】 後藤新平【1857-1929】愛知県医学校で医者となり、24歳で学校長兼病院長となる。明治15年、その実績と才能から内務省衛生局長に入り、医者よりも官僚として活躍する。明治31年、台湾総督府民政長官となり、明治39年、南滿洲鉄道初代総裁に就くまでの間、台湾の都市基盤整備、阿片・マラリアの撲滅など、医師ならではの衛生・都市政策を行った
【7】 血脇の長男・日出男氏の回想による
【8】 辰野金吾推薦説については、『建築人国雑記』【高杉道清太郎著、日刊建設工業新聞社／1973】、『師と友—建築をめぐる人々』【森井健介著、鹿島出版会／1967】に記述がある
【9】 尾辻國吉「明治時代の思ひ出」【台湾建築会誌】1941.8
【10】 中條精一郎「台湾の建築」【建築画報】1915.1
【11】 『総督府物語』黄俊銘著【遠足文化事業股份有限公司／2004】



蜂須賀侯爵邸 [1927]
RC造2階建。外観はツタに覆われ細部意匠はよく分らなかったが、内部は極めて保存状態が良かった。昭和62年に解体された[写真：筆者]



左**米井商店 [1929]**
RC造6階建。豊かなスクラッチタイルとテラコッタは、昭和59年に改装された[出典：『美の彷徨ーテラコッタ』伊奈製陶／1983]
右**朝日石綿ビル [1932]**
RC造6階建。当初は復興建築助成会社であった。羊の頭や中世風の意匠でテラコッタ建築として有名だったが、昭和63年に解体された[写真：筆者]



東京歯科医学専門学校 [1929]
上ー外観：SRC造6階建。建物の前面に歩道橋があり、スクラッチタイルの質感を間近に見ることができた。汚れるほどに風格を増す、時の流れに耐え得るモダンデザインだったが、昭和61年に解体された
下ー大ホール：玄関ホールの奥に回廊に囲まれた大ホールがあり、学校行事を行う大講堂として用いられた。重厚さとモダンが共存し、トブライトから光が入る明るい空間だった
[出典2点とも：『建築写真類聚 第6期 第23回 学校建築 巻3』[洪洋社／1929]]

【12】 カーン式鉄筋コンクリートカーバーという鉄筋を桁に組んでカマボコ型のフロアタイル鋼を置き、コンクリートを打設する独特なシステム。関東大震災で被害を受け、以後衰退した
【13】 昭和19年の『台湾建築会誌』に掲載された座談会では、北投温泉は藤井某の設計で、森山は設計を監修したとされている

南国らしい華やかさに中央政府の威厳が備わった。床にカーン式鉄筋コンクリート**【12】**を用いるなど、構造面でも先進的であった。

他の作品は台湾総督府新庁舎の仕事と並行して進められたが、どれも森山らしい個性的な意匠で興味深い。台中、台北、台南の各州庁の意匠が異なっているのも面白い。これらは南国の建築らしく通風が良い。さらにマンサード屋根は通風による冷却効果をねらったものと考えられる。専売局庁舎、台南法院の設計担当者が文献上で確認できないものの、森山の設計と推定しているのは、その個性的な意匠からである。

この頃課長に推されたが、「印判押すのは嫌だ」と断った。一技師として自ら設計し、現場も見たかった森山にとって、地位や名誉は眼中になかった。台湾総督府新庁舎竣工後、森山は52歳、「もう台湾には何もつくるものはない」とあっさり台湾総督府を辞して帰朝したと言われている。しかしその足跡は大きい。森山の台湾での作風は、赤煉瓦に白い石で横縞を入れる辰野式を基調としながら、過大な装飾を施す。この独特な装飾が、赤をラッキーカラーとし万事派手好きな台湾人の趣味や南国の風土に調和している。

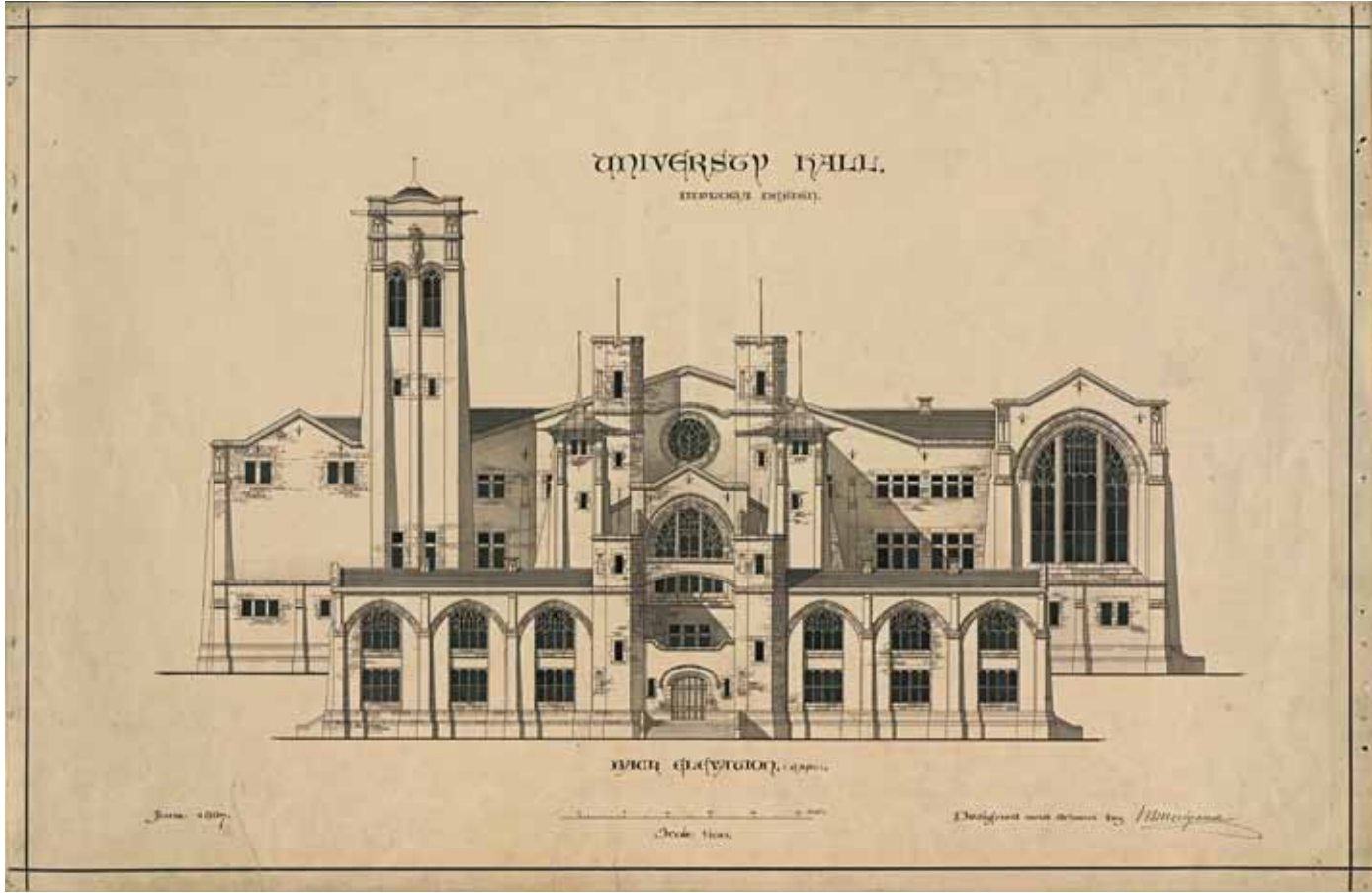
東京で建築事務所を開設

森山松之助は帰朝後、建築事務所を銀座にある義兄の高山歯科医院の一角に開業する。医院の建物は間口3間ほどの2階建てで狭かったが、設計した建築は大小取り混ぜて相当数に及ぶ。しかし、事務所や所員に関する記録は確認できない。

帰朝後最初の仕事が、学習院の後輩だった久邇宮邦彦王の御常御殿である。現在、2階建ての御常御殿と、謁見の間のある平屋を併せて「聖心女子大学パレス」と称しているが、森山が設計したのは御常御殿のみである。昭和24年に大学敷地内で現在地に曳家された。他にも数寄屋風住宅を設計し、また多くの住宅スケッチが残されている。東洋風作品は、東京神田にあった旧中華料理店の杏花楼、新宿御苑に今も建つ台湾閣で、台湾時代の名残を感じさせる。片倉館は、欧州の温泉を視察した2代目片倉兼太郎が、チェコのカールスパートのような施設を実現しようと、地域住民のために建てた福祉施設である。台湾時代に森山が手掛けた北投温泉公共浴場（現・温泉博物館）**【13】**には、プールのような深い浴槽と、洋風建築の中に畳敷の大宴会場があり、これを知った片倉が、森山に設計を依頼したのかもしれない。片倉館の隣に建つ片倉別邸（現・諏訪湖ホテル）は、別邸兼迎賓館として建てられ、洋館は板の間に暖炉が付き、シャンデリアが下がる華麗な意匠であった。対して和館の客室は、久邇宮邸と同じ台湾風の障子もあり、森山らしい意匠となっている。蜂須賀侯爵邸は、戦後しばらくオーストラリア大使館公邸として使われていた。鉄筋コンクリート造らしく南面する窓が広く、室内が明るい。内部はヴォールト天井にステンドグラスといった豊かな装飾で、和室も組み込まれており、鋳鉄の扉がとりわけ美しかった。その他、鉄骨大空間の本所公会堂、佐世保市公会堂、そしてスクラッチタイルとテラコッタによる豊かな装飾に包まれた東京銀座の米井商店、丸嘉ビル、朝日石綿ビルといったモダン建築の佳作も多く設計した。さらに、全く無装飾の明治乳業両国工場や明治製菓銀座売店も設計している。

森山の帰朝後の代表作は、親友・血脇守之助のために設計した、東京歯科医学専門学校であろう。水平連続窓をデザインの基軸として水平線を強調する。それだけでは単調なため垂直線をアクセントとして入れている。装飾はないがスクラッチタイルによる確かな質感がある。垂直連続半円形出窓は相当高価であったと察するが、その見事な構成美により昭和戦前モダニズムの傑作として定評がある。同様に垂直連続出窓を用いた上伊那図書館（現・伊那市創造館）を森山が基本設計をしたことが判明した。

現在残されている資料の中には、森山が施主に増額理由を説明し、苦勞して承認を得る姿がありありと分かるものもある。53歳から72歳までの20年間、施主の要求に着実に応え、どんな建築にも手を抜かず、真摯に設計活動を展開した背景には何があったのだろうか。大正8年には25年間貴族院議員だった父・茂が亡くなり、金銭には困っていなかったと推測されるが、楽ではない設計の仕事がよほど好きだったのであろう。



森山松之助の作風と評価

戦争により建築の仕事がなくなった森山松之助は、空襲が始まった昭和19年に港区高輪から世田谷区代田に転居し、昭和20年、山形県鶴岡市に疎開した。途中、荷物を載せた車両が爆撃を受け、多くの設計図面が失われた。戦後は東京に帰ることなく、昭和24年、鶴岡市の齋藤方**【14】**で逝去した。若い時から結核に苦しんだが満79歳であった。

日本近代建築史を彩る建築家たちは、“古典主義者”、“何々様式を得意とし…”などと1つの様式を追及し完成度を高めたことや、意匠と思想を結び付けて評価される人も多い。しかし日本近代建築の歩みは、西洋の粗積造と様式の急速な導入、地震国であるための構造の工夫と鉄筋コンクリート造の導入、植民地を獲得し地域が拡大したことによる異なる文化・風土への対応と、絶え間ない刺激と変化の連続であった。森山はこれらに柔軟に対応し、洋風、和風、モダニズム、どれも高いレベルでこなした。2つ年上の伊東忠太、長野宇平治、同世代の中條精一郎、鈴木禎次、武田五一らが、最後まで歴史様式の作家であったのに対し、森山が新構造技術やモダニズムを柔軟に吸収していったのは、台湾総督府宮繕課が新進気鋭で鉄筋コンクリート造の先進地であったこと、民間の建築家として限られた予算の中で施主の要望に応える努力をしていたこと、さらに森山自身が欧米のモダンデザインをよく研究していたことが原動力であった。多彩な作風は、老いてなお新しいものを取り入れる気概にあった。

ふるた・ともひさ——横浜市役所・建築史研究者／1963年生まれ。1986年、日本大学理工学部建築学科卒業。1988年、同大学院生産工学研究科博士前期課程修了。同年、横浜市役所勤務。かたわら日本近代建築史の研究を続ける。主な著書：『近代和風建築』[共著、鹿島出版会／1988]、『建物の見方・しらべ方ー近代産業遺産』[共著、ぎょうせい／1998]、『かながわ建築ガイド』[共著、神奈川県建築士会／2003]、『昭和初期の博物館建築』[共著、東海大学出版／2007]、『図説 近代神奈川の建築と都市』[共著、神奈川県建築士会／2013]など。

卒業設計「UNIVERSITY HALL」BACK ELEVATION [1897]
ゴシックを基調に変化に富んだ構成で、細部にフランボワイヤン（火炎式トレスアリー）を用いる一方、至るところで様式の簡素化、直線化を試みている。入り口両側にある、2本の塔の上の反りのある方形屋根が注目に値する。やや不調和だが、日本的なものを表す意図が読み取れる。このモチーフは彼の作品に後も度々現れる
[所載：東京大学大学院工学系研究科建築学専攻]



上伊那図書館（現・伊那市創造館） [1930]
RC造4階建。森山の基本設計図面が数年前、神田の古書店から発見された。設計者名は実施設計を行った黒田好造とすべきだが、この建築の魅力である垂直連続窓が、いかにも森山らしい[写真：筆者]

【14】 彫刻家・齋藤静美の実家。齋藤は彫刻家として銅像などを制作していたが、森山と知り合い、建築鋳物を手掛けるようになった。代表作にニコライ堂の十字架がある

久邇宮御常御殿

竣工年：1924年
所在地：東京都渋谷区広尾4-3-1
構造・規模：木造2階建
【登録有形文化財】



1



2



3

1 正面外観

入母屋に千鳥破風が特徴的である。東側から見ると、1階の大屋根と小振りな2階のバランスが良く、安定感がある

2 殿下御居間

書院造りだが、床、棚、書院は型にはまらず崩されている。くつろぐための部屋でありながら、花頭窓の左にある重厚な帳台構えが、皇族の格式の高さを垣間見せている

3 内謁見室から妃殿下御書斎を見る

内謁見室は楠の1枚板と寄木の床が見事である。絨毯を敷いて使われていたらしく、床の保存状態が極めて良い。花頭窓の障子は細かい棧をあしらった台湾風で、ひときわ織細である。妃殿下御書斎は両側に床の間がある

4 殿下御書斎

窓ガラス上の装飾が美しい。廊下は幅4尺、長さ3間の檜の1枚板である。曳家前は遠方まで遮るものなく見渡せた。廊下との建具も透明ガラスなのは、開けたまま書斎から景色を楽しむためであろう。3枚引き戸の書棚とレコードキャビネットも保存が良い。欄間の透かし彫りは、14弁の菊の家紋とは異なり16弁である



4

御成婚記念御涼亭 (現・旧御涼亭(台湾閣))

竣工年：1927年
所在地：東京都新宿区内藤町11
構造・規模：木造平屋建
【都選定歴史的建造物】



1



2



3

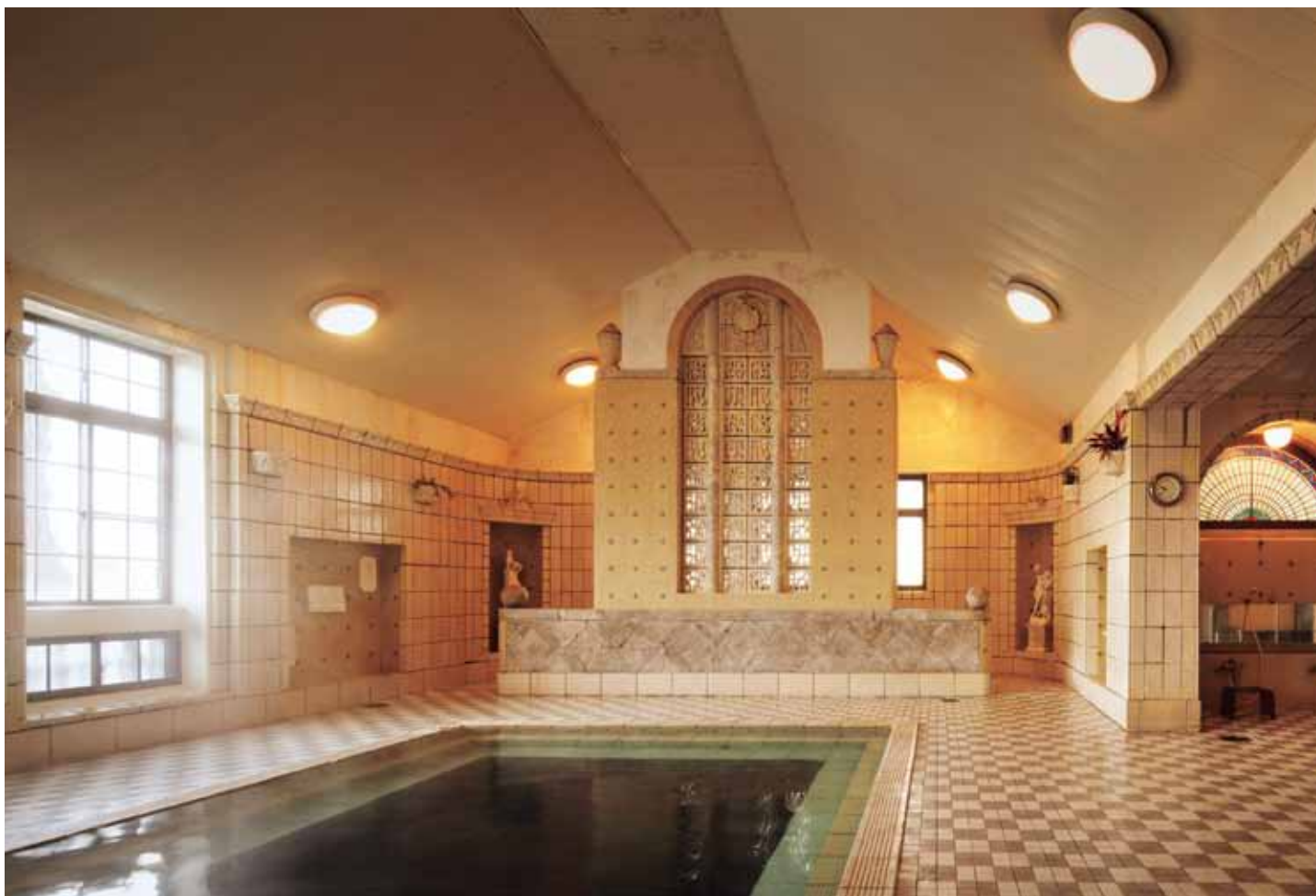
- 1 旧御休息所**
台湾に住む有志が、後の昭和天皇のご成婚を記念して献金を集め、造営・献上した。主な構造材の杉や、天井の鏡板の檜は台湾材で、卍型平面床の敷瓦は中国製である。欄間には、ブロンズ製の格子とガラスを嵌め込んでいる。当初は中国風の家具が置かれていた
- 2 旧控室外観**
円窓と八角窓が互い違いに並ぶのが美しい。屋根を支える持ち送りは、日本では見られない形をしており注目に値する
- 3 玄関の円窓**
「於物魚躍」の文字は「ああ満ちて魚躍れり」との意味で、天子を賛美する言葉である
- 4 池越しに見る**
木造建屋を鉄筋コンクリートの脚で持ち上げ、水の上に建つように見せている。屋根の反りや燕尾、瓦がいかにも台湾風である。かつて開口部には氷裂模様の斬新な意匠の折戸が入っていた。竣工時に台湾総督府から贈られた台湾杉が、背景に大きく枝を伸ばしている



4

片倉館

竣工年：1928年
所在地：長野県諏訪市湖岸通り4-1-9
構造・規模：浴場：鉄筋コンクリート造2階建、地下1階、一部3階 会館：木造、一部鉄筋コンクリート造2階建
【重要文化財】



1



2

3

4

5

1 浴場棟1階大浴場
千人風呂と呼ばれる深さ1mの浴槽の底に石が敷き詰められている。テラコッタのスクリーンやステンドグラスが美しい。彫刻なども西洋風で、昭和初期には類のない洒落た温泉だった
2 同2階休憩室の柱頭の装飾
ビザンチン様式やロマネスク様式で多用される柱頭が、中世風の雰囲気を出す。教会の中でくつろいでいるような、不思議な感覚がある
3 会館棟1階エントランスから見る

会館棟は木造のため、柔らかさを感じられる。1階には6つの客室、調理室と、右手奥には3つの家族風呂もあった
4 同2階大広間
上座の方は折上格天井になっている。大広間が洋風の外観に違和感なく収まっている。204畳の広さは、木造建築としては珍しい
5 片倉館全景
RC造の浴場棟と木造の会館棟は、同じクラッチタイルとテラコッタに包まれながら、趣きが異なり面

白い。会館棟の玄関上に見えるステップ・ゲイブル（階段状の破風飾り）が特徴で、浴場棟にも用いられている。庭園が充実しているのは、中欧の湯治が散歩を重視していることにある
6 浴場棟外観
入り口は45度内側を向いている。RC造の角張った躯体を賑やかに飾るため、ゴシックを基調としながらモダンデザインを随所に取り込んでいる。テラコッタの破風飾りは、モルタルを塗って補修している



6

略歴 Biography

明治2年[1869]	6月7日、森山茂(後の貴族院議員)の長男として大阪に生まれる。姉・愛子は後に高山紀齋(東京歯科大学の前身の創始者)と結婚する	明治31年[1898]	第一銀行建築事務所嘱託勤務。清水喜助の第一銀行を実測する	明治44年[1911]	台湾総督府新庁舎工事主任となり、工事にかかる
明治22年[1889]	学習院尋常中学校を卒業。久邇宮邦彦王は学習院の後輩。第一高等学校に入学	明治33年[1900]	東京歯科医学校の理学・化学講師、東京高等工業学校講師を勤める	明治45年[1912]	大阪中央公会堂コンペに参加するも提出後撤回。欧米視察に出発
明治26年[1893]	結核のため1年遅れて第一高等学校を卒業。帝国大学工科大学造家学科入学	明治34年[1901]	明治38年まで、岡田時太郎家に居候する	大正2年[1913]	帰国
明治30年[1897]	結核のため再び1年遅れて帝国大学工科大学造家学科を卒業。卒業論文は「小屋組みの応力と寸法決定法」、卒業設計は「UNIVERSITY HALL」。共に武田五一を抜いて首位を占める。大学院に入学し、「造家上換気及び暖房」を専攻する	明治37年[1904]	建築学研究会発行の建築学講本で、日本建築沿革史、建築材料、建築施工法、建築構造強弱学を執筆	大正9年[1920]	以前から実質上妻であった西尾朝と正式に結婚する
		明治39年[1906]	台湾総督府官繕課嘱託となる	大正10年[1921]	台湾総督府を辞職し、帰朝する
		明治40年[1907]	台湾総督府新庁舎コンペで、長野宇平治案が甲賞なしの乙賞となる。森山は1次入選	大正11年[1922]	銀座の高山歯科医院の一角に建築事務所を開設する
		明治43年[1910]	台湾総督府官繕課土木技師となる	昭和19年[1944]	港区高輪から世田谷区代田に転居する
				昭和20年[1945]	山形県鶴岡市に疎開する
				昭和24年[1949]	齋藤方で逝去(79歳)

主な作品 Works

●印は現存

明治39年[1906]	東京歯科医学院(東京) 血脇守之助邸および診療所(東京)	昭和3年[1928]	明治乳業両国工場(東京) ●片倉館(長野)【重要文化財】 ●片倉別邸(現・諏訪湖ホテル)(長野) 蓬萊家旅館(東京) 逸山薬局(東京) 東京市芝浦火力発電所(東京)	昭和5年[1930]	鉄道工業会社(東京) 豊玉ビル(東京) ●上伊那図書館(現・伊那市創造館)(基本設計)(長野)
明治40年[1907]	東京勲業博覧会台湾館(東京)		東京市芝浦火力発電所(東京)	昭和7年[1932]	東京弁護士会館(東京) 朝日石綿ビル(東京) 佐世保市公会堂(長崎)
明治42年[1909]	台北市電話交換局(台湾・台北) 土木部庁舎(台湾・台北) 交通部(台湾・台北) 水道課長官舎(台湾・台北) ●台北水道ポンプ室(現・自來水博物館)(台湾・台北)【三級古蹟】	昭和4年[1929]	●米井商店(東京) 片倉生命福岡支社(福岡) ●丸嘉ビル(東京) 杏花楼(東京) 博正ビル(東京) 木下旅館(東京) 血脇守之助邸(東京・千駄ヶ谷)	昭和8年[1933]	常盤松御殿(東京) 明治製菓銀座売店(東京) 明治製菓大阪支社(大阪)
明治43年[1910]	名古屋博覧会台湾館(愛知) 血脇守之助邸(東京・代々木) 台南郵便局(台湾・台南)			昭和9年[1934]	明治製菓大阪支社(大阪)
明治45年[1912]	台湾ガス株式会社(台湾・台北) 基隆郵便局(台湾・基隆)			昭和10年[1935]	片倉生命大阪支社(大阪)
大正2年[1913]	●台中州庁(現・台中市政府)(台湾・台中)【市定古蹟】 ●台湾総督官邸改修(現・台北賓館)(台湾・台北)【国定古蹟】 ●台南法院(推定)(台湾・台南)【二級古蹟】 ●北投温泉公共浴場(現・温泉博物館)(台湾・台北)【三級古蹟】			昭和12年[1937]	古稀庵(神奈川)
大正4年[1915]	●台北州庁(現・監察院)(台湾・台北)【国定古蹟】			昭和13年[1938]	藤田邸(不明)
大正5年[1916]	●台南州庁(現・国立台湾文学館)(台湾・台南)【国定古蹟】 齋南教会(台湾・台北)			昭和16年[1941]	血脇守之助邸(東京・代々木)
大正8年[1919]	●台湾総督府新庁舎(現・総統府)(台湾・台北)【国定古蹟】				
大正11年[1922]	●専売局庁舎(現・台湾菸酒公司の本社)(推定)(台湾・台北)【国定古蹟】				
大正13年[1924]	●久邇宮御常御殿(東京)【登録有形文化財】				
大正14年[1925]	東京市電気研究所(東京)				
大正15年[1926]	●本所公会堂(現・両国公会堂)(東京)				
昭和2年[1927]	●御成婚記念御涼亭(現・旧御涼亭(台湾閩))(東京)【都選定歴史的建造物】 高島邸(不明)				



学習院尋常中学校時代の森山松之助と姉の愛子 [所蔵：森山慶之助]



森山家の墓
森山自らデザインした墓石で、球形は昭和初期のモダン建築によく用いられた

取材協力：財団法人片倉館／環境省自然環境局新宿御苑管理事務所／聖心女子大学／東京大学大学院工学系研究科建築学専攻
訂正とお詫び：本誌no.1のジェームズ・マクドナルド・ガーディナー特集において、12頁キャプション1「シザーストラス」は「トラス構造」、
キャプション2「人間、牡牛、雄牛、鷲…」は「人間、獅子、牡牛、鷲…」、14頁略歴の「明治16年 長女ヘルダ・ホートン生まれるも2カ月前で早世」は「明治17年」、
「明治17年 長男ローレンス生まれる」は「明治16年」でした。訂正してお詫びいたします。
その他：特記のない写真は、フォワードストローク

香川県庁舎

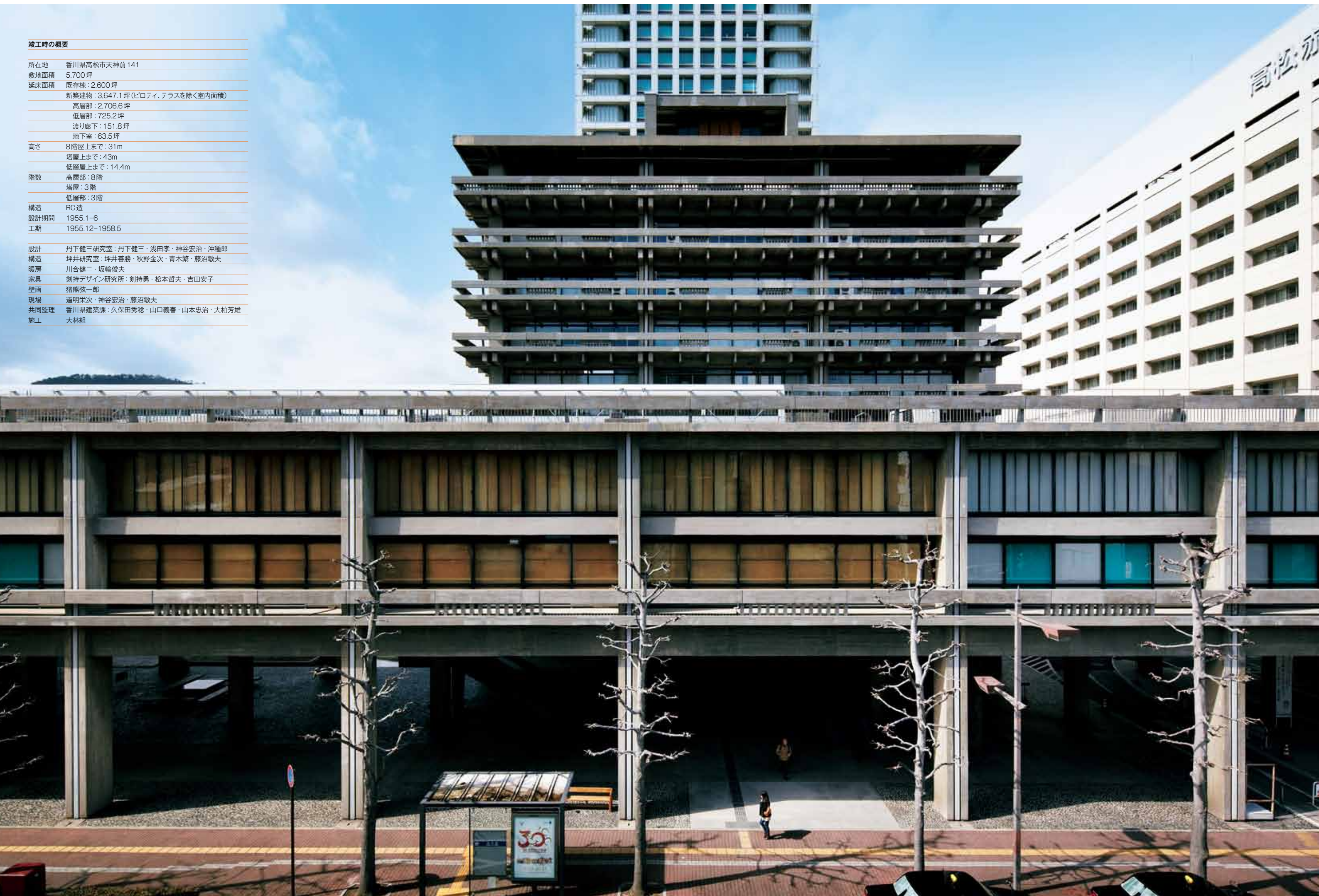
近代日本の建築界でエポックメイキングであった作品を解説する「建築ソリューション」の第2弾は、香川県庁舎(1958年竣工)。建築家・丹下健三の代表作として世界的に知られる名作である。

香川県庁舎が持つ歴史的な意義は、戦後の民主主義にふさわしい“開かれた庁舎”を目指したこと。そして復興を遂げつつあった当時、鉄筋コンクリート構造による日本の伝統的な表現の可能性を模索したことにある。木割りを思わせる柱・梁による繊細かつ力強い造形美を見事に結実させた。1階をピロティとして庭園につなげるなど、市民に開放された公共空間を積極的に取り入れた。高層棟と低層棟の組み合わせによる構成は、1950年代から70年代前半の庁舎建築のモデルとなり、アメリカやアジアの建築家にも大きな影響を与えた。また、日本のモダニズム建築を代表する文化遺産として後世に伝えるDOCOMOMO100選にも選ばれている。丹下健三・生誕100年にあたる記念の年に、この建築の計画から完成に至るまでを再考したい。この香川県庁舎の精神をどう引き継ぐべきなのか。

竣工時の概要

所在地	香川県高松市天神前 141
敷地面積	5,700坪
延床面積	既存棟：2,600坪 新築建物：3,647.1坪 (ピロティ、テラスを除く室内面積)
	高層部：2,706.6坪 低層部：725.2坪 渡り廊下：151.8坪 地下室：63.5坪
高さ	8階屋上まで：31m 塔屋上まで：43m 低層屋上まで：14.4m
階数	高層部：8階 塔屋：3階 低層部：3階
構造	RC造
設計期間	1955.1-6
工期	1955.12-1958.5

設計	丹下健三研究室：丹下健三・浅田孝・神谷宏治・沖種郎
構造	坪井研究室：坪井善勝・秋野金次・青木繁・藤沼敏夫
暖房	川合健二・坂輪俊夫
家具	剣持デザイン研究所：剣持勇・松本哲夫・吉田安子
壁画	猪熊弦一郎
現場	道明栄次・神谷宏治・藤沼敏夫
共同監理	香川県建築課：久保田秀稔・山口義春・山本忠治・大柏芳雄
施工	大林組





15 頁一庭から高層棟を見る | 16-17 頁一東側から見た香川県庁舎外観：高層棟を背後に、ピロティを持つ議会棟を道路沿いに配置し、どこからでもアクセスできるようにした。これが市民に開かれた庁舎建築のモデルとなった | 18-19 頁一低層棟ピロティ：戦後の民主主義の象徴として市民に開放された空間。幅 18.7m、長さ 98.8m、階高 6.9m。木製のいす、石のテーブルは竣工時のまま | 20 頁一庭から低層棟を望む：池の立石は「豊稔のシンボル」 | 20 頁下一高層棟屋上から庭を俯瞰 | 21 頁上-1 階南側ロビーから庭を見る | 21 頁下-1 階南側ロビーを中 2 階から見おろす：このロビーは竣工時から市民の憩いの場となっている。木製の長いす、スツール、新聞掛け、書棚のデザインは丹下健三



平和と民主主義の建築

55年前、瀬戸内海を望む小さな都市に作られた小さな県庁舎がどんな意味を持っているのか、改めて考えてみよう。
もちろん世界にとっても地元にとっても様々な意味を持つが、ここでは日本の戦後の社会と文化において香川県庁舎がどんな働きをしたかに絞って考えたい。

まず社会的な動きから。

今、訪れても、別に何も感じない市民がほとんどに違いない。歩道から直接、3階建ての建物の下を通り、中庭に出て一休みしたり、県庁に用事がある時は建物の下のオープンな空間に置かれた案内所で訪れるべき課の場所を尋ね、教えられたとおりに別棟に進み、エレベーターに乗り、用が終わると1階に戻ってロビーの椅子に腰かけ、雑誌を読んだり中庭をポーッと眺めたり、そんな県庁体験は当たり前過ぎて、私だって建築の歴史について研究していなければ、何も思わなかったに違いない。

香川県庁舎の社会的な衝撃を知るには、戦前までの県庁舎の建築を思い出してもらえばいい。たとえば、近くなら昭和4年に作られた愛媛県庁舎がある。

昭和初期、世界でも太平洋の両岸のアメリカと日本でのみ流行したスパンニッシュ様式によって飾られ、今となっては貴重な歴史的遺産となっているが、周囲の街との関係も建物自体の形も香川県庁舎とはまるで違う。

まず、街の通りから少し距離を置いて建てられているから、来訪者は左右対称の、それも中央にドームの載る建物に向かって正面から進み、玄関の車寄せに到り、階段を上がり、玄関ホールに入り、受付を済ませ、簡単な用事なら1階で済むが、少し大事な時は、正面にデンと控える立派な石張りの階段をまた上がり、やっと用向きの部屋の前立つことができる。

特徴を箇条書きにするなら、戦前の、正確に言うと明治以後昭和戦前までの県庁舎は、県庁舎だけでなく市庁舎も国の省庁の建物も、

- ①市街の道から少し離し、前庭的な空間を設ける。
- ②左右対称とし、中央に目立つ塔と車寄せを設ける。
- ③階段を上がって入り、中に入っても正面に階段が現れる。

という3つの要素を不可欠とした。

この3つの要素を建築史的に見ると、洋の東西と古今を問わず、神殿の作りには他ならない。戦後の市民社会の眼から見ると、権威と儀式のための作り。戦前の官庁はそういう衣を纏って人々に接していた。

そして敗戦があり、戦前への反省があり、“平和”と“民

主主義”と“市民社会”の戦後がスタートする。戦前までの神殿のごとき庁舎に代わる戦後の新しい庁舎建築はいかにあるべきか。この問いに戦後初めて答えたのが、金子正則知事に設計を依頼された丹下健三だった。

丹下は、先に述べた3つの逆を行った。

まず、街との間に距離を置かず、門も塀も仕切りすらく、建物の中にスーッと入って行く。これが可能になったのは、ル・コルビュジエが20世紀建築の条件の第一に置いた“ピロティ”のおかげだが、実はル・コルビュジエもこれほど効果的なピロティは実現していないから、丹下のル・コルビュジエ理解の深さが偲ばれよう。ブラジルのルシオ・コスタが晩年のル・コルビュジエに“先生の次はだれか？”と聞くと、“タンゲ”と答えたというが、本心だったろう。

建物自体の構成は、左右対称を拒み、ピロティに載る水平の箱（議会と市民の集まりの棟）と、縦長の箱（部や課が入る行政棟）を少し離して組み合わせ、それもL字に組み合わせ、L字のタテとヨコで中庭を囲む。もちろん、平面上も立面上も非対称だし、目立つ車寄せはなく、街のどこからも入って行けるように見える。

建物に入るための階段はない。行政棟のエレベーター前のロビーに2階へ上がるための階段が付くが、権威的な印象は漂わず、登りやすい傾斜といい軽い作りといい、“さあ上がって来てください”と招いているように感じられる。

以上の3つの作りにより、丹下は市民に開かれた県庁舎を作ることに成功し、以後、日本の自治体と中央官庁の庁舎は、香川県庁舎方式を取り入れ、当たり前となったのは、丹下のデザインが日本の官公庁建築を完全に変えた証しなのである。

教会、官公庁、銀行、オフィス、住宅などなど建物の用途ごとの別をビルディング・タイプ（建築型）と言うが、丹下は戦後の官公庁のビルディング・タイプを決めた。こんな働きをした戦後建築家は他にいないし、丹下自身も、ビルディング・タイプを決めるほどの幅広い影響を与えたのは香川県庁舎しかない。

次に、文化史上の成果について。

2つある。一つは絵画と建築の関係についての成果。20世紀建築は、建築と他の造形表現との融合にことのほか苦心してきた。絵や彫刻や工芸や庭園とどう融合し、総合芸術としての建築の地位を再び獲得すればいいのか。20世紀建築以前にはそんなことは当たり前で、画家、彫刻家、工芸家などなどを総動員して一つ



低層棟のピロティから高層棟を見る

の空間を作るのが建築家の役目だったが、20世紀建築の“白い箱に大ガラス”の姿には絵も彫刻も工芸も取り付くシマがなくなり、それではならじと建築家たちはモダンな画家や彫刻家などとの協同を試みるが、上手くいかない。絵は額を、彫刻は台座を好み、他人の作った建築の中に部分として座を占めるような作品を作らなくなってしまった。

こうした中で、丹下に依頼された猪熊弦一郎は、丹下の空間と一致する見事な壁画を制作した。抽象的でありながら分かりやすい図柄といい、打ち放しコンクリートと対比的でお互いを引き立て合う色といい、陶の材感といい、これ以上の組み合わせはないだろう。庭や工芸的な部分（陶の椅子や水道の蛇口）は、丹下事務所の神谷宏治が担当し、棚などはシャルロット・ペリアンがデザインし、日本で初めて、総合芸術としての内実を持つ20世紀建築が誕生した。

もう一つは、日本の伝統と現代の関係についての成果。

20世紀という“科学技術の世紀”、“国際的な世紀”にとって、自国の伝統は難題として立ち現れ

る。過去のものとして安らかに葬ればいいのか、そうでないとする20世紀の国際的な表現の中にどう生かせばいいのか。文化の諸分野がこのテーマと格闘し、建築界においても、戦前から、藤井厚二、吉田鉄郎、堀口捨己、アントニン・レーモンド、前川國男、坂倉準三ほかが取り組む中で、一番大きな成果をあげたのは丹下の広島ピースセンターと香川県庁舎の2つだった。

丹下は、日本の伝統の木造建築が垂直の柱と水平の梁の一体的組み合わせからなることに着目し（ヨーロッパ建築は壁の上に梁が乗るのが普通）、打ち放しコンクリートに置き替え、しかしそれだけでは倉庫のようにただ実用的表現にしかならないから、柱と梁の骨組みに小さなバルコニーを出し、勾欄を付け、さらに香川県庁舎の場合は、軒柱木状の支えを張り出し、20世紀ならではのコンクリート表現と木造の伝統美学を一体化させることに成功した。

以上のようにして、瀬戸内の海を望む小さな県庁舎は、日本の社会と文化に大きな実りをもたらしてくれた。

ふじもり・てるのぶ——建築史家・建築家／1946年生まれ。東北大学・東京大学大学院修了後、東京大学生産技術研究所教授となり、現在、工学院大学教授。専門は日本近代建築史研究。
主な著書：『建築探偵の冒険 東京篇』[筑摩書房／1986]、『日本の近代建築 上・下』[岩波書店(岩波新書)／1993]、『丹下健三』[共著、新建築社／2002]など。

特集 [鼎談]

新時代に挑戦した
先駆者



●ゲスト●
神谷宏治
Koji Kamiya
建築家(左)

佐藤竜馬
Ryuma Sato
香川県文化財専門員(右)

●聞き手●
古谷誠章
Nobuaki Furuya
建築家



日本文化の未来のために、 香川県庁舎は 持続可能であってほしい。

雑誌で見た
広島平和記念カトリック聖堂

古谷 | このシリーズは、日本の近代を通じて、エポックメイキングだった建築を取り上げて、それが成立した経緯、背景、その頃の日本人の考え方、あるいは機運のようなものをお尋ねしながら、どのようにしてその建築が出来上がっていったのか。そして、その後、どのような影響を与えていったのかという辺りの話を、当時はよく知る方に伺うことがひとつのキーになっております。今日は神谷宏治先生と、香川県から文化財専門員の佐藤竜馬さんをお招きしました。

神谷先生の香川県庁舎とのかかわりは、いろいろところで文章にもなっていますし、インタビューなども掲載されていますので、今更、詳しくお尋ねするまでもないのですが、今日は本誌の読者のために少しかいつまんで、先生のご経歴と建物とのご関係をお聞かせください。まず、神谷先生は1928年、東京のお生まれで、高校は旧制静岡高校に行かれたんですね。確か、同級に岡田新一さんがいらっしゃった。

神谷 | そうです。一昨日も会いました。古谷 | そうですか。1928年は、優秀な建築家をたくさん輩出していると言われていますが、その後、東京大学に進まれると、今度は横文彦さんが同級で、戦後を代表する建築家の当たり年なんですね(笑)。伺うところによりますと、本当は飛行機の設計をなさりたかったそうですね。

神谷 | そうなんです。高等学校へ入学して数ヶ月は寮にいたのですが、終戦になって、9月から授業は再開したものの、もう飛行機にかかわるのは絶望的でした。どういう職業に就くかは、全くあてもなく1年が過ぎ、そして遊んでいるうちに落第しましてね、1年余計にやっています。ある時、本屋さんで建築の雑誌をバラバラめくっていたら、たまたま広島島の聖堂のコンペの結果が出ていて、最初に目についたのが丹下(健三)先生のバラボラ型のデザインで、エキゾチックで非常にきれいだった。こんなに面白い世界があるのかと思いました。考えてみたら、父親が家の改造とか増築が趣味だったものですから、子どもの時に大工さんがしょっちゅう出入りしていた。僕がまねごとで何かをつくって見せると、結構褒めてくれるわけです。そういうことが、多少、建築に興味を持つきっかけになっていたかもしれない。建築って面白いなと思ったことが、東大の建築を受けることにつながったと思います。

古谷 | そうでしたか。確か、下町の方のお生まれでしたね。お住まいの辺りは空襲に遭われた？ 終戦の頃の風景はどういう感じだったのでしょうか。

神谷 | 一面の焼け野原で、私は家族の半分を失いました。空襲は砂ぼこりがすごくて、気が付かないうちに目に入りましてね、眼球が痛めつけられて、しばらくはよく物が見えなくて、探したくても見えないんですよ。

古谷 | それはそれは…。そして東大の建築科に入られたら、その丹下先生がいらして驚かれたそうですね、

その後は実際に丹下研究室に進まれる。卒業後は、何と、いったんは前川(國男)先生の事務所に就職しようと思われたそうですね。

神谷 | 当時、私は大学院に進むつもりはなかったんです。早く実務をやりたいと思いまして、前川先生を紹介していただいた。だけど行ってみたら部屋は満杯で、座るところもない。即座に断られました(笑)。

古谷 | でも、ずいぶん懇切にお話を下さったとか。

神谷 | そうなんです。前川先生は狭い部屋に差し向かいで、これから建築家として生きていくにはどうすべきかを1時間ぐらいいお説教してくれました。自分は大学を卒業したその日にヨーロッパへ出発して、ル・コルビュジエの事務所でも勉強したこと。帰ってきてから日本で仕事を始めて、悪戦苦闘したこと。入所はさせられないけれども、縁があったからと、ひとりの学生を大事に思っ、ご自分の過去の話や教訓的なことを親切に話して下さいました。非常にうれしかったし、すごい人だと思いました。

古谷 | 戦後復興というようなお話もなさったんですか。

神谷 | とにかく相当あがってましたから(笑)、他のことは記憶がないんです。

古谷 | そうですか。でもその後、丹下先生のところに戻られて、香川県庁舎に向かって進むわけですね。ここでいったん佐藤さんにお話を伺いたと思います。佐藤さんは年代的にずっと若返るんですが、今は香川県庁舎とのかかわり、経緯についてお聞かせください。

佐藤 | 私は1988年に香川県庁に就職したんですが、もともとは考古学をやっていたので、地下に埋まっているものばかりに興味があって、地上のものには興味なかったんです。香川県庁舎についても、丹下健三さんが設計したことはもちろん知っていましたが、それがどういう建築なのかは全然知らずに、むしろちょっと古びた感じの建物…程度のイメージしかありませんでした。ところが、5年前に異動で県の観光の仕事をやりに来て、地域の人が自分の言葉で地域の魅力を紹介する“新しいまちづくり型観光”をお手伝いしたんです。そしてまちの魅力を紹介する時には、建築とかまち並み、風景が非常に大事であることを痛感しました。それから、その前、教育委員会にいた時に、香川県の近代化遺産と言いつつ、明治以降の建造物の調査を2年間担当しました。私は近代化にあたって、建築なり土木構造物が物語るいろんなことを考古学の目線で調べていたのですが、非常に面白かったです。その2つを経て、3年前にちょうど香川県庁舎が50周年を迎えるにあたりまして、せっかくなので50周年、半世紀を迎えるわけですから、この香川県庁舎の魅力をみんなに伝えていきたいと思うようになりました。これは仕事ではなかったのですが、県庁職員有志30人あまりの人々と何かやろうということで集まりました。その人たちと一緒に、まずは香川県庁舎がどういった建物かということを確認することから始めました。当時、例えば神谷先生がデザインされた庭ですが、非常



丹下健三 [提供: 丹下都市建築設計]
1913年、大阪府に生まれる
1938年、東京帝国大学工学部建築科卒業
1946年、東京大学大学院修士課程修了
1946-64年、同大学工学部建築科助教授
1961年、丹下健三・都市・建築設計研究所設立
1964-74年、同大学工学部都市工学科教授
1974年、同大学名誉教授
1979年、文化功労者
1980年、文化勲章
2005年、逝去(91歳)。従三位



広島平和記念カトリック聖堂建築競技設計
丹下健三案 [提供: 丹下都市建築設計]

に良い庭であることは、もちろん皆さん知ってはいたんですが、実は地元ではイサム・ノグチがデザインしたとか、重森三玲がかかわったんじゃないかという、いろんな俗説が飛び交っていました。この建築の魅力を正しく知ってもらうためには、やっぱりちゃんと調べ直した方が良いでしょう。そこで神谷先生にお話を聞かせいただき、そういう中で、あの広場は“市民に向けた広場”であることを知りまして、広場の使い方も再認識する必要があるということから、有志のメンバーと一緒に、庭でコンサートを開いたり、いろいろな活動をさせていただきました。

古谷 | ありがとうございます。その50周年の時にまとめたのが、『あのころの香川県庁舎を語る』[1]ですよ。これに、神谷先生と長島(正充)さんとのインタビューを始めとして、考古学的な律儀さで詳細に探求された記録が収められています。これはまさに考古学者の探究心の賜物だと、大変敬服しています(笑)。また後で詳しく伺います。

丹下研究室は アトリエ的な雰囲気活気があった

古谷 | 神谷先生は1952年に学部を卒業されますが、52年というと、確か丹下研究室では東京都庁舎のコンペをされている頃ですね。

神谷 | 大学を卒業して、私は4月から丹下研究室に大学院生として入ったわけですが、すぐ始まったのは外務省のコンペです。

古谷 | それにもかかわっていらっしゃるんですか。

神谷 | はい。横文彦君と一緒に2カ月ぐらい頑張つて、次に、東京都庁舎のコンペが始まりました。西も東も分かりませんから、ただ言われるとおりに図面を描いただけですが…。その年は、秋になりますと、横浜の音楽堂と図書館のコンペがありました。前川事務所が一等になって、現在もあります…。その間に愛媛県民館の設計が始まりまして、最初の年は、いつ起きていつ寝たのか分からないくらいに忙しかった。あの頃は体力があったからのげましたけど、よく働いたと思います(笑)。

古谷 | 丹下先生もお若かった。研究室の中は活気があったわけですね。

神谷 | そうです。非常にアトリエ的な雰囲気、師弟関係ははっきりしていますが、議論の発言は自由にできました。

古谷 | その後、1954年にいよいよ香川県庁舎の設計が始まるんですが、最初は浅田孝さんや沖種郎さん、大谷(幸夫)さんもおいらしたそうですね。そして驚いたことに、設計期間は6カ月ぐらいだったとか。

神谷 | そうです。提出が6月だった。

古谷 | 図面の提出の日付は6月10日付になっていますね。どうしてこんなに短い設計期間だったんですか(笑)。いくら戦後の復興期とはいえ、とりわけ短いですね。

神谷 | 向こうさまのご都合だと思いますが、最後の数カ月は丹下研総掛かりでやりました。最初のページに図面枚数が書いてありますけど、そんなに大量にはなかったでしょう。

古谷 | まず31枚あって、さらに構造図とかそういう図面がありますから。

神谷 | そうですね、全部で50枚くらいになりますね。古谷 | 資料で読みますと、丹下先生は設計する時は陣頭指揮を執るようなことはなさらないで、いつも皆さんがワァワァと自由にお出しになる案をご覧になって、これは…と思ったものについては、いつの間にかうまくまとめ直して作品に仕上げるというやり方だった。ところが、香川県庁舎の場合は、浅田さんも含めて良い案を出しあぐねていた。そんな時に、先生は3日ほどご自宅にこもって案を練られたそうですね。それは始めてから1カ月ぐらいだった頃だったとか。

神谷 | そうです。ちょうど1カ月目ぐらいでしたね。

古谷 | 先生が業を煮やされた…といえますか。

神谷 | スタッフの苦闘をしばらく眺めていらしたんですが、ある時、研究室から姿を消して、2、3日たってから現れた。そしてプランとエレベーションを見せられまして、みんな驚いたわけです。浅田さんは「素晴らしい。これだったらいけますね」と言ったんです。何が素晴らしいかというと、まず議場と大会議室の入る低層棟を道路側に出して、既存棟と同じ高さでピロティで持ち上げて、その間に事務スペースのある正方形の高層棟をずっと立ち上げた。それまで高層棟の付属物のように扱われていた低層棟を、街路ぎりぎりまで迫り出して、それを6.9mという脚の長いピロティで持ち上げて、そこに開放的な空間をつくり出したわけですね。そういう発想はスタッフには全くなかった。結局、考えてみますと、現地に行って知事と話しているのは、丹下先生お一人なんですね。もちろん概要は先生から聞いてはいますけど、丹下研のメンバーは現地には行ってないし、知事の話も聞いてない。だからそう簡単にイメージが出てこないわけですよ(笑)。

古谷 | なるほど。すべて丹下先生経由のお話だったわけですね。

神谷 | クライアントと話したり、地域の周辺状況を見て回ったりしているうちに、だんだんイメージがわいてくるわけですよ。我々には全くそれがなかったものですよ。

古谷 | それは、やっぱり遠かったこともあるんですか？

神谷 | もちろんです。それとお金もなかった。結局、僕が高松へ行ったのは、この図面が入札に掛かって、落札するその日だった。それが初めて。

古谷 | 他のどなたも行かれていなかったんですね？

神谷 | そうです。ですから丹下先生しか分からない。

古谷 | なるほど、それは分からないわけですね。それから、もう一つの難しい問題は、戦後始まった再開発で、県の営繕で設計した第1期から第4期までの既存棟があったことですね。それに合わせて本庁舎を建てる。戦後、焼け野原の更地のようになるところに何かを計

画するのはモダニズム建築としてはよくあったことですが、既存棟があって、それを活かして何かをつくる。そういう課題は、他にあったのでしょうか。

神谷 | 逆にですね、よりどころがあってやりやすかったと…。道路側の低層棟をピロティにして持ち上げて、既存棟と高さを揃えるという丹下先生のアイデアも、既存のものがあるが故に出てきたわけですからね。古谷 | あの背の高いピロティが副産物だったという話ですね。そうですね。

設計のコンセプトと 7つの条件

古谷 | 佐藤さんに伺います。第1期から第4期までは営繕で設計なさって、第5期、いわゆる本庁舎と議会議場を建てる時に、「今度は顔となる建築だから、きちんとした建築家に頼まなくてはいけない」と進言されたのは、讃岐の猪熊弦一郎画伯だそうですね。で、前川先生と丹下先生をご推薦なさって、結局は丹下先生に決まったといういきさつがある…。猪熊先生は1期から4期の構成をどうぞ覧になっていたんでしょうか。

佐藤 | それはちょっと分かりませんが、1期から4期までは県の営繕課で設計をして、施工も自前でやってきたわけですよ。

古谷 | モダニズム建築でしたよね、今はなくなっていましたけど。

佐藤 | 金子(正則)知事は地元の材料を使って、自前でやることになりこだわっておられたんです。おそらく戦後復興の中で、これからはいろいろな庁舎とか関連公共施設を自前でつくっていくかなければならないだろう…。これは想像ですが、金子知事はまず県庁舎を自前でやってみることを経験させたと思うんです。古谷 | 確かに…。ところで、猪熊さんの存在がとても大きいようですが、おふたりはどういうご関係ですか？

佐藤 | 旧制丸亀中学の先輩、後輩の関係にあたりまして、昔からお親しかったそうです。だから、猪熊さんは金子知事の思いをいつも聞かされていたんじゃないかと思います。そして、それにふさわしい人と考えて、前川國男さん、丹下健三さんをご紹介した。ただ、前川さんはその少し前に…。

古谷 | 岡山ですね。

佐藤 | そう、岡山県庁舎を設計しておられた。昔から香川と岡山はライバル意識が強いところですから、海を挟んで両方に似たような建物をつくられても…という理由から丹下さんをお願いしたそうです。おそらくそれだけではないと思いますが、結果として丹下さんの設計によって、県民に開かれた素晴らしい空間をつくり得た。金子知事としては満足だったと思います。

古谷 | 面白いエピソードが紹介されていましたね。猪熊さんは、丹下先生に関西汽船に乗って高松に行くように…と連絡をなさって、その時の船のキャビン、金子知事と同室になるように仕組んだと書いてありました。これはどこから明らかになったことですか？

佐藤 | 金子知事の回想録[2]や、幾つかの資料にそういうことが出ています。猪熊さんと香川県営繕課、後に建築課になりますが、その山本忠司さんが2人で相談をしてセッティングなさったらしいです。

古谷 | それは、丹下先生はご存じなかったわけですか。全く知らないでその船に乗り合わせた？

佐藤 | そうです。丹下さんは、おそらくピースセンターの最終段階の仕事だと思うんですが、広島からの帰りに大阪で途中下車して四国行きの船に乗るように、猪熊さんから連絡があったらしいんです(笑)。

古谷 | それはかなり大胆な発想ですが、一遍に親しくなられたでしょうね。高松までは、結構、時間が掛かりますでしょう(笑)。

佐藤 | 大阪から高松までは4、5時間掛かります。これは丹下さんの回想録[3]にも出てくるんですが、その船で部屋に入ろうと思ったら、表札というか名札があって、そこに「丹下、金子」と書いてあった。つい先ほど知り合ったばかりの人と同じ名前の人がいる…と思ったら、お互いであつたと(笑)。

古谷 | 知事さんの方も知らなかったわけですね？

佐藤 | そうです、知らなかった。

古谷 | それは茶目つ気があるというか、面白い馴れ初めですね(笑)。

佐藤 | 船ですでに意気投合して、いろんな考えをお伝えしたそうです。

古谷 | 高松に上陸した時には、結構、下打ち合わせが済んでいた(笑)。その時にコンセプトと伺いますか、設計の7つの条件を、知事の方から出されたわけでしょうか。読み上げてみますと、①香川の気候風土、高松の環境に合うこと、②観光香川の県庁本館として相応しいこと、③高松の都市計画、プラスになること、④民主主義時代の県庁として相応しいこと、⑤既存庁舎とも融合し、無駄にならないこと、⑥資材は許される限り県内産を活用すること、⑦予算の範囲内の建築費に落ち着くこと…。つまり、単に建築として良いだけではなく、7条件を満たした建築をつくってほしいというわけですね。丹下先生は研究室の皆さんにも、その7つの条件は示されていたわけですか？

神谷 | もちろん聞いています。

古谷 | でもご自分たちは現地には行かないで、想像して設計しておられた。なかなか過酷な課題ですね。

神谷 | そうです。例えば入札にしても、ピロティは結構、背が高くても面積も広いですが、予算の方はそんなピロティを想定していないと思うんです。ですから、僕たちが入札用の図面を描いてから落札するまで、一番怖かったのは面積オーバーです。その分だけ工費がオーバーするんじゃないかと…。ところが、一発で落札したものですから、本当にホッとしたことを覚えてます。

古谷 | 予算内の建築費で納めることも、7つの条件に入っていましたものね。

神谷 | 丹下先生は経験者ですから、オーバーしていることはご存じだったと思います。ただデモクラシーと



東京都庁舎[1957] [写真: 村沢文雄 | 提供: 丹下都市建築設計]



愛媛県民館[1953] [写真: 平山忠治 | 提供: 丹下都市建築設計]

[1] 『香川県庁舎旧本館 取材ノート あのころの香川県庁舎を語る』香川県庁舎50周年記念プロジェクトチーム著[香川県庁舎50周年記念プロジェクトチーム/2009]



広島平和会館原爆記念陳列館(現・広島平和記念資料館西館)[1952] [写真: 石元泰博 | 提供: 丹下都市建築設計]

[2] 金子正則「因縁奇縁」[月刊香川]1959年6月

[3] 「一本の鉛筆から」丹下健三著[日本経済新聞社/1985]

ということについて知事と話をしていますから、知事の期待に応えるためには、何としてもこういう空間をつくらなければならない。それが建築家としての役割を果たすことだ。予算のことはこっちに置いて、とにかくこの設計で提出しようと、かなり強く決心されていたと思います。

古谷 | まず、アイデアとして理想的なものを提示する…。金子知事なら、それに見合うお金は多少なりとも出してもらえる…という読みもあったのでしょうか。しかし、実際は予算をオーバーしていなかった。

神谷 | 一発で落札したわけですからね。

古谷 | それは落札する側にも、ある種の心意気みたいなものがあったんでしょうね。

神谷 | 良く言えば、ゼネコンさんが競争する時に、「これはなかなか面白い、この仕事は取ってやろう」という魅力があったと思います。だから落札したんじゃないでしょうか？

古谷 | 丹下先生は正しい解決をして魅力のあるアイデアをつくられた。それを建設することによって、その価値はみんなに理解されるはずだ。そういう信念だったのじゃないか。

神谷 | それはもう最初から腹をくくっておられたと思うんです。だけど現実には、やはり議会と知事との間で相当の論戦があった。落札して着工した途端、絶えず論戦が起こって、知事はそれをはねのけるのにかなり苦労されたようです。

古谷 | なるほど。でも知事さんの方にも、この建築は素晴らしいものになるという確証があったのじゃないか。そのキーワードは「デモクラシー」、戦後の民主主義だと思うんです。当時はお役所建築といえば、一見して権威的だった…。

神谷 | そうなんです。それまでの役所は、まず、正面に高い塔があって、3mくらいのアプローチの階段がある。玄関を歩いていくと、またすごい階段があって、何だかしゃべるのもしゃべりにくくなるような威圧感があった。それに対して香川県庁舎の場合は、そういうものが全然ない。自由に出入りできるし、誰でも気軽にホールへ入って行って、そこで雑誌などを読んだりすることもできる。前を見れば誰でも入っていける庭がある。そういう近づきやすい空間を計画し、実現できた…。知事がねらったところ、丹下先生がそれに応えたところは、まずそこにあったと思うんです。

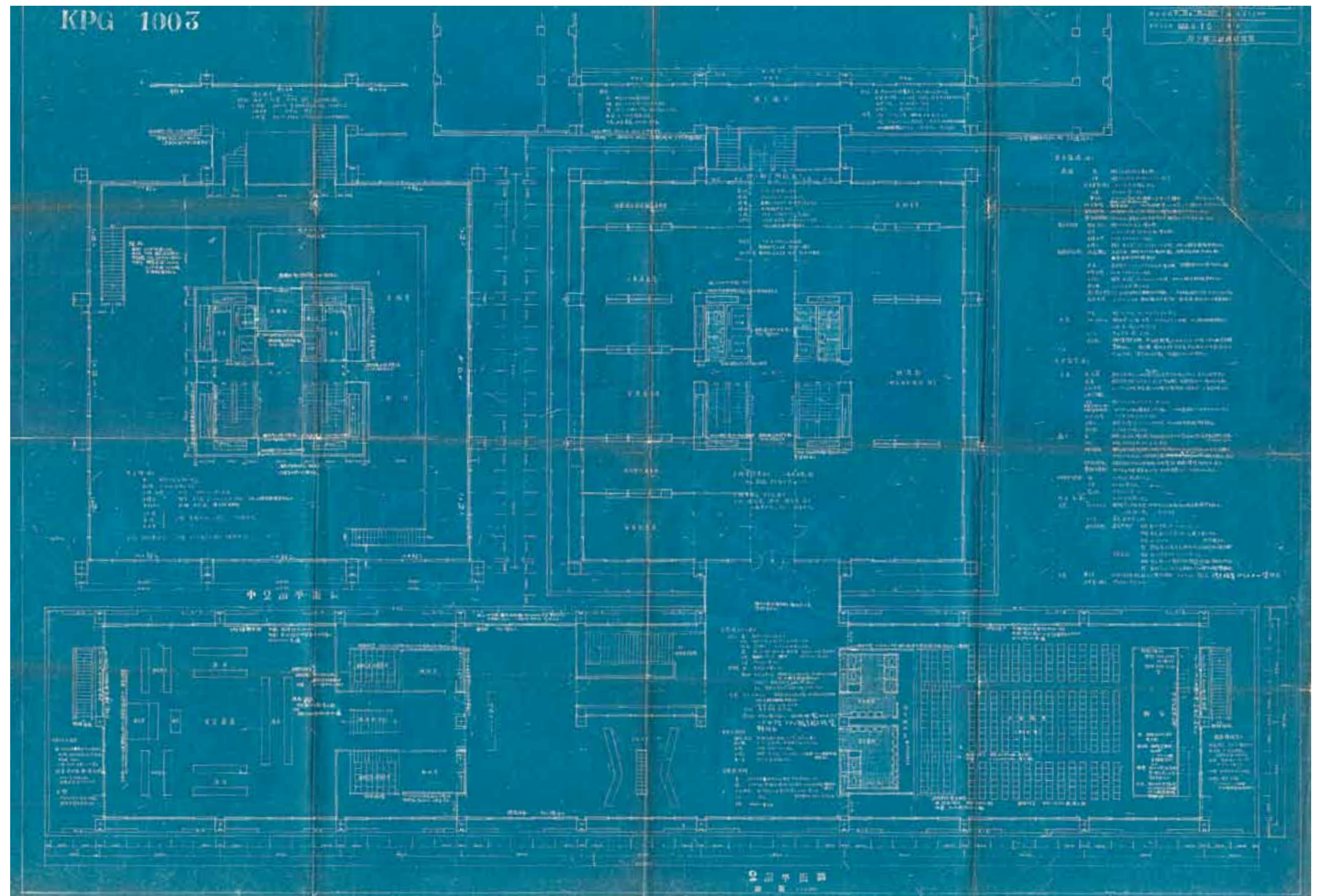
古谷 | 民衆に開かれていて、県庁舎そのものが民衆のためのものであることを、見るからに表現していたわけですね。

金子知事の裁判官時代

ブルーノ・タウトとの出会い

古谷 | 金子知事はきわめてユニークな方なのですが、佐藤さん、その辺のことがうかがわれるものは何かあるんでしょうか。

佐藤 | 金子知事の経歴としては、戦前、県知事になる



前は裁判官をしていたわけです。そして戦後、民主主義の時代になりますと、自分はそれを地方、地域に根付かせるために頑張りたいと、郷里の香川に帰って来られた。例えば憲法が出来た時は、その説明をして回るようなことを、草の根でずっとやっていたわけです。その後、見込まれて副知事になって、後に県知事に当選するんですが、法律家の目として戦前の過ちを繰り返さないように、民主主義をちゃんと根付かせようという思いを、かなり強くお持ちだった。

古谷 | 裁判官時代、(ブルーノ・)タウトの『日本美の再発見』[4]に出合ったそうですね。これは何か背景があったんですか。

佐藤 | 回想録を読んでいますと、平沼(騏一郎)元首相の暗殺未遂事件の執行犯の裁判を担当しまして、「なぜこういうことをやろうとしたのか」と聞いた時

に、その中の1人が「日本の精神を守るためだ」と言いきったそうです。それで、日本の精神とは何か、伝統とは何か…と、逆に突きつけられたかたちになった。自分は今までそういうことを認識したことがなかったので、いろいろな本を取り寄せて勉強した。その中で、タウトに出合った。伝統を理解する、あるいは表現する時に、形から入る道があることを、タウトの本から学んだと書かれているんです。

古谷 | やっぱそれは運命的なものかもしれませんね。建築の美に奇しくも造形があって、丹下先生に引き合わされた。うまくかみ合うようにして起こったんでしょうね。

佐藤 | 詳しいことは分からないんですが、そういう意味では、先輩の猪熊さんの橋渡しといえますか、つないだ役割はかなり大きいですね。

古谷 | 猪熊先生には、設計案についてご相談されたりしていたんでしょうか。

佐藤 | どうなのでしょう。

神谷 | それは分からないな。

古谷 | そうですか。猪熊先生は1階ロビーに陶壁画「和敬清寂」がつけられていますね。先生は当時、日本にはいらっやなかったわけですね。

神谷 | 香川県庁舎の工事をしている時は、猪熊先生はニューヨークにお住まいでしたから、注文はたぶん、郵便だったと思います。

古谷 | そうですよ(笑)。相当、時間が掛かる。

神谷 | こちらの設計資料を送って、それを参考にして4つの面の絵を描いて下さった。実は、その絵が送られてきた時、開いた途端にびっくり仰天したんですよ。絵のスケール、それからタイルの目地割りのスケール、

香川県庁舎第五期工事設計図 中二階及二階平面図 [所蔵：香川県]

[4] 『日本美の再発見—建築学的考察』ブルーノ・タウト著、篠田英雄訳 [岩波書店 / 1939]



玄関ホール陶壁画「和敬清寂」: 正面は「和」を表わしている

「1階の中心、コアの壁面(5.4m×4.5m 4面、5.4m×5.4m 4面)全面に、猪熊弦一郎氏の陶壁画が貼られる。この壁画のテーマは“茶の精神”によったものと言われ、東面(ピロティよりの正面玄関ホール)が“和”南側が“敬”北側が“清”西側が“寂”を表わすものとされている。猪熊氏によれば、“この和敬清寂の精神は、古くからの日本的なデモクラシーの世界であり今日この精神は受け継がれ生かされて行くべきであろう”とされている」[出典: 神谷宏治「香川県庁舎について」『新建築』1959.1]

「さらに感性的な思い出は本館1階の壁画のことである。ニューヨークで活躍中の猪熊弦一郎画伯に壁画のデザインを早くからお願ひしてあったが、なかなか送ってこない。落成式の一か月前に苦心に苦心を重ねたらしい音信とともに原画が届けられたが、その手紙の中に「日本のあるべき民主主義の精神は茶の心である。茶の真髄は和、敬、清、寂である。これを四つの壁面に表現すべくデザインした。この和敬清寂のデザインは、金子さんが渡米、ニューヨーク滞在中、色紙に筆で和と書き置いて帰ったのに端を発する」と書き添えてあった。この建築設計にまったく適応したすばらしい壁面に猪熊画伯の御努力と郷土愛を強く感じ深く感謝するとともに、和は限りなき成長を来たす根源であると常に固く信じ、人にこわれるままに馬鹿の一つ覚えに「和」と書きつけて来たのが、回り回ってこんな形でこの記念すべき郷土の建築の中に生きて来ようとは夢にも思わなかった」[出典: 金子正則「香川県庁舎建設の思い出」『現実と創造 丹下健三1946-1958』丹下健三・川添登編著[美術出版社/1966]]

それが、我々が馴染んでいる現場のスケールとビタリと合っていたんです。

古谷 | すごいですね。

神谷 | 本当にすごい人だと思いました。後で聞いた話では、やはりあの空間の模型をご自分でつくって、その模型の中に自分の絵と目地割りを当てはめながら、何案もつくったそうです。それにしても猪熊先生は我々の現場の状況をご存じないはずですから、絵を見た時は「これはもう神様の仕事だ」と思いました(笑)。

古谷 | 猪熊先生が何かに書かれていましたけど、自分はニューヨークにいるから、スケール感が全く分からない。それをどうしたらいいか、すごく悩まれたと…。

神谷 | 本当にびっくりしましたね。

佐藤 | 金子知事は、かなり最初の段階から、玄関に壁画のようなものをつくって、猪熊さんに頼みたいという思いがお強かったみたいですね。それで、猪熊さんの壁画原画が届いた時には、金子さんは大喜びした。「原画を抱いて寝た」という、まことしやかな噂があったくらいです。

人が集まる庭 民衆のための開かれた建築にするために

古谷 | この庭は初期の段階から、見るだけの庭ではなくて、“人が入る庭”というイメージが共有されていたんでしょうか。

神谷 | 最初の配置図は浅田さんが描いたんです。築山も池も何もない、ただ平らなところに石張りした庭でしたが、真ん中に人が集まってほしいという絵を描いておられて、あの空間が都市の広場として使えることをスケッチが象徴的に示していました。ただ、その段階では予算も何も付いていせんから、単なる絵にす

ぎなかったわけですね。建築工事が始まって1年後ぐらいか、竣工の半年ぐらい前だったか、知事さんが、とにかく庭を開放したいとおっしゃって、かなり大々的に設計変更を行いました。実はですね、庭の工事は、予算の関係ですべて発注されなかったんです。結局、知事の出した結論は、建築費の予算から出すのではなく、香川県の主要な産業である石の業界を県として支援する。その支援のきっかけとして庭づくりに石を使う。そういう戦略で予算を捻出されたんです。ですから、庭の設計とか屋上の設計変更は工事がかなり進んでから行われたんです。

古谷 | 当時の丹下事務所のやり方としては、現場で考えるようなことは、よくあったんですか？

神谷 | はっきりしないところは、とにかくイメージだけ描いておこうと、そういう戦略でした(笑)。

古谷 | 結局、だいぶ後から神谷先生が丹念に設計なさったわけですが、丹下先生ご自身は、この庭のデザインにはあまり凝られなかった？

神谷 | いや、先生はもちろん興味をお持ちでした。しかし、その時は知事と直接話していませんでしたから、意気相通するという感覚がないわけですね。僕は直接知事さんにお会いして、あるいは石屋さんとも会って、山本忠司さんと一緒にあちこち見て歩いたりしていますから、背景に現場体験がかなりありました。丹下先生とはちょっとベースが違うわけです。丹下先生は僕の話聞いて「うん、うん」と言いながら、「それじゃあ君やっごらん」という感じでした。

古谷 | 神谷先生にお任せになっていたんですね。自信はおありでしたか(笑)。

神谷 | それはもう重圧感を感じていました(笑)。

古谷 | 任された方はそうでしょうね。

神谷 | 知事さんと飲みながらいろいろ相談していると、イメージしているのはやっぱり緑豊かな香川の山並みや屋島なんですね。ですから背景というか、道路側には境界の塀をつくる代わりに、そういう地元に親しまれる形態で小さな山をつくろう。それからもう一つ話題に出たのは、香川県はしょっちゅう水不足に悩んでまして、知事さんも「もっと水があれば…」といつも話していた。じゃあ水もテーマにしましょう…と。

古谷 | なるほど、そこで水が出てくる。

神谷 | 広場、山、水…という3つの要素をどうつくるか。早速、研究室に帰って、粘土でいろんな案をつくりました。

古谷 | 2案、3案と順次検討されたようですね。

神谷 | そうなんです。丹下先生も時々ぞき込みながら、これは面白いとか、こんなのダメだとか言いながら…。それである日、山本忠司さんと石を探しに農村へ行ったら、田んぼのあぜ道の傍らに小さな祠ほくらがあって、そこに男根が祭ってあった。五穀豊穰、子孫繁栄のシンボルだったんですね。それが、民主主義といきなりドーンとぶつかったんです。

古谷 | 民衆のエネルギーというか、そういうものを感じられたんですね。

神谷 | 「そうだ、こういうイメージがいい」と。それで北側の池にシンボルとなる石を立てた第5案が出てくるわけです。研究室でいろんな形の組み合わせをスタディしていましたので、実際に庵治の山へ行って、このぐらいの高さと太さの石が出たら教えてほしいと頼んでおいたわけです。ある日、発破を掛けたら、似た形の石が出たという連絡があったので行きました。そしてあちこち注文をつけて出来たのがあの石です。現場ではサイズを微調整するだけでした。

古谷 | 運搬から据え付けまでには、困難を極めたお話があったそうですが、でも無事に庭に安置されて、今では本当に目の焦点を結ぶ良い立石たていしになっていると思います。土着的な石は、“豊穰のシンボル”として池の中に配されたわけですね。シヴァリング…という話をされた時、周りの反応はどうだったんですか。

神谷 | いや、その話は全然しなかった。ネーミングとしては、“烏帽子型の石”。当時は今ほどセックスに対して開放的じゃなかったから、かなり後まで烏帽子型という言葉を使っていました。

古谷 | 特に役所の権威ある表玄関の広場ですから、ある種、配慮が必要ですよ(笑)。とにかく、ここは貴族や権力者が船を浮かべて楽しむような庭ではない。土着の民衆がひたすら豊穰を祈願して建てたシンボル、そういうものによって名実共に、民衆のための広場になり得たということですね。佐藤さんは克明な庭の論文「香川県庁舎南庭の基礎的考察」[\[5\]](#)を書かれています。でも、そもそも、これを書きたいと思ったきっかけは何ですか？

佐藤 | 丹下さん自身が、県庁舎を弥生的な折目正しさ、繊細さをベースとしつつ、縄文的な荒々しさをコンクリートに込めたと説明しています。この対比が面白いと思いました。縄文と弥生という話は興味があって、やっぱり日本の考古学の歩みを見ても、登呂遺跡が弥生文化にはっきりした輪郭を与えた。言ってみれば考古学では一大事件だったわけです。それを建築家の人たちが、あるいは建築界が縄文と弥生を出発点にしているけれども、考古学の間人が考えているのは全く違う世界を表現している。現代の創造的なところに活かしていこうと考えておられることにすごく興味を持って、ちょっと調べたいと思いました。

それから神谷先生から今お預かりして見せていただいているたくさんの模型の写真があります。その模型が、徐々に違っていきますので、どれが最初でどう変わっていったのか。それがちゃんと後付けられたら面白いなと思って、お借りした写真をデータ化して、穴のあくぐらい何回も見つめていたんです。模型は台紙に油粘土でつくられていて築山もつくってありました。考古学的な目で見ていくと、油粘土の油分が残っている様子で、こっちが先でこっちが後だというのが分かってきます。

古谷 | そこが面白いですね(笑)。粘土のシミで…。

神谷 | どういう順序でつくったかなんて、自分ではすっかり忘れてはいるわけですよ。僕が持っている写真は

密着焼きですから小さいし、昔のことだから見てもピロティまでは思い出せない。データ化して引き伸ばしていただくと、そうだった、そうだったって分かってくるんですけど。

古谷 | 考古学的検証がものを言って…(笑)。

神谷 | それでプロセスを整理していただくと、そのとおりなんです。だからびっくりしました。やっぱり考古学ってすごいなと思って(笑)。

佐藤 | 面白いと思ったことが2つありまして、ひとつはピロティの下の空間ですね。最初の頃の案では、そこにも低い築山や芝生のようなものが…。

古谷 | 入り込んでいますね。

佐藤 | それがだんだんきれいに整理されていって、ピロティの空間、庭の空間が別の表現になりながら全体としてつながっていく。それが非常にはっきり見えしましたね。それからもう一つは、一番最初の案は、たぶん、とりあえず…ということまで描かれたと思うんです。

神谷 | 浅田さんの案ですね。

佐藤 | 川添登さんが『建築家・人と作品』[\[6\]](#)に書いておられますが、浅田さんが図面を引きながら「おい、ここに労働者の赤旗が林立するんだぞ」みたいなことを言われたと…。そうしますと、神谷先生が考えておられた民衆の広場のイメージとは、少し違うんじゃないかと思っただけです。その辺りはどうなんでしょうか。

神谷 | 浅田さんはね、現場の段階では、途中で消えちゃったわけ。

古谷 | 昭和基地の建設に没頭された(笑)。

神谷 | そうです。南極の仕事が忙しくなって研究室に来れなくなったから、議論の機会が全然なかった。もし浅田さんがいたら、もっと別の形になっていたかもしれない。

古谷 | でも庭は、現場が始まってから知事が決断されて、いざやりましょうということになった。むしろ浅田さんがいらっしやらなくなってから、実現に向かって動き始めたわけですから、やはり、神谷先生案になったと思います。ところで知事さんが、屋上も開放したいとおっしゃったそうですね、工事中に…。その時の話を聞かせてください。夜の酒席で突然、「屋上も開放できないか」みたいな話になったわけですか？

神谷 | あれもやっぱり、デモクラシーだと思いますね。僕は「屋上を開放するのは難しいです」と申し上げた。「エレベーターは3台しかないですから、県民の方々が屋上に上がる前提で設計していません。ちょっと危ないです」と。知事さんは「それは県の方でコントロールするから、屋上に上がって県民の方々が周りを眺めるアメニティをつくってほしい」とおっしゃった。これは非常に強い言葉で情熱的に要求されたんです。「さて、それでは…」ということになって、研究室に帰って、西側に階段をつくって…。

古谷 | 塔屋のところですよ。私も実は、20年近く前にこの県庁舎を拝見した時に、屋上に上らせていただいて、思いもかけず素晴らしいと思ったことを覚えています。ピロティや1階の部分の素晴らしさはある程



右の立石は、“豊穰のシンボル”

[\[5\]](#) 佐藤竜馬「香川県庁舎南庭の基礎的考察」『香川県埋蔵文化財センター 研究紀要Ⅳ』[香川県埋蔵文化財センター/2011] [\[6\]](#) 『建築家・人と作品 上』川添登著 [井上書院/1968]



高層棟屋上
「屋上は塔屋を中心に、その周囲を廻廊ぶうの軒によって囲まれたスペースで、(中略)塔屋3階の展望台は市内最高のもので、ここからは市内を眼下に瀬戸内海、四国山脈の山々、屋島などが望まれるのである。竣工以来半年の間に、この屋上には県民の6分の1、十数万の人びとが訪ずれている。市内の人々は折に触れてここに上り、郡部の町や村からは団体がバスを運んで、日に何組となく上ってくる。ここはそれらの人々の、金のかからない手ごろなクリエーションの場所なのである。このような公共のスペースの積極的な導入は、金子県知事以下県当局の強力な支持を受けながら実現した」
[出典：神谷宏治「香川県庁舎について」『新建築』1959.1]

度、予想できました。しかし、屋上に上った時には、「こんなに素晴らしい空間があるのか」と、本当に驚きました。それと一周まわっている庇ですね、丹下先生の案を見た時に、浅田さんが「高層棟の高さを強調するために、もう一層増やして、回廊をつくりましょう。そうするとその回廊から、四国の海や山並みがピクチュア・ウインドウになってよく見えるようになる」と言われた。丹下先生も、それは良い案だとおっしゃったとか…。あの庇で切り取られる景色の、気持のいいキリッとした緊張感には本当に素晴らしいと思います。今回も、この鼎談のための見学で、今は立ち入り禁止になっていますが、もう一度、屋上に上げていただいたんです。やっぱりあの屋上に開かれているのと開かれていないのでは、大違いな気がしました。いくら1階がゆったりとした開放的な玄関であっても…。金子知事がそこまで民衆に開くことに強い情熱をお持ちだった訳は何でしょう。例えば、他の市庁舎や公共建築で、そのような情熱をお持ちの方にお会いになったことはありますか？

神谷 | やっぱり金子知事が一番情熱的で印象的です。香川県庁舎の素晴らしい半分以上は丹下先生、半分は金子知事さんに尽きると思います。

縄文と弥生がない混ぜになって両方ある

古谷 | 縄文と弥生の話にいきましょう。たぶん、さっきの田んぼの豊稔のシンボルも、そういう意味で言えば縄文的なものに直接つながっているし、庭の築山の造形も全部、力強さ、土着性みたいなものを持っている。もちろん材料がそういうものでもある。コンクリートで整然と打ち込まれた本庁舎と庭は、好一対をなしていると思うんです。その辺がもう、縄文、弥生を超えた、全体が少し性格の違う、あるいはスケール感の違うも

のが一緒にこの場をつくり上げている、そういう力強さを私は感じるんです。これを考え出した頃の意図としては、この庭とこの庁舎の対比とか、そういうものはどうだったんでしょうか。

神谷 | 丹下先生が「伝統と創造」[7]という論文を、かなり弁証法的な論法で書いておられる。僕はあれを読んでも全然ピンとこなかった。静岡で登呂の遺跡に行つて現物を見ていて、なおかつ、僕は落第して1年間ブラブラしている時に美学の講義を聞いて、日本文化というのは、縄文と弥生が紐のように絡んで共存していると教わり、また体感しています。これは、なまじつかの弁証論よりずっと強い。

古谷 | 丹下先生の「伝統の克服」[8]は、県庁が竣工した際の『新建築』に発表された文章[9]と『朝日新聞』に掲載された文章[10]に加筆したものだそうですが、その中で香川は「弥生的なものをのりこえようとする気持はより強く働いていた」とおっしゃっていますね。「ここでは鉄にかわって、コンクリートが主体になっている、その構造的な合理性のなかで、コンクリートのいのちを捜し出そうとして」…と。桂離宮に見られるような弥生的なものがある一方で、どっしりとした田舎家を持っている縄文的なもの、それを弁証法的に説明されていましたけど、直感的にはそういうものがない混ぜになって両方ある。まさに神谷先生がおっしゃったことと同じ感覚をお持ちだったのではないかと思います。「王朝的な絶対権威と、幕府や軍部の絶対権力の二重の圧力によって、ながくとじこめられ、裏がえしにされていた民衆のエネルギーが戦後、はじめて不十分ではあるが、解放されたのである。この解放されたエネルギーは、まだほとんどはしているが、しかし伝統の否定者、破壊者として、歴史の表面に現れてきた。それはあるいはロックン・ロールへ、またロカビリーへ、と転々とそのはげ口を見出そうとして、ほとんどしている」とあるんですね。その混沌としたエネルギーが、丹下先生ふうには、歴史的必然を持って昔のものを壊していく。何と申しますか、ロックンロールまで引き合いにして、種々雑多、多種多様なものがここに展開し得る。それが民衆のエネルギーとして解放される…とお考えになった。だから、行き着くところは結局、同じことをお感じになっていたんだなと思いましたけど。

神谷 | 香川県庁舎の仕事がくる1年ほど前ですが、ある日、丹下先生が清水寺の舞台を支える木組みの写真を持ってきてみんなに見せながら「次の機会には、これを参考にしてRCのデザインに取り組んでみたいね」とおっしゃったことがあります。今考えてみると、あの提言は丹下先生が長年追及してきたテーマの総決算だったように思います。その発端には丹下先生の処女作と言われる岸記念体育会館があると思います。古谷 | 木造でモダニズムに挑戦されたあれですね。

神谷 | あの設計が終わって雑誌発表した時に、丹下先生はそれから先、大変決め手になる記事を書いているんです。「今日の装飾は、その隅々に至るまで、露にさ

れた構造体自身でなければならぬであろう」[11]と。はっきりね、「露にされた構造」と。
古谷 | これは藤森(照信)さんと一緒につくられた作品集[12]にも出ていましたね。

神谷 | 戦後設計した広島平和記念資料館から始まって倉吉市庁舎に至る作品群には、ラーメン構造のRCに“露わにされた木造的な要素”を組み込んで、伝統を踏まえた新しい建築表現を達成した。香川ではそれに“縄文と弥生”というテーマが加わります。清水の舞台を支える木組みには造形的な美しさだけではなく、縄文的なたくましさもあふれていて、見る者を圧倒しますね。その影響もあつて香川では建築と造園などの設計に縄文を意識しています。これによって総合的に日本の“伝統と創造”という課題に取り組んだと言えるでしょう。処女作以来15年以上の間、粘りに粘った成果が香川でまとまったと僕は理解しています。その持続力はすごい。

古谷 | 丹下先生は大東亜建設記念営造計画、在盤谷日本文化会館計画からずっと、モダニズムの中に日本的なるものをどう表現するか、格闘されていた。それがひとつの結実したものと香川県庁舎がある。例えば高層棟では日本の伝統建築の木割りを想起させる柱と梁による立面が構成されている。軒の深い陰影のある装階のような雰囲気、やっつとモダニズムの手法を持って日本的なるものを表現できたとも我々も思いますし、それはたぶん、丹下先生もお感じになったと思います。

コア・システムとモデューラー・コーディネーション

古谷 | 今の関連で、無限定空間についてお伺いします。当時の丹下研としては当たり前前に議論されていたんですか？

神谷 | あの頃、研究室では1つのテーマでお互いに論文を持ち寄って発表して、その中に“無限定な空間の在り方”、“建築の社会性の問題”など、いろいろ議論しましたので、そういう研究室の状況、考え方が反映していると思います。例えば、柱の位置とスパンを決める時に、建物の機能と空間をどう統一させるか…。それは高層棟で端的に表れてきますが、職員の執務室の機能を満たす空間をどうつくるかなんです。完成後、執務環境の変化に応じて自由に変えることができる空間、それを“無限定空間”と呼んだわけです。機能や用途に応じた空間の在り方をいかにうまく用いていかを繰り返し研究したのが、コア・システムとモデューラー・コーディネーションなんです。

古谷 | これこそまさに神谷先生の功績だと思います。香川県庁舎よりも前は、ル・コルビュジエのモデュロールを基にしていろいろ模索されていて、東京都庁舎まではそれを使われている。ところが香川県庁舎では、それが整理されて完成したというふうには拝見しました。数字もスッキリした数字になっている。僕がすごい…

というもおこがましいのですが、すごいことだと思います。つまり建築でいうと、5mmのディテールのスケールから10mの大きなスパンを決めるオーダーまで、ひとつの数値上で等価にシリーズとして扱われている。そういう美しさがある。これはどんな思いでなさったんですか？

神谷 | 現実に直面して、例えば東京都庁舎でやったような状況を見ていますと、煩雑すぎて現場の職人さんたちが戸惑ったり、製品の規格に合わないために、その場で多少加工をしなきゃいけないという矛盾があったんです。それを既製品のマーケットに通用するサイズに合わせながら、なおかつ黄金比系列の考え方にも適合させるという一種の折衷案、それをつくって、香川でやってみたわけです。例えば、無限定空間である執務空間には可動式の間仕切を入れて、常に変化に対応できるようにしたわけです。また、執務室の外周には、900mm角の太いコンクリートの柱が12本並んでいます。通常の建物では芯々制のために柱の間に壁や窓が置かれず、部屋の中には柱の厚みが飛び出します。サッシュも柱とぶつかるところでは他よりも幅が狭くなって不揃いになる。また、柱によってモジュールの統一感は失われますし、空間の無限定感も損なわれます。それを解消するために、柱を部屋の外側に出して、柱列の内側で自由度の高い空間を展開する内法制の方法を採ったわけです。

古谷 | モデューラー・コーディネーションは香川県庁舎で模範解答を示したことになりますね。ただしその数値というのは、例えば3×6のパネルとか、そういう既製の生産単位と密接に結び付いていないとダメだということですね。もう一つは、人間の尺度に準拠している数字でないといけない。加えて黄金比があり、ル・コルビュジエのフィボナッチ数列化した“モデュロール”の概念がありますね。

神谷 | フィボナッチ級数を適用して縦横軸に同じ数字を配しますと、その交点によってさまざまな形が出てくるわけです。黄金比、正方形、黄金比を2つつなげた黄金比の細長い空間。つまり、個人の小さな部屋から都市の広い領域まで、すべてその黄金比系列に載せて空間配置を考えていけば、小さな家から広場まで連続的に一定の比例で空間が変化、誘導し、展開していく。ひとつの提案としては、かなり意味があったと思うんですが、その後、あまり使われなくなりました。使う機会がなかった。

古谷 | カーテンウォールになったのがいけなかったかもしれないですね(笑)。それこそ自由な立面になりすぎたのかもしれない。構造の柱は元々は木造であれば大した太さにはならないですが、8層、9層になると、コンクリートでつくろうと思えば、それなりの断面になって無視できない。つまり、芯々寸法では無視できない大きさの柱が立ってくる。それも計算に含んだ、そういう数値が必要だったのかなと感じたんです。無視できない幅を持った柱が、戦後の日本が単純に木造をコンクリートに置き換えるわけにはいかなかった理由



岸記念体育会館[1941][出典：『新建築』1941.5]



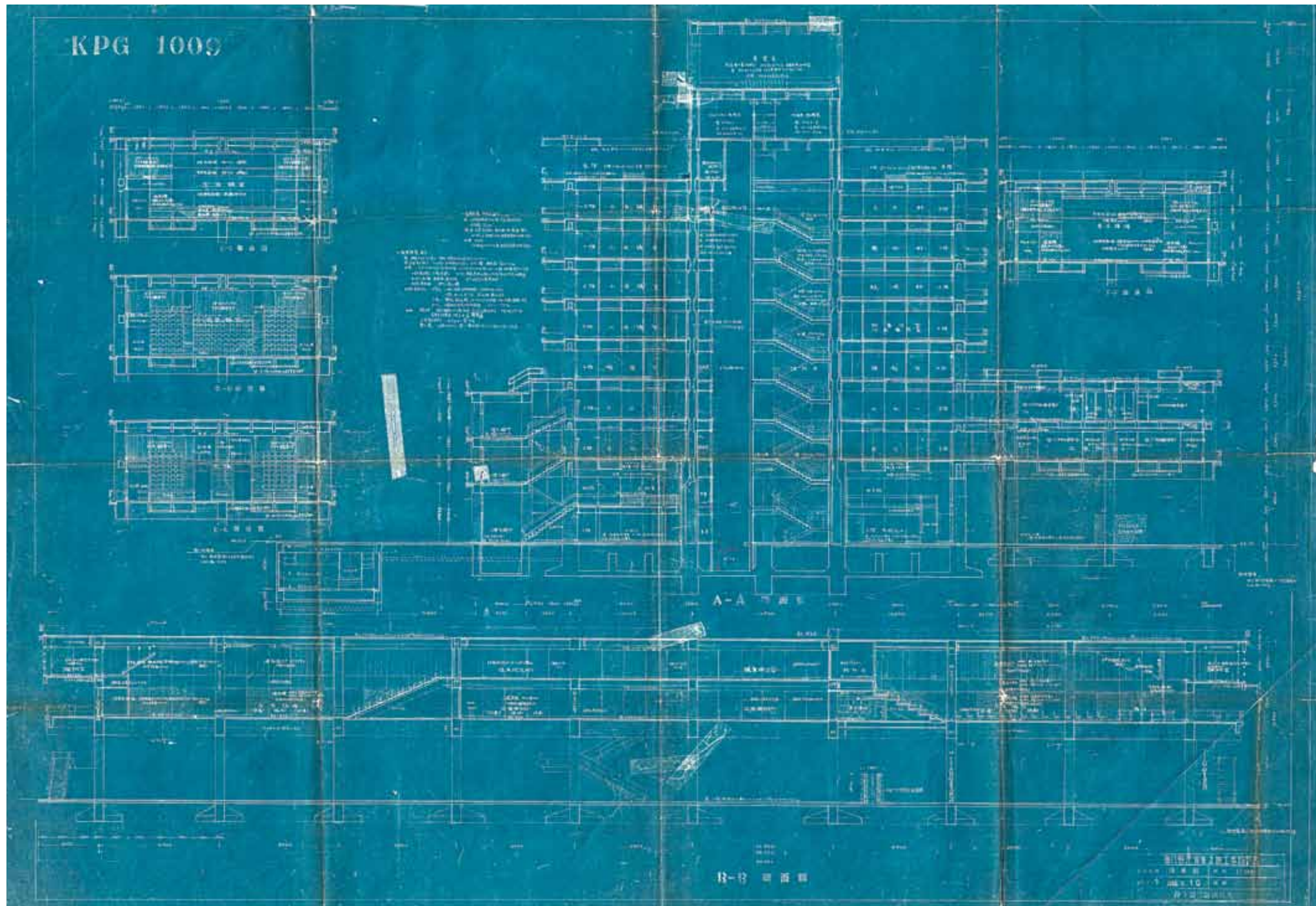
大東亜建設記念営造計画 丹下健三案「大東亜建設忠霊神域計画」[1942][提供：丹下都市建築設計]



在盤谷日本文化会館計画 丹下健三案[1943][提供：丹下都市建築設計]

[11] 丹下健三「岸記念体育会館」『新建築』1941.5

[12] 『丹下健三』丹下健三・藤森照信著『新建築社』2002



香川県庁舎第五期工事設計図 断面図
[所蔵：香川県]



津田塾大学図書館[1954] [写真：平山忠治 | 提供：丹下都市建築設計]

のひとつでしょうね。耐震性の問題もあるし、無視できないほど大きくなっていった時の、ストラグルといいますが、そういうものが香川にはあった。でも結果としては非常に単純なきれいな数字で出来上がっている。スマートなモジュールだと思うんです。佐藤さん、この辺のこだわりに関しては、いかがですか。内法制とか…。

佐藤 | その辺になると難しく、私は十分理解できていませんが、その時代はちょうど尺貫法からメートル法に変わっていく時期ですよ。そういうことが新しい時代に工業化していく中で、今の尺貫法と違ってメートル法で工業製品をつくっていくとか、おそらくそんなことにもらみながら考えられたんじゃないかなと思いますね。それに関連してですね、長島先生からお聞きしたんですが、神谷先生と長島先生と一緒にやられた津田

塾大学の図書館は、芯々制でいっているという話を、囲碁と将棋に例えてうまいこと説明して下さい。津田塾は芯々制なので囲碁のやり方でいったけれど、香川県庁舎は内法制だから将棋の駒のようなかたちで進めていく。そうすると間仕切りをしていく時にも、中で柱が邪魔になつたりしない、出っ張りが邪魔をしない…、そういうことなんだと解説して下さい。なるほどと思いました。

古谷 | 大変明解な、分かりやすいご説明で、今まさにみんながやっている外フレーム工法ですね。柱を外側に出して内側をツルツとつくらないと、中のグリッドに割り込んできちゃいますからね。今はマンションでもオフィスビルでも外側にフレームを出す方法が大はやりですね。香川県庁舎は、まさにその先駆けで…。

神谷 | 今、皆さんストラクチャーとインフィルという言葉

を使っていますけど、まさにその初期的なものです。

古谷 | そうですよ。すごい画期的なことだと思うんです。香川県庁舎以降、いろいろ、姿・形を変えて、表面的な形式だけがいっぱいコピーされていますね。

庁舎が執務空間を超えた生活の場だと…

古谷 | 竣工時の『建築文化』に書かれた記事[13]、なかでも神谷先生がル・コルビュジエの「伽藍が白かったとき」を引用して設計主旨が書かれていますね。「伽藍が白かったとき」は、権威がつくる建築ではなく、市民のための建築ということだと思うんですが、神谷先生の文章の書き出しはとても印象的でした。「こ

の庁舎の1階部分は、公衆のスペースとしてすべて開放されている」、この一文でほとんど全部を言い尽くしている気がします。さっきの7つの条件の中でも、民主主義を体現することがひととき大きな意味を持っていたわけですね。また、大きな催しがある時は、「県庁ホールが講演会場に選ばれ、1階の展示スペースが物産陳列場に、ピロティが待合や受付に、庭が接待場に当てられるだろう」とお書きになっている。それから屋上の展望台は、市民にとって「気易く、金の掛らない手頃なレクリエーションの施設として絶え間なく利用される」のではないかと。さらに「いろいろな社会的な事件、様々のドラマがここを舞台として展開され、繰返されながら、ここに庁舎と民衆の生活的な交流の歴史として刻まれ積み重ねられて行かねばならない」。なかでも特に、庁舎は「事務的な用を足すだけのものを超えた、様々な生活を体験するだろう」、庁舎は執務空間を超えた生活の空間だ…とお書きになっている。職員はもちろんですが、そこを訪れる市民にとっても生活の場になる…と。これは今聞いても斬新です。今はむしろ後退しているかもしれない。本当に核心を突いた内容が、この短い神谷先生の文章に書かれていますね。

神谷 | それは『新建築』で藤森さんと対談した時に申し上げた[14]けど、いわば作業仮説として、将来こういう社会的なニーズが発生するだろう、それに対してこういう空間を用意しておこうと、知事や丹下先生や我々が想定してつくったものです。

古谷 | しかし、あの時代に明るくて開放的で自由に役所の内部に入っていける、というピロティの開放感は新鮮でしたね。

神谷 | 未来を想定した空間に金を出す公共事業体は稀ですね。金子知事がいなかったらできなかった。同時に仮説の正当性を主張する“言葉”が必要でした。

古谷 | 丹下先生は、そういうことに長けた方でしたか。

神谷 | 先生も金子知事さんも、先見力に富み、我慢強く相手を説得する意欲と能力の持ち主でしたね。その後、屋上は周囲の建築が高層化して見晴らしが悪くなり、残念ながら閉鎖しましたが…。

ユニバーサルに考えて

ローカルに行動する姿勢が大事

古谷 | 戦後の民主主義を目に見える具体的な形に見せると同時に、戦前から日本人建築家が抱き続けてきた日本の伝統とモダニズムを具体的に体現すること。香川県庁舎によってこれらがふたつながら達成されているわけですね。

神谷 | 香川が完成した後で、代々木のような別な形で同じ問題に挑戦し、解決をしている。香川があり、代々木があり、そしてまたカテドラルがあるわけです。その後どうするかというのは、いまだに我々の課題であり続けているんですが…。

古谷 | ただ、普通の人にとっては、香川における日本



国立屋内総合競技場[1964] [写真：村井修 | 提供：丹下都市建築設計]



東京カテドラル聖マリア大聖堂[1964] [写真：村井修 | 提供：丹下都市建築設計]

[13] 神谷宏治「香川県庁舎について—2〜3のメモ」『建築文化』1959.1

[14] 連載「戦後モダニズム建築の軌跡—丹下健三とその時代04・05（神谷宏治×藤森照信）『新建築』1998.4・5



話をする神谷氏(中)、佐藤氏(右)と古谷氏(左)



東京計画1960—その構造改革の提案 [1960] [写真: 川澄明男 | 提供: 丹下都市建築設計]

的なものの表象は分かりやすいのですが、代々木にありませんと…。

神谷 | 代々木に関しましては、丹下先生がアメリカへ行って、MITで学生に指導したプロジェクトが直線の「ハ」形なんです。それがWHO世界保健機構のコンへの応募案では、ソリを持った形に変化するんです。それだけでなく、空に向かう垂直の軸線と、裾に向かう水平の軸線、その交点に人間がいる。その形のイメージが東京計画1960で住宅棟につながって、それを受けて代々木の形が生まれるわけです。ですから、いきなり代々木が出てきたわけじゃなくて、やはり伏線が幾つかあるんです。それにたまたま私はずっと関係していたものですから。良い体験をしたと思います。
古谷 | そうですね。神谷先生はこの後、代々木にもかわられていますね。まさにその両方を体感、体験されたわけですから生き証人ですね。話はちょっとありますが、代々木は第一体育館と第二体育館があって、僕が高校生になって本当に建築科を受験しようと思い始めた頃に、絵を描きによく行きました。そうすると、第一体育館と第二体育館がつながって見えるアングルがあるんです。それがほとんど決め手になって、僕はもう絶対、建築家になりたいと思いました。

神谷 | あれは、格好良いですからね、半年後ぐらいに敷地全体のマスタープランに取り組む時期がきて、それで現在のような形になっていくんです。裏にスツとつながっていく(笑)。

古谷 | その時はただきれいだと思って絵を描いていたんですが、後から思い直してみると、いわゆる敷地のブロックを超えてつながっているように見える。そうすると都市の中に建築があって、それは一つひとつの建築じゃなくて、つながり合って出来ている。都市の空間はそうやって出来ているということが、高校生ながらに何となく感じただと思うんです。すごく大きな仕事だという気がして建築家に憧れたんですよ。その関連で言いますと、香川県庁舎はひとつの建築であるだけじゃなくて、都市にとってプラスになるような、つまりもうちょっと広範囲に都市というものに寄与できるもの。きっと香川県庁舎のピロティにはそういったもの

が表現されていて、その先に代々木もあるような気がしますね。

佐藤 | 都市とのつながりの話ですよ。4年前の50周年の時ですが、神谷先生が『建築文化』に書かれていたように、みんながここに集まって何かをやりたいということで、庭園コンサートを企画して、50年前の竣工の時と同じ獅子舞の団体に舞ってもらったり、吹奏楽の演奏など、いろんなことをやっただけです。この県庁から3、400m離れた東の方に、高松港から延びてくる中央通りという大きなメインストリートがあるんですが、その通りの辺りまでコンサートの賑わいや演奏が聞こえたらいいんです。それに誘われて見に来た人も結構いまして、延べ350人くらい集まったんです。普段は夜になったら静かなところなのに、夕方から人が集まってきて、最後はみんなで香川県民歌を歌ったんです。すごく一体感があって、この庭が都市の中にある意味とはこういうことなのかと、その時に感じました。当初の丹下さんや神谷先生たちの考えていた理念が実現するかどうかは、まさしく私も使い手に懸かっている問題です。

古谷 | 佐藤さん、『あのころの香川県庁舎を語る』で書かれているボイドの話が披露していただけますか？

佐藤 | この県庁舎は、当時は香川の記念塔になる都市のコアとして建設されました。最初のうちは文字どおりあちこちから眺められる記念塔であったものが、最近では周りも高層化して、それが埋没しかかっているようにも見える。ただし、都市の再開発でかなり建て込んできたけれども、そのことが逆にこの庭やピロティ、1階ロビーにおけるオープンスペースの重要性を再認識させる契機になっているのではないかなと思うんです。文字どおり本館が見えていた時はもちろん象徴性があったと思いますけど、なくなってきた時に初めて、ここに仕込まれていたボイド、つまり空隙としてのピロティだったり庭が、周りが建て込んでくればるほど、その重要性が増すのではないかなと思うんです。

古谷 | とても鋭い見方だと思いました。もしこういうオープンスペースがなければ、ただ建て込んでいる中の一介の建物になっちゃうところでもすね。

佐藤 | それは庭園コンサートでも経験しました。それから近くに小学校がありますので、学校帰りに子どもたちがあそこのベンチに座って遊んだり、県庁に用事はないんだけど、結構いろんな人が通りがかりにふらっと立ち寄ってピロティの下で涼んだりお弁当を食べたりしている姿は、日常的にあるんですね。そういうのを見て、この場が持っている意味はすごく大事なんだと実感するようになりましたね。

古谷 | 都市のコアは50年を経て、なお真価を発揮し続けているということですね。

佐藤 | 最近よく聞く話ですが、50年たったので重要文化財にすれば後は大丈夫だと言われるんですが、そんなことは全然なくて、言葉は適切じゃないですが、やっぱりこれをいかにうまく使っていか、使いこなしていくかが大事で、それがあった上での文化財なんだ

ろうと思うんです。やっぱり今一番、持続可能な建築を生み出していくための原動力としては、ハード的なものをしっかりするのももちろんですが、それ以上に実際に使うというかたちで、みんなで支えていくことが将来へつながることになると思います。

古谷 | おっしゃるとおりですね。ところで神谷先生、この香川県庁舎の精神は、日本の建築家とか事務所にも、どういうふうに引き継がれたとお思いですか？

神谷 | 引き継がれたというより、僕が引き継ぐべきだと思っているのは、ユニバーサルとローカルです。現代社会は、世界中どこへ行っても同じような建物がある。自分が今、ニューヨークにいるのか、香港にいるのか、インドにいるのか分からないみたいな風景があらゆるところにある。ユニバーサル化された状態の中で、ローカルなデザインが強く求められる。地元根付いた建築的遺産を再発掘して、新しいデザインを展開していく。丹下先生の伝統と創造に帰着するのですが、香川がもし未来に対して発言するとすれば、やっぱりそこが一番大事だと思います。ユニバーサルに考えて、ローカルに行動する姿勢ですね。ともかく立ち腐れて惜しまれながら消えていったという状態だけは、免れてほしい。この庁舎は、ユニバーサルとローカルの問題を考える時に、非常に良い事例、現実の事例として存在しているわけです。大きく言えば日本文化の未来のために、ぜひ残してほしい。過去の誇りだけで言うわけではないのです。

古谷 | まさに、今日も、とても伺いきれませんでした。ひとつの建築がここに実在するというだけで、世代を超えていきさつを紐解くことができるし、またそれを語り継ぐことができる。周りが変貌し、必然的に都市のコアとしての機能も変質しながら、まさに持続しているという状態がもたらす価値は計りしれません。香川県高松の方たちのためだけの価値にとどまらない、それは明白だと思います。佐藤さんからもしお願いします。

佐藤 | 今年は「瀬戸内国際芸術祭2013」の一環として、「丹下健三生誕100周年プロジェクト」が行われます。展覧会「丹下健三 伝統と創造～瀬戸内から世界へ～」や香川県庁舎のガイドツアーが開催されます。ぜひ高松にお越しください。

古谷 | 香川県庁舎がこうして建ち続け、使われ続けていることで半世紀の歳月を超えて、さらに若い世代に会話が繋がれていると思います。

本日は長時間、本当にありがとうございました。

[収録: 2012年12月10日]

[取材協力] オオニシ業局 / 香川県 / 丹下都市建築設計
[その他] 特記のない写真は、フォワードストローク

かみや・こうじ——建築家 / 1928年生まれ。1952年、東京大学工学部建築学科卒業。旧制大学院に在籍。丹下健三研究室で建築・都市の設計研究にあたる。1961年、都市建築設計研究所 (URTEC) 代表。1971年、退任。1972年、日本大学生産工学部教授。1977年、神谷・荘司計画設計事務所顧問。1998年、日本大学名誉教授。2010年、日本建築家協会名誉会員。主な作品: 国立屋内総合競技場 [1964] ※、日本万国博 お祭り広場大屋根 [1970] ※、川崎市民プラザ [1979]、王禅寺ヨネティ [1990] など (※はURTEC時代の作品)。

さとう・りゅうま——香川県文化財専門員 / 1966年生まれ。1988年、関西大学卒業。同年、香川県に入庁。埋蔵文化財センター、教育委員会文化行政課、歴史博物館、観光交流局を経て、2012年、文化振興課 (丹下健三生誕100周年プロジェクト事務局)。

主な著書: 『中世讃岐と瀬戸内世界』 [共著、岩田書院 / 2009]、『続宇多津町誌』 [共著、香川県綾歌郡宇多津町 / 2010] など。

ふるや・のぶあき——建築家・早稲田大学教授 / 1955年生まれ。1978年、早稲田大学卒業。1980年、同大学院博士前期課程修了。1986年から1年間、文化庁芸術家在外研修員としてマリオ・ボッタ事務所 (スイス) に在籍。近畿大学助教授を経て、1994年、早稲田大学助教授、NASCA設立。1997年より現職。

主な作品: アンパンマンミュージアム [1996]、詩とメルヘン絵本館 [1998]、早稲田大学會津八一記念博物館 [1998]、ZIG HOUSE / ZAG HOUSE [2001]、近藤内科病院 [2002]、神流町中里合同庁舎 [2003]、茅野市民館 [2005]、高崎市立桜山小学校 [2009]、小布施町立図書館「まちとしよテラソ」 [2009]、早稲田大学理工カフェ [2009]、篤庵 [2009]、T博士の家 [2010] など。

対談後記——古谷誠章

日本の伝統とモダニズムの相剋を超え、戦後の民主主義を体現する

香川県庁舎は僕が長らく敬愛する建築のひとつで、20年ほど前に全館を案内してもらったことがある。その時、最も印象的だったのが鼎談でも述べた屋上空間、その庇やペントハウスの造形だったが、もう一つ、職員用の備品家具の図面と、当時まだ現役で使われていたその木製キャビネットにも大変恐れ入った。すべて丹下研究室の手によって小さな備品の隅々まで丹念に描かれ、並々ならぬ設計の情熱を感じたのを思い出す。まだスチール製のオフィス家具が量産される以前の、すべてが手づくりの時代の、何とも手問ひまの掛かった、しかし同時に注がれた情熱の分だけ、ものを慈しむ心が自然に湧いてくるような、そんなオフィス家具だった。今でもその一端は、エントランスやホールロビーに残されているベンチなどの家具類に見ることができる。

これと同じことは建築自体や外構の庭にも通底している。いつ行っても建物の隅々にまで心の行き届いた管理がされていたが、聞くところによれば、これは庁舎供用当初より香川県の戦争寡婦の団体である清和会の手によって、丹精込めて清掃がなされていたとのことだった。ところが近年になって競争原理の導入とやらで、清掃業者間の入札によって仕事が発注されることとなり、そうもいなくなってしまったようで、少し寂しい感じがする。民主主義を体現する県庁舎の庭も、完成後にさまざまな催しに供され、とても賑わったようだ。直線的で端正な庁舎建築と土着的なエネルギーを感じさせる庭空間の対照が、縄文と弥生がまさに“あざなえる縄のように絡み合った”日本文化の特質を想起させる。今回、初めて神谷さんにお会いして建設当時の話をじかに伺い、その頃の猪熊さん、金子知事、丹下さんの意気込みを感じることができて、とても興味深かった。また建設当初の息吹を“考古学的”につぶさに掘り起こした佐藤さんらの、この県庁舎を盛り上げ、使い続けようとする意志にも触れ、今後に新鮮な期待を抱いた次第である。

設計者と県側の共同者であった山本忠司さん(生前に僕も何度もお会いしたことがある)らが一体となって、奮闘してつくり上げた庭の造形、僕はこの造形こそが後の国立代々木競技場において、敷地を超越して都市に姿を現す、日本を代表する建築のイメージにつながったと確信する。

金属造形・渡辺遼さんと ブロンズ鑄造・須田貴世子さんの巻

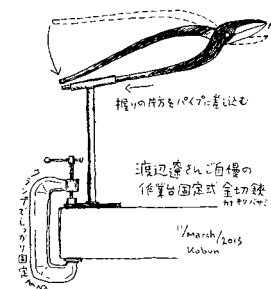
Ryo Watanabe | Kiyoko Suda

中村好文：文とイラスト
Yoshifumi Nakamura

瀬戸内生活工芸祭

昨年(2012年)の11月23日、24日の2日間、香川県高松市で第1回「瀬戸内生活工芸祭 2012」が開催されました。全国各地からクラフトに関わる作家たちが、自信作を携えて高松城跡の玉藻公園に一同に集まり、展示販売するクラフトフェアです。

この生活工芸祭開催の「言い出しっぺ」のひとりである私は、行きがかり上、出展者を選ぶ選考委員を務めさせていただきました。私としては、「生活工芸」というキーワードがある以上、なんらかのかたちで暮らしに役立つ道具を選ぶべきだと思っていましたが、そういう基準では選びにくい作品もありました…と言いながら



も、作品の発する不思議な底力に魅了され、ぜひ、実物を自分の眼で見、手にとって撫で回してみたくなるモノ、さらには、その作者に会って話を聞いてみたくなるものがありました。今回、^{アトリエ}仕事場を訪問する金属造形の渡辺遼さんはその1人でした。

若いアーティスト夫妻との出会い

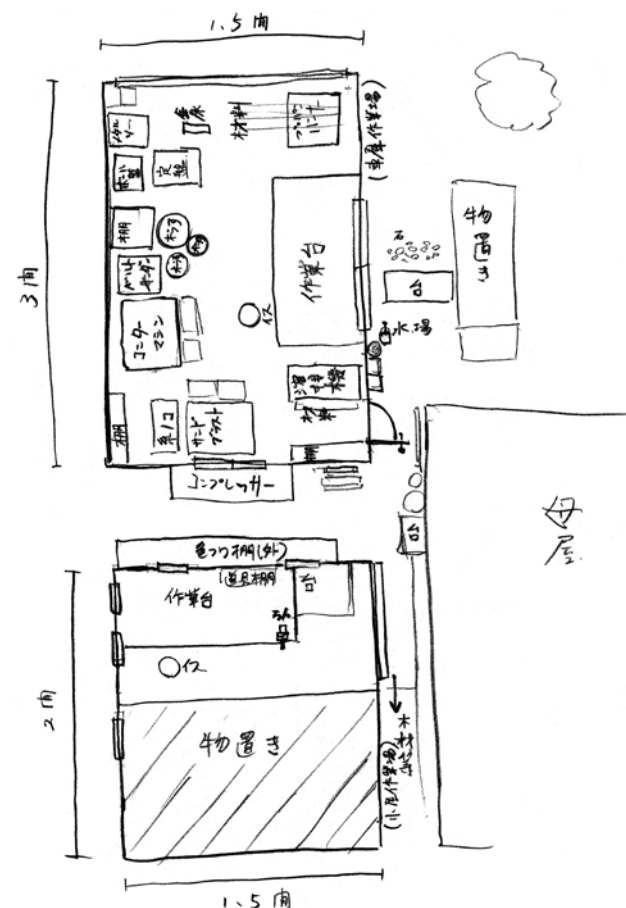
渡辺遼さんとは玉藻公園の会場で会いました。もちろん初対面です。いくつかの展示ブースが横並びに並ぶ中のひとつが渡辺さんのブースで、平べったい石ころのようにも甲虫の殻のようにも見えるモノと、器と言われれば器に見えないこともない容器と、



左一須田さんの仕事場。渡辺さんが手作りしたもの。南面した4つの窓から暖かい光が入る。右一どう見てもガレージにしか見えないが、この中が渡辺さんが日夜、制作に没頭する仕事場



渡辺さん夫妻が両親と住んでいる、ごく普通の住宅街の住宅。庭先もアトリエとして使うので、もの珍しそうな目で見られることもあるという



イラスト：渡辺遼



上一型ガラスの嵌った窓から入る光が柔らかく室内に漂う渡辺さんの仕事場 | 下一和室の畳の上に合板を敷き詰めた須田さんの仕事場。須田さんは床にちょこんと座って作業する。床の間に背にしてミニバイク「モンキー」が鎮座しているのが面白い

廃校リノベーションで 地域に根差した 新しい拠点づくり

近年の少子高齢化、人口減少という社会状況の中で、公立の小学校、中学校、高校を合わせると毎年500校近くが廃校となっている。1992年以降廃校となった延べ数は6,834校に上り、その7割が何らかの活用が図られていて、残り3割は、さまざまな理由から未利用のままという。公立学校を管轄する文部科学省では2010年に「みんなの廃校」プロジェクトを立ち上げ、廃校を積極的に活用するための支援を行っている。本特集では、増え続ける廃校を知恵とアイデアで地域のために有効活用している事例を紹介しながら、ストックとしての建築の未来を考える。



上—3331 Arts Chiyoda | 中—三代校舎ふれあいの里 | 下—白神フーズ [写真: 白石ちえこ]

【特記のない写真は、シロバラタク】



京都国際マンガミュージアム：国内初のマンガ総合文化施設。マンガを複合的に体験できるとあって、国内外、老若男女を問わず多くの人が訪れる。

資産としての 建築ストックの利活用について

三橋博巳
Hiromi Mitsuhashi
(社)日本不動産学会会長

フローからストックの時代

日本の経済は成長期から成熟期に移り、フローからストックの時代となった。人口減少と少子高齢化の今、高度成長期に建てられた建物が、まさに高齢化、老朽化して世の中にあふれ出そうとしている。今日、住宅の空き家は1,000万戸に達する勢いであり、橋や道路、トンネルなどの都市を支えるインフラの巨大構造物も一気に老朽化が進行している。少子化による公立の小・中学校の廃校も増加し、住宅を含めたこれらの社会資産をどう有効に利活用していくかは、低迷する経済状況の中、取り組んでいかなければならない課題である。本稿では建築ストックの利活用における課題と、今後の方策について述べる。

建築ストックを活かした 地域再生とマネジメント

まちは社会的資産であり、地域住民の大切な資産でもある。住宅や都市基盤を資産として位置付け、不動産としての

視点から、地域再生を行う必要がある。建築ストックの増加に伴い、老朽化したオフィスビルの修繕、住宅の耐震改修、マンションの建て替えや更新など、リノベーションが盛んになっている。リノベーションのやり方によっては、都市環境性能の向上を図ることができる。例えば、木造密集地での建て替えに伴う再開発時に、積極的に緑地空間や公共空間を生み出し、災害時の避難所として確保できれば、防災安全性の向上につながる。こうした建て替え促進には、住民の合意形成が不可欠であり、公的資金など制度のデザインが必須である。地域レベルの建築ストックの再生では、地域の特性に応じた再生手法が重要である。シャッター街の活性化については、自治体を始め各地域ですでに多くの事例があるが、成功例は少ない。また廃校については、文部科学省の「みんなの廃校」プロジェクトで推奨している多くの事例に見るように、地域特性に応じ、地元の人々や自治体、NPOなどの協働によるさまざまな試みが行われ、採算を別とすれば、それなりの成果

を生んでいると思われる。建築ストックを維持運営していくには、地域マネジメントやエリアマネジメントなど、ストックに対する管理が重要である。特に、継続的に維持管理していくためには、ライフサイクルに応じた改修や更新周期、ライフサイクルコストなどのマネジメントが必要だ。ハード面だけでなく、社会経済的条件として法制度の整備や、金融、財政、税制度などソフト面の対策が必要である。合意形成に対しては、地域コミュニティの形成が欠かせない。ハード、ソフト、ハート(心)面からの施策とマネジメントシステムの構築が不可欠なのである。

建築ストックを セーフティーネット住宅として活用

空き家の利活用は、NPOなどによる空き家再生プロジェクト、空き家バンクなどの取り組みや、SOHO、高齢者の集会所など、さまざまな利用事例があるが、それらに加えてセーフティーネット住宅としての利活用がある。先の東日本大震災や福島原発事故の際に、仮設住宅や復興住宅の建設に時間が掛かる状況を考慮すると、空き家や廃校は、その間の生活基盤を確保する一時避難所として利用できる場所なのである。平常時は地域のコミュニティサロンなどとして利用しながら、非常時は被災者のための住居として活用できるよう、電気やエネルギー供給などライフラインを整備しておく。空き家のセーフティーネット住宅化を推進することは、都市防災の観点からも重要と考える。最近では、空き室が目立つ全国の雇用促進住宅についても、セーフティーネット住宅の可能性を探るべく、調査が始まったばかりだ。

建築ストックの情報管理が大切

空き家の種類には、別荘などの二次的住宅や、賃貸用または売却用の住宅(新築・中古)、その他、人が住んでいないなど、上記に該当しない、例えば長期不在

や取り壊し予定などもある。これら空き家の問題点として、防災上の安全性や防犯性の低下、ごみの不法投棄による悪臭や、蚊・ねずみの発生など衛生の悪化、樹木の越境や雑草の繁茂、落ち葉の飛散による近隣への迷惑や景観の悪化などが挙げられる。そこには、建物を取り壊すと固定資産税が上がるなど、制度的な理由も関係しているが、空き家や廃校がまさにデッドストックとなることで、犯罪の温床となるなどマイナスの危険性も孕んでいる。そのため、空き家の情報収集と管理には今後、一層の努力が必要なのである。

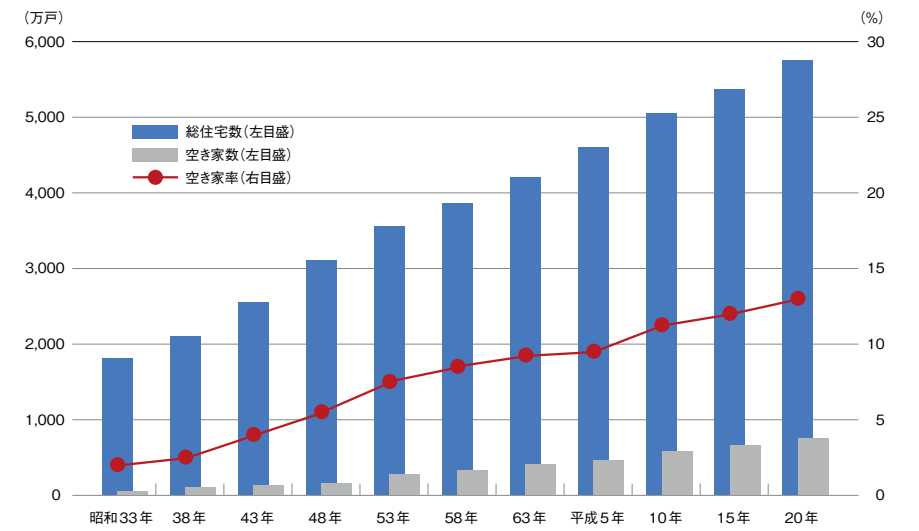
2010年頃から各自治体では「空き家対策条例」などを制定し、空き家の所有者に適正な維持管理を義務付けるとともに、自治体が空き地の所有者に必要な措置を勧告できるなど、対策が講じられている。今後は、空き家・空き地だけでなく区分所有のマンションにおいても同じ現象が起こるので、管理運営の問題は非常に大きい。

ストックを資産として捉える視点

繰り返しになるが、ストックである住宅や空き家などの建物を、まちづくりの資産、すなわち不動産として捉えることで、新たな資産価値を創造する可能性があるのである。ストックの利活用により都市の安全性を向上させ、地域の活性化を図り、大地震に備えるセーフティーネット住宅としての役割も期待できる。次に、その資産を地域住民に伝えるための情報発信・伝達システムと、管理が必要である。実現方策については今後の課題であるが、ハード、ソフト、ハート面からの取り組みと、産・官・学・民の協働と連携で検討されることを願う。

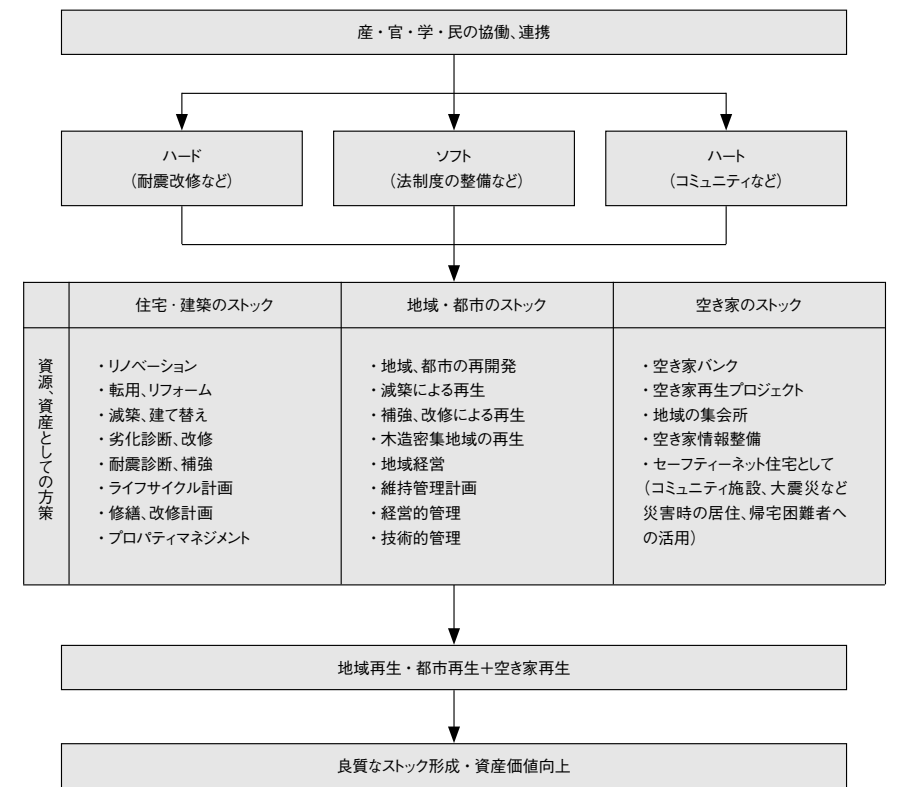
みつはし・ひろみ——(社)日本不動産学会会長/1968年、日本大学大学院理工学研究科修士課程修了。1977-79年、第19次日本南極地域観測隊越冬隊に参加。2012年3月まで日本大学理工学部教授。同年4月、非常勤講師。2008年より現職。2009年、資産評価政策学会会長。専門は不動産科学、建築学。主な著書：「不動産学事典」[共著、日本不動産学会編、住宅新報社/2002]、「都市建築のビジョン」[共著、日本建築学会編、日本建築学会/2006]、「ECOシティ」[共編著、中央経済社/2010]など。

総住宅数、空き家数および空き家率の推移——全国(昭和33年-平成20年)



全国の住宅のストックについて見ると、総住宅数は平成20年で5,759万戸、平成15年からの5年間で370万戸(6.9%)増加している。また空き家数は平成15年から20年までに97万戸増加し、空き家率は12.2%から13.1%に増加している [出典：総務省統計局 http://www.stat.go.jp/data/jyutaku/2008/10_1.htm]

ストックの利活用による都市再生——ストックを資産・資源として考える



[作図：三橋博巳]

求められる廃校施設の有効活用 未来につなごう「みんなの廃校」プロジェクト

高藤憲一郎
Kenichiro Saito
文部科学省

近年、少子化による児童生徒数の減少、市町村合併などの影響により、毎年400校から500校前後の廃校が発生しています。

公立学校施設は、国庫補助など貴重な財源により整備された施設であると共に、地域住民にとっては身近な公共施設でもあることから、学校として使われなくなった後も、地域の実情や需要に応じて積極的に有効活用していくことが求められています。

文部科学省においては、このような廃校施設の有効活用を図るため、財産処分手続きの大幅な簡素化・弾力化を図るとともに、「未来につなごう「みんなの廃校」プロジェクト」を展開し、各地方自治体への廃校施設有効活用の取り組み支援を行っています。

財産処分手続きの 大幅な簡素化・弾力化

国庫補助金により整備された公立学校施設を学校教育以外の施設に転用する場合、原則として補助金相当額の返還等を要する財産処分手続きが必要です。こうした状況において、国庫返納が必要なことにより廃校施設を有効活用した地域活性化ができないなどの問題が指摘される中、文部科学省では

2008（平成20）年に財産処分手続きの大幅な簡素化・弾力化を図りました。

具体的には、補助後10年以上経過した施設等を、①無償で財産処分（転用・貸与・譲渡・取り壊し）する場合、国庫納付金を不要とする、②有償貸与・有償譲渡する場合でも、国庫納付金相当額を学校施設整備のための基金に積み立てることを条件として、国庫納付金を不要としました。また、耐震補強事業等を実施した施設等を無償で財産処分する場合は、補助後10年未満でも国庫納付金を不要とする、などの取り扱いとしています。

未来につなごう 「みんなの廃校」プロジェクト

文部科学省が2010（平成22）年から展開している「みんなの廃校」プロジェクトにおいては、次のような取り組みをし、廃校施設等の更なる有効活用支援を行っています。

まず、各地方公共団体で活用方法や利用者を募集している未活用の廃校施設等の情報を、地方公共団体の希望に基づき「活用途募集廃校施設等一覧」として集約し、文部科学省のホームページ上で公表しています。より多くの民間企業、学校法人、NPO法人、社

会福祉法人、医療法人などに情報を提供することで、廃校施設等の情報と活用ニーズのマッチングの一助になるものと考えています。

次に「廃校施設等活用事例リンク集」の公表です。現在、廃校施設等はさまざまな用途に活用されており、公民館などの社会教育施設や体育館などの社会体育施設といった公共施設への転用が多く見られます。中には宿泊施設や美術館、創業支援施設など、民間のアイデアを活用して廃校を生まれ変わらせた事例も数多く、地方公共団体と民間事業者とが連携し、地域資源を活かしながら地域経済の活性化につながるような活用も行われています。「廃校施設をどう活用していいのかわからない」という地方公共団体から聞かれる声に応えるため、このリンク集では、廃校施設の特徴的な転用事例をまとめています。多くの先例を紹介することで、地方公共団体や地域住民の方々、その他、運営主体の皆さまの創意工夫を生み出すきっかけとなり、地域にとってふさわしい廃校施設等の有効活用につながるものと考えています。

さらに、廃校施設等を活用する際に必要となる改修については、他の省庁や独立行政法人が拠出する補助金を利用することができます。「廃校施設等の活

用にあたり利用可能な補助制度」を取りまとめて周知することにより、廃校施設等の活用を一層促進させることができると考えています。

廃校施設の有効活用による 地域活性化の取り組み

文部科学省の調査によれば、平成14年度から23年度の過去10年間に発生した廃校では、建物が現存するもののうち、約70%が何らかの施設として活用されています。

廃校施設の活用はアイデア次第で無限の可能性を秘めています。地方公共団体においては、教育委員会や管財部局のみならず、子育て、福祉、経済、観光関連部局など、さまざまな部局と活用の可能性を模索していただきました。また、民間事業者等においては、公共の枠にとらわれない柔軟な発想を持って新たな活用の可能性を地方公共団体に提案していただきたいと考えています。文部科学省としては、引き続き、「みんなの廃校」プロジェクトなどを通じて、各地方公共団体の廃校施設等の有効活用への取り組みを積極的に支援していきたいと考えています。

さいとう・けんいちろう——文部科学省大臣官房文教施設企画部施設助成課課長補佐

主な活用用途	例	件数
公民館・資料館等		754
社会教育施設	公民館、生涯学習センター等	608
文化施設	資料館、美術館等	146
社会体育施設		802
社会体育施設	スポーツセンター等	802
福祉施設・医療施設等		337
障害者福祉施設	自立支援施設、作業所等	73
保育所		35
児童福祉施設(保育所を除く)	子ども家庭支援センター等	33
放課後児童クラブ		40
放課後子ども教室		18
老人デイサービスセンター		36
介護老人福祉施設(特別養護老人ホーム)		28
その他の老人福祉施設	小規模多機能ホーム、世代間交流センター等	60
医療施設		14
体験交流施設等		300
体験交流施設	自然体験施設、農業体験施設等	179
研修施設		90
宿泊施設(体験交流施設を除く)		31
庁舎等		291
庁舎等		210
備蓄倉庫		81
企業・創業支援施設・その他法人施設等		181
企業施設	工場、事務所等	122
創業支援施設	ベンチャー企業の拠点施設	22
その他法人事務所等(企業・学校法人を除く)		37
住宅		32
住宅		32
大学施設		25
大学施設		25

(複数回答)



- 温泉トラフグ養殖施設(栃木県那須郡那珂川町/旧武茂小学校): 那珂川町に湧出する天然温泉の有効成分と排熱を利用し、海産魚種「トラフグ」を養殖生産。那珂川町の特産品ブランドとして「町おこし」を行っている
 - 世田谷ものづくり学校(東京都世田谷区/旧池尻中学校): “学び・雇用・産業”の再生といった視点から、民間の活力を活かした新しい手法により、新たな産業の育成や創業の支援などを行っている。また、映像・デザイン・建築などのさまざまなクリエイターにワーキングスペースとして教室を開放。ワークショップなどのイベントも開催される
 - やすらぎ交流館(熊本県阿蘇市/旧小野小学校): 小学校跡地を、“都市と農村の交流拠点”として活用している。地域住民の協力の下、特産の高冷地野菜を使用した地産地消メニューの開発や、企業・大学と連携した農林業体験型研修、環境教育事業の実施もしている
 - 羽合西コミュニティ施設(鳥取県東伯郡湯梨浜町/旧羽合西小学校): センコーが地域の障害者や高齢者を雇用し、野菜の水耕栽培、キノコ類の栽培、食品加工などを行い「福祉型農業事業」に取り組んでいる
- [提供1-4: 文部科学省]
5-7 北野工房のまち(兵庫県神戸市/旧北野小学校): 児童数の減少と阪神・淡路大震災により閉校になった歴史ある校舎を活用し、「工房のまちづくり」をうたい文句に、洋菓子やパン、真珠や懐かしいマッチなど、神戸の特産品を扱うテナントや体験工房を誘致。神戸市の新しい観光拠点となっている

まちの背景を見つめ、 廃校という器から新しい価値を生み出す

清水義次

Yoshitugu Shimizu

「3331 Arts Chiyoda」共同主宰



清水氏

廃校活用による衰退エリア再生

これまで関係した廃校活用プロジェクトは2つあります。歌舞伎町に隣接する新宿区の旧四谷第五小学校を活用した「吉本興業東京本部」と、千代田区秋葉原近くの旧練成中学校をアートセンターに変えた「3331 Arts Chiyoda」です。共に廃校を活用し、エリアを活性化することに、大いに貢献しています。

現代版家守による歌舞伎町再生

歌舞伎町では、2004年頃から歌舞伎町を浄化し、まちを再生する動きが始まっていました。ちょうどその頃、馬喰町界隈の間屋街再生を“現代版家守”という手法で行っていました。家守とは江戸時代に地主に代わって表店、裏店、長屋などの不動産を管理する大家と呼ばれた職業です。江戸の家守は、店子が持ち込むさまざまな相談に乗って庶民の暮らしを助け、まちを守り、まちを管理する存在でした。これを現代に復活させたのが、現代版家守です。「歌舞伎町クリーン作戦」により発生した大量の空きビルや空き室を活用し、世界的なエンターテインメント産業の企画・制作・消費までが一貫して行われるまちに生まれ変わらせるプロジェクトに加わってほしいという依頼が、新宿区から

きたのが2005年頃でした。

旧四谷第五小学校は、関東大震災後の復興小学校でモダニズム建築の名作です。1995年に閉校となり、校舎は新宿区の分庁舎と倉庫、校庭は放置自転車の一時保管場所という、もったいない使われ方がされていました。そこで、歌舞伎町再生のビジョンを実現する取り組みとして、一流のエンターテインメントの企画制作会社を誘致することになり、数ある企業の中から吉本興業が選ばれました。そして、約400人規模のオフィス、練習スタジオ、エンターテインメント産業のスタッフ養成スクールが移ってきました。廃校利用の条件として、地域貢献することが掲げられましたが、実際、吉本興業の皆さんは積極的にまちづくりに参加しています。歌舞伎町の夜回りや、若手芸人が各地区のまちづくり協議会を手伝ったり、また、小学校での食育教育を子ども漫画で行うことが児童に喜ばれ、その取り組みはテレビでも報道されました。力のある企業を衰退中のエリアに誘致したことで、新しい情報が発信され、まちのイメージが刷新し、新しい人の流れが生まれ、まち全体に動きが出始めました。

廃校をアート拠点に蘇らせる

「3331 Arts Chiyoda」は、廃校を活用した日本では珍しいオルタナティブなアートセンターです。改修にあたり隣接する練成公園と旧練成中学校を大きなテラス階段でつなぎ、伸び伸びとした公共施設をつくり出しました。2010年6月全館オープンし、アート好きはもとより、老若男女、ビジネスマンからベビーカーを押しながらの若いママたちまで、

本当にいろんな方が訪れてくれるのもこの大きな特徴です。美術展、ダンス、アートフェア、シンポジウム、コミュニティアート活動、料理イベント、スクールなど、あらゆるジャンルのアート活動およびコミュニティ活動の舞台として、まちに根付いています。

地域再生の鍵は、 コンテンツによるまちづくり

新たなコンテンツがまちに入ってくると新しい人が訪れるようになり、一方、地元住民や卒業生は思い出の場所として通います。2つが交じり合うことで、新しい都市型コミュニティが生まれる可能性が出てきます。この辺りは、神田五軒町町会という神田明神の氏子町会があって、神田祭の時には神輿が「3331 Arts Chiyoda」にもやってきます。江戸文化が残るこの界隈ならではのコミュニティに、我々を含めたよそ者がそこに交ざる。この新しいコミュニティこそ、これからのまちづくりに必要だと言えます。それは、地方都市でも同じです。これまでの流れを変えるコンテンツによるまちづくりが、地域再生に必要となってきたのです。その際、学校は核になる場としてとても大切なところになるのではないのでしょうか。

自立した活動で ストックを有効活用していく

「やがて日本は新築の時代が終わり、ストック社会になる」と東京大学教授の松村秀一先生は20年ほど前から言っています。まさに現在、そういう時代になりました。建築という器が余った時、そこ

に新しい魅力、社会にインパクトを与えるようなまちのコンテンツを入れることが非常に重要になってきます。“利用の構想力=イベント開催”と短絡的になりがちですが、一過性のイベントを補助金で行っているだけでは、まちは変わっていきません。

税金に頼らず、民間で自立して持続的に遊休化した公共施設を活用し、地域のためになる仕事や産業をつくり出すことが重要です。そのためには、遊休化した施設を企画・運営しながら収益を出し、本来の目的である公共サービス機能をしっかり果たす。その一例が「3331 Arts Chiyoda」です。このような取り組みは、イギリスではガバナンス型まちづくりとして当たり前になっていますが、日本では、まちづくり会社が収益を上げてはいけぬ、という変な風潮がまだあります。しっかりした経営を行い、収益を上げる。それを、アート活動やまちづくりに還元していくことこそが大切だと思います。

「3331 Arts Chiyoda」では、千代田区に家賃を払いながら、しっかりとした施設マネジメントを行っています。チームの中心は芸術家の集団なので大変でしたが、一生懸命にやっているうちに良い施設運営ができるようになりました。こうして生み出した貴重な資金を元に、企画展などのアート・文化・コミュニティ活動に取り組む。目的は儲けを生むことではなく、新たな活動をつくり出すために資金を投じていくこと。ビジネスの土台をきちんと築くことで、本来のアート活動が安心して活発に展開できます。ストックの利活用には、しっかりしたコンテンツとマネジメントが重要なのです。(談)



吉本興業東京本部：歌舞伎町に隣接する旧四谷第五小学校をリノベーションした。教室は廊下との壁を取り除き、横につながる開放的な空間にしたことで、社内コミュニケーションが高まったと評判を得ている【提供：吉本興業】



3331 Arts Chiyoda：隣接する練成公園が会場となった町会行事「五軒町ファミリー会」の様子。スタッフも参加して地域の人たちと一緒にイベントを盛り上げる【提供：3331 Arts Chiyoda】

しみず・よしつぐ——建築・都市・地域再生プロデューサー／1949年生まれ。東京大学工学部都市工学科卒業。コンサルタント会社を経て、1992年、アフトヌーンソサエティ設立。2007年-、東洋大学経済学部大学院客員教授。2010年-、3331 Arts Chiyoda共同主宰。
主な地域再生プロジェクト：ふれあいセンターいずみ(熊本県旧泉村) [1995-97]、REN-PROJECTおよびCET(東京都千代田区・中央区) [2003-]、歌舞伎町ルネッサンス・喜兵衛プロジェクト(東京都新宿区) [2005-]、奥会津プロジェクト(福島県三島町) [2009-]、オガールプロジェクト(岩手県紫波町) [2009-]、小倉家守プロデュース(福岡県北九州市) [2010-]など。
主な建築プロジェクト：青山パラシオ [1996-99]、ソフィテル東京 [1999-2000]、名古屋IZUMIアパートメント [2002-03]、メルキールホテル銀座東京 [2003-04]、名古屋FXビル [2004-05]など。

地域コミュニティの核となるアートセンター 「3331 Arts Chiyoda」

所有者：東京都千代田区 | 運営団体：合同会社コマンドA

2010年オープンの「3331 Arts Chiyoda」は、東京・秋葉原に近い旧練成中学校をリノベーションした都心の廃校プロジェクトである。事業運営会社のコマンドAは、オルタナティブなアートプロジェクトを企画・実現するアーティストグループ、コマンドNが母体となっている。「3331 Arts Chiyoda」の統括ディレクター・中村政人氏が率いるコマンドNは、1997年から秋葉原エリアを中心に千代田区で数多くの取り組みを続けてきた非営利組織だ。その実績が評価され、旧練成中学校をアートセンターとして活用する事業提案のコンペで選出された。「3331 Arts Chiyoda」のコンセプトは「地域に開かれた新たな文化芸術の拠点」。コマンドAは「all」を意味し、「地域の人たちと一緒にやってすべてを行う」という意思が込められている。

現在、施設は練成公園と一体になっているが、学校当時はそれぞれ塀で隔たれていた。改修の際、塀を取り除き、施設のアプローチにウッドデッキを設けて公園とのつながりを持たせたことで、オープンな雰囲気になった。地下1階、地上3階の館内には、ギャラリーだけでなく、フリースペース、カフェ、事務所、屋上菜園などいろいろな要素が入る。1階の入り口からすぐにコミュニティスペースとなり、パブリックな空間を通り抜けてギャラリーを配置するなど、それぞれに区切りを感じさせない連続性のあるつくりで、誰でも気軽に立ち寄れる空間になっている。1階には他に、おもちゃの交換システムを取り入れた「かえるステーション」などもあり、小さな子どもたちが遊びにやってくる。

3年目を迎え、これまで地域の人たちが楽しめる企画を中心に、大きい展覧会からトークショー、ワークショップなど、1,000以上を催し、約180万人以上が来館している。さまざまな目的で訪れた人たちが入り交じり、地域の憩いの場として機能しながら、人と人、アートと人をつなぐのりしろ的な役割を果たす新しいアート拠点となっている。

(文責：編集室)



- 1 メインギャラリー：ホワイトキューブの展示空間。写真は、障害のある人、ない人、アーティストと一緒に自由な表現の場の創出を目指す「ボコラート全国公募展 vol.2」の様子
 - 2・3 内観：地域コミュニティ拠点として、できる限り学校の姿を残している
 - 4 外観：芝生が広がる練成公園とオープンデッキでつながり一体感を持たせた
 - 5 コミュニティスペース：誰でも無料で利用できるため、ランチ時には近隣の会社員や子ども連れの母親たちで賑わい、午後は宿題をする子どもの姿も。地域の憩いの場になっている
 - 6 明後日朝顔プロジェクト：「3331 Arts Chiyoda」のコミッションアーティストである日比野克彦氏が全国で展開している地域交流型のアートプロジェクト。近隣小学校の児童と朝顔を育てている
 - 7 3331屋上オーガニック菜園：地域に開放された貸し菜園。収穫した野菜でランチパーティや食事会なども開催している
- [提供 1・4-7：3331 Arts Chiyoda]

ここにしかない学校を観光資源に 「三代校舎ふれあいの里」

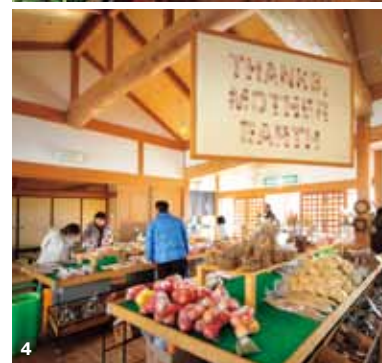
所有者：山梨県北杜市 | 運営団体：津金学校；NPO法人文化資源活用協会、大正館；大正館管理委員会、おいしい学校；株式会社おいしい学校

山梨県の北西部に位置する北杜市須玉町下津金の「三代校舎ふれあいの里」は、歴史・農業・食をテーマにした観光施設である。活用されている旧津金学校は、同じ敷地に3世代の校舎が並ぶ、全国的にも珍しい学校だった。擬洋風建築の明治校舎が1875（明治8）年、木造平屋建ての大正校舎は1924（大正13）年、昭和校舎は1953（昭和28）年に竣工し、1985年の学校統合に伴う閉校まで、100年以上にわたり地域の小・中学校として親しまれてきた。

廃校後は公民館などに使われていたが、老朽化が進み、明治校舎のみ修復後、歴史資料館として残し、大正校舎と昭和校舎は取り壊しが市議会で決議された。これを受け、一部住民が保存運動を起こし地元新聞にも取り上げられたことから、貴重な地域資源を残そうと多くの賛同を得て活用されることになった。

現在、解体・修復された明治校舎は、ミュージアム「津金学校」として開館している。柱や床、階段はもちろん、学校当時の机やイス、足踏み式オルガンなどもそのまま使われていて、懐かしい空間が広がり、建築関係者も多く訪れるという。夏休みには地元の子どもたちが参加する「津金一日学校」が開かれ、音楽家や作家を先生に迎えたユニークな授業で人気の催しになっている。大正校舎は、1997年の県営中山間地域農村活性化総合整備事業によりほぼ復元し、農業体験農園施設「大正館」として開設された。ほうとう打ちや蕎麦打ち、田植え、野菜の収穫などが体験できる。

昭和校舎の外観を模して建て替えられた「おいしい学校」では、野菜や特産品の販売、パン工房、レストランを展開している他、宿泊、入浴も楽しめる。学校給食を再現したランチメニューが好評で、若い人や家族連れが増えたという。それぞれ運営は異なるが、共に地域の学校らしさを新しい価値として打ち出すことで、まちの活性化拠点となり、県内外から多くの観光客を集めている。
（文責：編集室）



1 「津金学校」外観：藤村式建築の明治校舎。藤村式建築は1874（明治7）年からの約14年間に山梨県で数多く建てられた洋風建築。1873（明治6）-87（明治20）年に山梨県令（知事）を務めた藤村紫朗にちなんで付けられた
2 「大正館」の体験風景：八ヶ岳周辺には自治体や学校、企業の保養施設が点在し、団体の利用も多い。他に関東周辺の小・中学校から体験学習にも訪れる。地元のおばあちゃんたちが指導する、ほうとう打ちが人気
3 「津金学校」玄関ホール
4 「おいしい学校」の特産品売り場：生産者直売の新鮮野菜と須玉町特産品が豊富に揃い、観光客や宿泊客に喜ばれている
5 「津金学校」2階大教室：昭和30年頃の懐かしい教室風景を再現。毎週土曜日に書道教室が開かれ、地元の子どもたちが通ってくる
6 「三代校舎ふれあいの里」全景：奥から明治、大正、昭和の順に施設が並ぶ。春には南アルプスを背景に桜を楽しむとあって、花見の名所として知られている
[提供1・2・6：三代校舎ふれあいの里]



冷涼な気候を活かした地場産業の創出 「白神フーズ」

所有者：秋田県大館市 | 運営団体：白神フーズ株式会社

秋田県北部にある大館市は、かつては鉱山と林業のまちとして栄え、現在は秋田比内鶏の産地として有名である。人口は約7.8万人で、1970年頃の9.7万人をピークに減少を続けている。児童数の減少から小学校の統廃合が進み、この10年間で5校の小学校が廃校となった。1874年に開校した歴史ある大館市の山田小学校も2008年3月、全校生徒29名と共に同市の山瀬小学校へ統合され、ついに閉校。市では、1998年に大規模改修をしていた山田小学校の利活用の道を模索していた。

市から相談を受けた、大館出身の実業家・根田哲雄氏(白神フーズ社長)が故郷への恩返しにと、助成金は受けず、6,000万円を掛けて生ハム工場を立ち上げたのが2009年のことである。

日本で本格的な生ハムづくりを行なっているところはまだ少ない。生ハムづくりで有名なスペイン・グラナダは北緯37度、イタリア・パルマが北緯44度、ここ大館市は北緯40度とほぼ同じ。特に欠かせないのは、気温5℃以下が4、5ヵ月続くことである。ここはその条件を満たしているだけでなく、白神山地の東端に位置する田代岳を背後に抱き、そこから吹き降りる冷涼な風が南方の米代川に抜ける最適な立地である。校舎の大きな窓を開けるといつでも新鮮な空気が通り抜けるので空調設備もいらない。

大館市は、これまでの養鶏技術を活かし、地元産の無菌豚「三元豚」の生産にも力を入れる方針だ。養豚では、減反政策による余剰米を豚の飼料として活かすこともできる。

生ハムの仕込み時には小学校の卒業生が20人ほど臨時の手伝いに来ているが、今後は地元名産の筍を使った加工品もここでつくるなどして、常勤の雇用を産み出す産業へ発展させたいと、夢を抱いている。さらに、生ハムとワインと一緒に楽しめるアンテナショップを県の物産館に計画し、都内のレストランやホテルへの販売戦略を進めるなど、民間と市と県の連携も始まっている。

(文責：編集室)



1・2 白神フーズ大館工場：1998年の大規模改修できれいになった校舎。正面入り口には看板
3 生徒たちの作品：できるだけ小学校当時の面影を残すという根田哲雄社長の意向で残された手づくりマップ
4 冬場の仕込み作業：10kgの骨付きモモ肉を血抜きし、天然海水塩をすり込む
5 商品の「白神生ハム」：防腐剤などは一切使用せず、塩分控えめの味が人気
6・7 生ハムを収蔵している教室：熟成が均一になるように年に数回、窓側と廊下側のハムの位置を入れ替えるなど、こまめに管理している。2009年より毎年3,000本を仕込み、現在約9,000本が教室で熟成を待っている
[写真7点とも：白石ちえこ]

国内初のマンガ文化の総合的拠点 「京都国際マンガミュージアム」

所有者：京都府京都市 | 運営団体：京都精華大学

「京都国際マンガミュージアム」は、図書館と博物館の機能を兼ね備えたマンガ総合文化施設として、2006年11月に京都市と京都精華大学の共同事業で開館した。運営を手掛ける京都精華大学は約40年前からマンガに関するクラスを設けており、2006年には日本初のマンガ学部を開設するなど、学問としてのマンガ研究をリードしてきた。今や世界的にも注目されるマンガ文化をさらに展開していこうと、1995年に閉校した龍池小学校を大学の施設「京都精華大学国際マンガ研究センター」として活用。その拠点であり、また活動の一環として「京都国際マンガミュージアム」を運営している。

旧龍池小学校は1869（明治2）年に開校し、閉校当時は1929年（昭和4）年、1936（昭和11）年竣工の校舎などが残っていた。「京都国際マンガミュージアム」改修工事の際、それらをガラスの吹抜け空間でつなぎ、1つの建物として回遊性を持たせた。1階から3階の廊下には「マンガの壁」と呼ばれる書架が一面に巡らされ、約30万点の所蔵資料のうち、約5万冊の単行本が納められている。来館者は「マンガの壁」から自由にマンガを手に取り、館内、芝生の庭など好きな場所で読める。他に各資料を展示したギャラリーやワークショップ、イベントもあり、マンガの歴史と現在を複合的に体験できる貴重な施設として、年齢、国籍を問わず多くの人に受け入れられている。年間来館者数約25万人、うち1、2割は海外からだという。京都の中心部、地下鉄烏丸御池駅から徒歩の場所とあって、修学旅行の見学コースに組み入れる生徒たちも多い。

また、京都の新産業創出を図る取り組みも行っている。2011年からは、少女マンガからインスピレーションを得た衣服の開発プロジェクト「Kyoto Manga Girls Collection (Kyoto MaGiC)」を実施するなど、ミュージアムの枠を超え、伝統と新しい文化を融合させる試みで、京都らしい地域拠点としての役割も担っている。

（文責：編集室）



- 1 2つの校舎と講堂棟をつなげた吹抜け空間：通路としてだけでなく、閲覧スペースやワークショップコーナーとしても使われている
- 2 エントランス・受付：修学旅行生や外国からの観光客など、さまざまな来館者に適切に対応できるスタッフを揃えている
- 3 こども図書館：元職員室を改装。池をモチーフにデザインされた室内は、小さな子どもが楽しめるスペースになっている
- 4 2階メイン展示室：壁面には、1945-2005年の各漫画賞受賞作を中心に各時代の名作マンガが展示されている。中央部分は、マンガを歴史や社会、産業など、各分野別に理解できる体感型展示になっている
- 5 マンガの壁：単行本約5万冊が、館内の壁中に広がる全長200mの書架に並んでいる。そのうちの約3万5,000冊が2005年に閉店した東京・新宿の資本屋「大久保ネギン書店」から寄贈された。「大久保ネギン書店」の寄贈本は他にも多数あり、全部で約5万冊に上る
- 6 外観：かつての校舎の姿を残し、リノベーションした。夏祭りなどの会場にもなり、地域コミュニティの場としても親しまれている



“知覚ゲーム”としてのガラスの泡

石川修次
Shuji Ishikawa

2003年に竣工した「プラダ青山店」は10年の時を経ても、その斬新な形態と美しいガラスの表情が今なお人々を魅了している。我々が初めてプロジェクトに参画した時、ヘルツォーク&ド・ムーロン(以下、H&deM)から提示されたコンセプトモデルは、プラスチックを火であぶってたくさんの泡を付けた、スケール感のない美しいオブジェであった。ガラスユニットを曲面に曲げるという行為が意図したことは、光を多方向へ反射する泡の一つひとつが商品のショーケースであり、同時に多数のショーケースの集合体である建物が、ひとつの大きなショーケースとして存在感を際立たせることであった。

近代のフラットなガラスファサードは、光の反射が一方的で、視覚的には一体となりながらも内外環境は明確に分かれている。彼らが意図したことは、ガラスの外側からは、ガラスの歪みを介して商品の内なる世界を垣間見せ、ガラスの内側からは、曲面ガラスを通して歪んだ都市やまちを歩く人々のさまざまな現象を知覚させること。すなわち、内外の境界を明確に規定することなく、内と外があたかも浸透膜を通して相互に事象をあいまいに変換しながら融合、干渉するということである。

“眺めること、見ること、展示すること、見せるこ

と”といった知覚プロセスがこの建物の主要なテーマであり、さらにまち全体、商品、通行人といった関係性の中で、建築と社会とのかかわりを“知覚を通じた新しい建築の世界観”で示すことが重要であった。

以上が、H&deMと協業し、彼らとの会話の中から自分なりに感じ、理解した内容であるが、このような“知覚ゲーム”を誘発するガラスファサードのコンセプトを、日本の建築法規に合わせてどのように実現していくか。以下がその試行錯誤である。

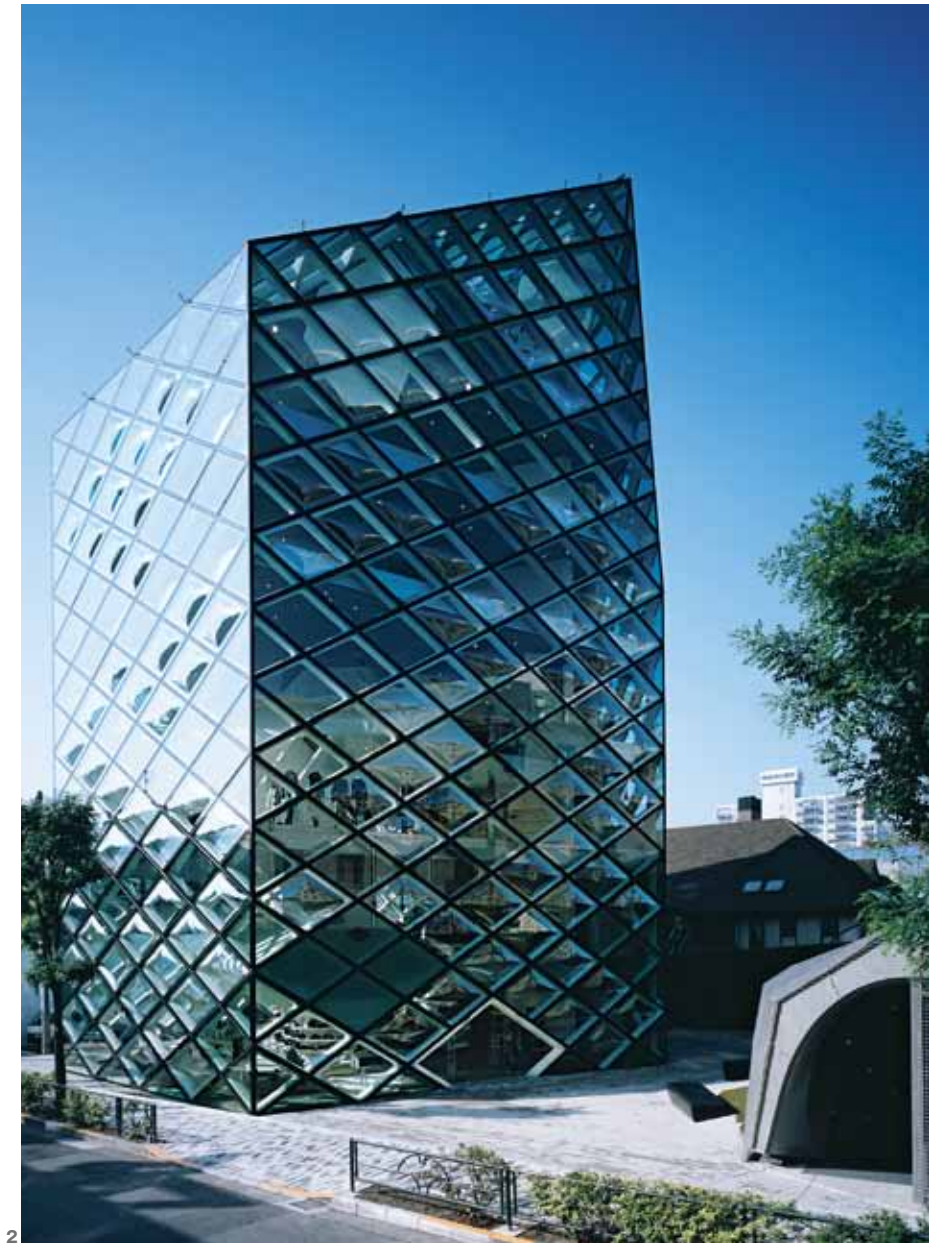
“外装”は、水晶のイメージのようにガラスだけで構成されるべく、表側に金属フレームなどが現れない特殊なガラス固定工法を採用した。合計約840枚の平面、曲面、耐火ガラスなど、さまざまなタイプで構成された高さ2m×幅3.24mのひし形の合わせ複層ガラスを、同様にひし形に構成された構造体に固定する方式とした。ガラスは海外で生産され、特に曲面ガラスはドイツで製造された板ガラスを、スペインで曲面に加工した後、オーストリアで合わせ複層ガラスに仕上げ、ドイツで設計・製造されたアルミフレームと共に、日本で取り付けられるという国際的な設計・施工の協業が行われた。これらの外装材料やガラス固定工法は、品質や性能が日本の基準をクリアすることを実大実験による確認を経て採用した。

また、この特徴ある外装デザインを実現するために、建物構成、工法、コストなどを含めたさまざまな検討を経て、地下1階下部に「中間免震構造システム」を採用した。地震の力を直接建物に伝えない免震構造によって極限的に細い構造体が可能となり、外部からのユニークな内部の見え方と、内部からの独特な眺望の効果を増幅している。また、地震力による外装材への影響が軽減できるため、前述のガラス固定方法が可能になっている。すなわち“外装”と“構造”は、外観デザインと構造デザインが、そして外装としての性能と構造

の安全性が、完全にひとつになったシステムを形成している。

すべてがプラダの店舗(5、6階は事務室)として地下1階から地上6階まで一体となったインテリア空間は、火災時に煙が広がりやすく、建物の安全上致命的であるため、避難安全性評価や耐火性能評価に基づいた防災上の安全検証を徹底した。その安全性を確保するため、加圧防排煙システムや煙の拡散を遮断する装置など、さまざまな煙制御技術を開発し、適用した。加圧で煙を押し出し、外装に設けた自然排煙窓を介して煙を外に出す方式や、消防隊の非常用の侵入口を窓に設置するにあたっては、外装ファサードの統一感を保つべく工夫を凝らした。

2000年3月から8月まで、スイス・バーゼルで基本設計、その後、2001年の4月まで東京で実施設計を行い、工事が着工し、25ヵ月かかって建物が完成した。このプロジェクトのさまざまなアイデアやコンセプトの実現にあたっては、プラダ、H&deMを始め、多くの関係スタッフの熱い想いやチャレンジ精神、国際的な協業があつて初めて成り立ったことを最後に記しておきたい。



プラダ青山店

- 1 コンセプトモデル：初めてプロジェクトに参画した時、ヘルツォーク&ド・ムーロンから提示された[写真1: Herzog & de Meuron]
- 2 水晶のような建物全景：一つひとつの泡がショーケースでありながら、建物全体が大きなひとつのショーケースになっている
- 3 歪んだガラスから垣間見える商品 [写真2・3: Nacása & Partners Inc.]
- 4 ガラスファサードのディテール：歪んだガラスに映る内部と外部 [写真4: 新建築社写真部]



いしかわ・しゅうじ——竹中工務店東京本店設計部設計課長/1963年生まれ。1987年、早稲田大学理工学部建築学科卒業。同大学大学院池原研究室を経て、1989年、竹中工務店入社。
主な担当作品：イタリヤトヨタ本社(ローマ)[2002]、シルク・ドゥ・ソレイユ シアター東京[2008]など。



TOPICS

「住の先へ」——懐かしい未来の家を考える

「HOUSE VISION 2013 TOKYO EXHIBITION」に LIXIL が出展

梶 泰将

Yasunobu Masu

LIXIL 総合研究所企画推進室

「HOUSE VISION」とは…

LIXILは2013年3月2日(土)~24日(日)に東京・お台場で開催された「HOUSE VISION 2013 TOKYO EXHIBITION」に出展いたしました。「HOUSE VISION」とは、2010年、デザイナーの原研哉氏を中心に、現在の住生活の先にある日本人の暮らし方を具体的に提示するためにつくられた、情報発信と研究のプラットフォームの総称です。研究会、シンポジウム、書籍、展覧会など、さまざまな方法で住まいの“新しい常識”を発信しており、東京展では、「新しい常識で家をつくろうー未来の産業ヴィジョンを可視化する」を企

画コンセプトに、活動に参加した企業、建築家・アーティストの情報発信の場として開催されました。

LIXIL が本展示会に出展する目的、伊東豊雄氏とのコラボレーション

「人口が減り一人暮らしも増える日本だが、“家”は質の高い“生”を生産する場所。充足と誇りを携えて生きていける住空間を、一人ひとりが主体的に実現できること。そこに産業の次を見立てることができるはずです」(原研哉氏:「HOUSE VISION」より)

LIXILはこのような「HOUSE VISION」の考えに賛同し、その活動に参画してい

ます。東京展では建築家の伊東豊雄氏と共に、これからの日本の新しい住まい・暮らし方を提案しました。

「住の先へ」を主題に、内と外を明確に切り分ける従来型アプローチから脱却し、自然に開かれた快適な新しい住まいを提案。総合住生活企業であるLIXILの多様な商品、要素技術の組み合わせによって表現しました。サブタイトルは「懐かしい未来の家を考える」で、日本古来の生活の知恵、文化や伝統を取り入れながらも、LIXILの持つ多様な商品・技術を融合させた新しい住まいを形にしています。戸建て、集合住宅など既存の住宅ストックをリノベーション



2

することによって、都会でも実現できることを目指しました。

土間や縁側のように内と外を明確に分けず、自然をより身近に感じながら中間領域を活かす文化は、日本古来の伝統的な暮らし方です。外気に接し、光や風を楽しむ心地良い暮らし方を実現しながら、パッシブな暮らしにより環境負荷を減らすことを試んでいます。

「HOUSE VISION 2013 TOKYO EXHIBITION」展示会場全体

1. ハイテクを携え、懐かしい未来の家を考える(LIXIL×伊東豊雄)
 2. エネルギー・モビリティ・住空間がシームレスにつながる(Honda×藤本社介)
 3. シェアの可能性を明示し、共生への認識を高める(未来生活研究会×山本理頭・末光弘和・仲俊治)
 4. 日本の美意識を未来資源として運用する(住友林業×杉本博司)
 5. 住まいを自分で編集できる住宅リテラシーを醸成する(無印良品×坂茂)
 6. “繊細・丁寧・緻密・簡潔”から住空間を生み出す(TOTO・YKK AP×成瀬友梨・猪熊純)
 7. 建築や不動産の再生利用に対する知識と能動性を育む(蔦屋書店×東京R不動産)
- このように各ブースは個別のテーマを持っていますが、「HOUSE VISION」全体で捉えるとバランスが良く、これからの



3



4

1 LIXIL×伊東豊雄ブース

2・3 展示会場

[写真1-3: ©HOUSE VISION photos by Nacasa & Partners Inc.]

4 展示会場全体プラン[写真4: ©HOUSE VISION design by 株式会社日本デザインセンター 原デザイン研究所]



5



6



7



8



9

5・6 展示はマンションのリノベーションを想定：5はリノベーション前、6はリノベーション後のイメージ図[写真5・6：©HOUSE VISION design by 株式会社日本デザインセンター 原デザイン研究所]

7 囲炉裏[写真7：©HOUSE VISION photos by LIXIL co.]

8 居室と連続した水まわり空間

9 水まわり空間から土間を見る：手前に見えるのは「Foam Spa」

10 縦型ルーバーによる大型引き戸が内と外の多様な関係性をつくり出す

[写真8-10：©HOUSE VISION photos by Nacása & Partners Inc.]



10

“住”を考えた構成となっていることに気付かされます。

全体の会場構成は建築家の隈研吾氏によるものです。主たるデッキは、標準的な105角のスギ材の組み上げで構成され、各ブースを結ぶ橋のような機能を持っており、歩くだけで爽やかな香りに包まれます。またスギ材は、展覧会が終了した後は、東北の復興のための材料としてすべて再利用される予定で、それを前提とした計画になっています。

LIXILのテーマ：「住の先へ——懐かしい未来の家を考える」

展示空間を表現するサブタイトルは「懐かしい未来の家」。半屋外的に外気と交わる“土間”によって自然をそのままに楽しみながら、省エネルギーと住み心地の良さを兼ね備えた住まいを提案しています。これまでのように、箱のような閉ざされた住宅をつくるのではなく、半屋外空間のような中間領域によって、エコロジカルかつ、人とのつながりのある新たな日本人の暮らしを指向します。

都市においてもこのような考えを実現できるよう、展示はリノベーションを想定したプランになっています。新築だけでなく、5,000万戸以上と言われる既存住宅ストックの活用を可能にするため、LIXILはメーカーならではの多様な

商品展開によって、リノベーションを支えます。

展示空間とエレメントの紹介

■ アプローチ：「縦型ルーバー」(参考品)、「パッシブクーリングウォール」(参考品)

庭と土間を区切るのは「縦型ルーバー」による大型引き戸です。戸を開け放つことによって外部と半屋外空間をつなげたり、ルーバーの角度を調整して、日射や通風のコントロールを行います。また、ルーバーを縦型にすることで外界からの視線のコントロールが可能になります。外部の状況に応じて視界を遮ったり開放したりすることができ、プライバシーを確保しながら、近隣との関係性をつくり出すことができます。近年まで日本のまち並みが持っていた曖昧さ、柔らかさが、温かい人間関係を生み出します。塀は「パッシブクーリングウォール」という保水蒸散機能を有する素材で構成。打ち水のような効果をもたらします。

■ 土間(半屋外空間)：「囲炉裏 キッチン&テーブル」(参考品)、「Foam Spa」、「EDS」(参考品)

住宅の一部を内でもない外でもない半屋外とすることによって、新たな暮らし方を提案します。

かつての日本家屋では一般的な間取りとして存在した土間を、これからの日本人の暮らしにふさわしく、よみがえらせました。土間の床面は「パッシブクーリングウォール」同様、打ち水効果のあるタイルが敷き詰められています。

土間の中央で目を引くのが「囲炉裏キッチン&テーブル」。一見、奇天烈に思える囲炉裏ですが、大型陶板のテーブルとシンク、これに汎用性の高いタワー水栓を組み合わせることで、人が集う、新たなアイコンとなる可能性を秘めています。調理や食を通じて家族や友人が集い、語り、楽しい時間を土間で過ごすことができます。伊東豊雄氏とLIXILが提案するこれからの日本人の暮らし方です。

これまでクローズな場であったバスルームも、半屋外のオープンスペースに持ち出すことで、露天風呂の開放感を味わうことができます。「Foam Spa」は、微細かつクリーミーな泡(ベルベット・フォーム)で、一般的な泡風呂(バブル)とは質感も機能も全く異なります。メレンゲのような泡は保温性が高く湯気が立ちにくいことから、浴室以外での入浴も可能にしました。泡は白く、透けないため、浴室だけでなく居室や半屋外でも気兼ねなく入浴できます。会場では「Foam Spa」やトイレ、シャワーブースは室内と連続した縁側上に配置されています。

縁側を構成するのが「EDS (Ecology Diversity Synergy)」。EDS研究所・石井幸男氏が長年研究してきたインド実竹を使用し、^{ますだけ}煤竹のような風合いを持つ高強度・高精度の加工技術です。半屋外を自然素材でつくることにより、外部とも自然なつながりが生まれる空間づくりが可能になります。

■ 室内(リビング)：「サーモスII」、「コンパクトキッチン」(参考品)

日常生活を営むためのリビングスペースは、ミニマムな「コンパクトキッチン」とリビング、寝室で構成されます。住宅全体を漠然と空調するのではなく、半屋外と室内に分けて室内側を高気

密・高断熱の「サーモスII」でしっかりコントロールすることによって、エネルギー消費を最低限に抑えることができます。さらに、「サーモスII」ならではの視界の広さにより、室内空間と半屋外空間が一体空間のような広がりを感じることができます。

■ 蔵：「ココエコ」、「エコカラット」

懐かしい未来の家を想定し、蔵と呼ばれるスペースを提案しています。人とつながり、集う土間という考え方に対応し、プライベートな趣味や思考など“籠もれる”空間となっています。内部は断熱リフォーム工法「ココエコ」と、調湿建材「エコカラット」により、温熱のみならず防音効果や調湿性も高く、快適な環境が保たれています。これをリフォームによって実現することが可能です。

最後に

今回の「HOUSE VISION 2013 TOKYO EXHIBITION」では、蔵の中で伊東豊雄氏の解説映像を流しています。伊東氏は3・11以降の私たち日本人を取り巻く環境の変化と、それに対するこれからの暮らしや住まいへの考え、それを踏まえた今回の展示への思いを語っています。来場された方はほとんど、この蔵に留まり、映像に見入って下さいました。(なお期間中、伊東氏は今年の米ブリツカー建築賞を受賞されました。LIXILは受賞を心からお祝いたします。)

また、会場では期間中毎日、隈研吾氏や伊東氏を始めとする建築家やクリエイター、企業代表などによるトークセッションが開催され、社会への問題提起やこれからの暮らし、住まいへの思いを語り、それを聞きに若手の設計者やデザイナー、学生が詰めかけ、盛況を呈しました。

私どもは今回、伊東豊雄氏や原研哉氏、さらに生活感度の高いお客さまと接する機会に恵まれたことに感謝し、これからも暮らしや住まいを支えるエレメントをつくり、お届けしていきたいと考えています。



11



12



13

11 縁側は煤竹のような風合いを持つ「EDS」で構成：土間は打ち水効果のあるタイルを使用

12 リビングスペース[写真12：©HOUSE VISION photos by LIXIL co.]

13 蔵 [写真11・13：©HOUSE VISION photos by Nacása & Partners Inc.]

施工事例 index

SCENE

同志社女子大学・栄光館

1932年竣工の建築家・武田五一設計による同志社女子大学・栄光館。その外壁煉瓦タイルとエントランス庇先端のテラコッタが2011年、改修されました。素材の再現にあたっては、キャンパスの既存棟と違和感なく馴染むことを重視し、釉薬に“汚し”を加え、品質・精度の向上と共に、素材の風合いと微妙な色調を追求しました。創建時の格調高い雰囲気がよみがえりました。



■建築概要■

所在地：京都府京都市上京区今出川通寺町西入ル玄武町602-1 | 規模：地下1階、地上3階 | 構造：RC造 | 工期：2010.11-2011.11 | 改修設計：類設計室 | 改修施工：ミラノ工務店

■施工事例 URL ■

http://iinavi.inax.lixil.co.jp/project/example/ken/application/post_207/

NAKANO CENTRAL PARK SOUTH

「中野四季の森公園」の緑に囲まれて建つオフィスビルです。2層吹抜けのエントランスホールの壁面には、竹林をイメージしたテラコッタルーバーが採用されています。白磁に青磁色の濃淡を付け、厚い釉薬を施した貫入りのやきものらしいルーバーは、断面にも幅にも変化を持たせています。光の屈折や映り込みによって刻々と表情を変える、豊かな空間が実現しました。



■建築概要■

所在地：東京都中野区4-10-2 | 規模：地下1階、地上22階 | 構造：地下：RC造（一部、SRC造）、地上：S造 | 工期：2010.6-2012.5 | 設計：KAJIMA DESIGN | 施工：鹿島建設東京建築支店

■施工事例 URL ■

<http://iinavi.inax.lixil.co.jp/project/example/ken/application/nakanocentralparksouth/>

秋田県立美術館

旧県立美術館の屋根のイメージを継承し、新美術館は三角形をデザインモチーフにした打放しコンクリートの建築です。トイレ空間も外観のイメージに合わせて、シンプルですっきりとまとめられています。洗面器や水栓金具など、シンプルかつデザイン性の高い機器が採用されました。多目的トイレはベビーシートやオストメイトも設置され、さまざまな利用者に対応しています。



■建築概要■

所在地：秋田県秋田市1-4-1 | 規模：地下1階、地上3階 | 構造：RC造 | 工期：2010.11-2012.6 | 設計：安藤忠雄建築研究所 | 施工：清水建設

■施工事例 URL ■

http://iinavi.inax.lixil.co.jp/project/example/set/application/post_144/

特別養護老人ホーム 遠州の園

遠州の園は、特別養護老人ホーム、ショートステイ、デイサービスの機能を備えた福祉施設です。各室共に、入居者ができるだけ自立した日常生活ができるよう、バリアフリーに配慮した設備が取り入れられています。また、多目的トイレはオストメイトなどを備えたフルスペック仕様。便器には背もたれを設置するなど、細部にまで気配りされています。



■建築概要■

所在地：静岡県磐田市大久保891-13 | 規模：地上3階 | 構造：RC造 | 工期：2010.9-2011.9 | 設計：公共設計 | 施工：須山建設

■施工事例 URL ■

http://iinavi.inax.lixil.co.jp/project/example/set/application/post_147/

新小岩駅東北広場

東京都葛飾区にあるJR新小岩駅と東北広場を結ぶ連絡通路「スカイデッキたつみ」が完成しました。幅8m、長さ140mの歩行者デッキには一部にアーチ屋根が架けられ、雨の日も濡れずに移動できるようになりました。また、階段部のサポートレールは、子どもから高齢者にまで対応できる2段階タイプ。デッキ帯には歩行者に優しいユニバーサルデザインが施されています。



■建築概要■

所在地：東京都葛飾区新小岩1 | 施工：葛飾区役所都市整備部道路建設課

■施工事例 URL ■

http://www.nelsis.jp/works/traffic/01_10.htm

山口大学 吉田キャンパス

山口大学は2015年の創基200周年に向け、改修工事が急ピッチで進められています。その一貫として2010年、それまでの青空駐輪場がアルミ製屋根の雨がかりのない快適な駐輪場に生まれ変わりました。Y字型に組まれたサイクルポートは、建築基準法対応商品。シャイングレーのアルミフレームに半透明の屋根が美しく、周囲にも馴染んだ新たな景観を創出しています。



■建築概要■

所在地：山口県山口市吉田1677-1 | 施工：国立大学法人山口大学

■施工事例 URL ■

http://www.nelsis.jp/works/school/01_15.htm

LIXILからのご案内

2013年新商品のご案内

眺望性・断熱性に優れ、快適な窓辺を実現する断熱窓「サーモスII」、さまざまなトイレ空間に調和する3タイプのモデルを取り揃えたタンクレストイレ「サティス」など、2013年の新商品を多数ラインナップいたしました。また全国のLIXILショールームで、5月31日[金]まで新商品フェアを開催しておりますので、この機会にぜひ、お立ち寄りください。

<http://www1.lixil.co.jp/lineup/new/>

「LIXILデザインコンテスト2012」受賞作品決定

応募総数465点の中から、一次、二次（公開）と厳正な審査を経て、金賞「六甲の住居」の他、銀賞、銅賞、審査委員特別賞、入賞など計19点が決定しました。審査は木下庸子氏（建築家・審査委員長）、内田繁氏（インテリアデザイナー・審査委員）西沢立衛氏（建築家・審査委員）、小田方平（LIXIL総合技術研究所所長）で行われました。上位賞受賞作品は以下です。なお、受賞作品を掲載した優秀作品集は、7月に刊行予定です。

<http://www.lixil.co.jp/design-contest/>

- 金賞：「六甲の住居」島田陽建築設計事務所／島田 陽
- 銀賞：「重ねの家」木島千嘉建築設計事務所＋O.F.D.A.／木島千嘉
- 銅賞：「沼袋の集合住宅」suppose design office／谷尻 誠
- 銅賞：「岡上の家」株式会社アーツ&クラフツ建築研究所／杉浦伝宗
- 銅賞：「白馬の山荘」仲建築設計スタジオ／仲 俊治
- 銅賞：「町-building」UID／前田圭介



金賞「六甲の住居」【写真：鈴木研一】



左一銅賞「重ねの家」【写真：上田宏】、右一銅賞「沼袋の集合住宅」【写真：矢野紀行】



左一銅賞「岡上の家」【写真：株式会社アーツ&クラフツ建築研究所】、中一銅賞「白馬の山荘」【写真：鳥村銅一】、右一銅賞「町-building」【上田宏】

ギャラリー＋イベント

<http://www1.lixil.co.jp/culture/>

LIXILギャラリー | 大阪

建築とデザインと
その周辺をめぐる巡回企画展

中谷宇吉郎の森羅万象帖展

会期：開催中、5月30日[木]まで
「雪は天から送られた手紙である」というフレーズで知られる科学者・中谷宇吉郎。研究の軌跡を年代順に追いながら、貴重な記録写真やアルバムなどを通して科学に対する姿勢を紹介します。



六花の結晶
(人工雪)
【提供：U.N.Limited】

INAXライブミュージアム

土・水・火、ものづくりと
生活文化をつなぐ企画展

大竹伸朗「焼燬」展

会期：開催中、6月9日[日]まで
会場：世界のタイル博物館 企画展示室
入館料：共通入館料で観覧可
国内外で幅広く活躍する美術家・大竹伸朗による展覧会。絵やスケッチ、写真など、これまでの作品を転写したタイル

LIXIL出版 新刊案内

<http://www1.lixil.co.jp/publish/>

LIXIL BOOKLET 『集落が育てる設計図——アフリカ・インドネシアの住まい』
執筆：藤井明 定価：1,890円[税込、好評発売中]

LIXIL BOOKLET 『中谷宇吉郎の森羅万象帖』
執筆：福岡伸一、中谷美二子、神田健三 定価：1,890円[税込、好評発売中]

『建築映画 マテリアル・サスペンス』
執筆：鈴木了二 定価：2,940円[税込、好評発売中]

現代建築家コンセプト・シリーズ 14
『吉良森子：これまでとこれから 建築をさがして』
執筆：吉良森子 定価：1,890円[税込、好評発売中]

上一『建築映画 マテリアル・サスペンス』
下一現代建築家コンセプト・シリーズ 14
『吉良森子：これまでとこれから 建築をさがして』

10+1 WEB SITE <http://10plus1.jp/>
建築・都市を巡るサイトです。建築写真アーカイブ、建築関連書籍、イベントの紹介、特集などを毎月更新しています。

10+1 DATABASE <http://db.10plus1.jp/>
雑誌『10+1』の全記事について検索できます。

あなたはあのクリスマスの夜、僕らを見て、何かやりたいことをやってくれる熱い人たちがいるなって感じて、僕が「退屈してた」ことにすごく驚いたみたいだったけれど、本当に退屈してたんです。旅行すれば、旅行しているあいだはその退屈がまぎれるような気がした。それもキレイで安全なところに旅行すると、やっぱり退屈する恐れがあるような気がして（笑）、キタナくて、危ないところに行きたかった。なぜ退屈したかには、時代ということもあるし、個人的事情もありました。七〇年代末は、「すべてもう語りつくされてる」っていう空気がとても強かった時代でした。六〇年代の学生運動盛んな熱い時代が過ぎて、建築に限らず、文学でも思想でも、「全部誰かがすでにやっちゃってる」感がとても強かつ

た。特にこの日本では、磯崎新さんが、この「やられてる感」をひっぱっているリーダーで、「これからできることは引用しかない」みたいなことを、反論しようのない知的説得力でもって、若者達にも吹き込んでいて、「もうやることはない」という無力感は強まるばかりでした。「やることないなら、危ない旅行でもするか」って感じて…。

個人的事情というのは父親ですね。あなたもあの晩に出会った父親は、明治四十二年の生まれで、僕は四十五の時の子供だから何しろこわくて、「おまえは何をやっても雑で、キタナイ」と小さい頃からいわれ続けてきた。こっちは反発して、「上等じゃないか、そんないうならキレイな方には絶対いかないぞ」と、心の中で強がる一方で、キレイじゃな

い、ちゃんとしてない世界、人生ってどんなものかは全然見えてなかった。とりあえずキレイなものに対する反発と自分の粗さ、雑さへの無力感だけがあって、何をしたいかわからなかった。

危ない旅の理想は、アルチュール・ランボーでした。詩を捨てて、アフリカの砂漠で錠の貿易をやって、最後は三十七才で、足の病気にかかって死んでしまうわけです。ランボーは一種の天才で、詩ではやれることはやってしまったから、砂漠に行くわけですが、こっちは逆に、何もやっていない、やりはじめてもないのに砂漠にそこがれたわけですから、おめでたすぎました（笑）。

二〇一三年二月二日



くま・けんじ——建築家・東京大学教授／1954年生まれ。1979年、東京大学建築学科大学院修了。1990年、隈研吾建築都市設計事務所設立。
主な作品：水／ガラス[1995]、森舞台／登米市伝統継承館[1996]、馬頭広重美術館[2000]、根津美術館[2009]、橿原木橋ミュージアム[2010]、浅草文化観光センター[2012]、長岡シティホールアオーレ[2012]など。

隈研吾様

こんにちはクマサン。

おかしなことに、この往復書簡を始めてからクマさんと突然会うことが増えたように思います。チリに続いてストック

ホルムでも偶然会って、おまけに帰りの飛行機の席まで隣同士でした。クマさんが席につくなり、長い手足を折りたたんで、くしゃくしゃの紙をひろげて何か書き始めるのを、私は朝早く、ポーンとした頭で見えました。クマさんはこうやって膨大な仕事量をこなしていくんだと、感心していました。

クマさんのお父さんがこわかったとい

大学の入試で第一志望に落ちて浪人しようとした時に止められたことだけです。自分勝手な人でしたが、他人を全く束縛しない人でした。

バルパライソは、お金持ちの家も貧乏人の家も、同じような波板で仕上げられていました。カテドラルですら同じです。すごい斜面に建てるから、ほぼ同じ大きさに分割される。だから普通の街のように、あそこが高級住宅街でここが貧しいのだということがわからない。

事実、斜面の一番上まで連れて行ってもらったら、このあたりが一番貧乏な人たちのエリアで、あんまり立ち入らないほうがいいと言われたのですが、外から見ると限り他とほとんど一緒に見えました。そしてなによりこの間も書きましたが、三〇万人の町全体が見えて把握できるのが本当に驚きです。でも確かにクマさんが言うように、整え感があると言えはそうかもしれない。私が昔見たアジアの街の整理されてないライブ感みたいなものが薄かったように思います。

私が初めてアジアの町を訪ねたのは三十年くらい前です。パリに行きました。あまり詳しく知らないで友達についていったのですが、とても興奮しました。ほとんど何も見えない薄暗い道に女の人の頭の上に重ねられた極彩色の飾り物だけが浮かび上がって美しかったし、

真つ暗な中に音楽が鳴り響いたり。それから何か国かアジアの国を訪ねました。私は退屈はしていなかったけど、どうしていいかわからなくて、アジアに行ったり、多木浩二さんのゼミに通ったりして、エネルギーを分けてもらっていました。

寒い寒いストックホルムのあと、いくつかの街に行きました。ストックホルムは街を囲む美しい水面がほとんど全て凍りついていて、歩くのもやっとな感じがして、南に移動すると人々が春の気配を喜んでまだ少し寒い広場で食事をしている、次に行った街では、朝夕海が満ち引きするためにドロドロの地面から木で少し床レベルが上げられた小屋で生活する人たちに会いました。先週は、いろいろな時代の教会が並んで作る丘の上の広場に行ってきた。今回はさつき早朝のシャルジャに着きました。だんだん陽があがってきて、街が徐々に見え始めています。大音量のアザーンが流れ始めました。今さらですが、いろいろな所を移動していると、こんなにいろいろな街があって、同時に同じ人間がいろいろな生活をしていることが不思議になり、すばらしく感じられます。

昨日の夕方事務所を出る少し前に、二川幸夫さんがお亡くなりになられたことを知りました。とても悲しいです。



アラブ首長国連邦で開催中のシャルジャ・ビエンナーレで展示されているSANAAの「Bubble」制作風景

百二十歳までやることがあるとおっしゃっていらしたのに残念です。時々二川さんにお目にかかると、顔にぎゅっと力をいれて、こぶしをにぎりしめて、やるんだ、ということを見せてくださいました。またいつかお会いしたいと思います。

二〇一三年三月二日



せじま・かずよ——建築家／日本女子大学大学院修了後、伊東豊雄建築設計事務所勤務を経て、1987年、妹島和世建築設計事務所設立。1995年、西沢立衛とSANAA設立。
主な作品：金沢21世紀美術館[2004]、ニューミュージアム[2007]、ROLEXラーニングセンター[2009]、犬島「家プロジェクト」[2010,2013]※、ルーブル・ランス[2012]など(※以外はSANAA)。

危ない旅の理想はアルチュール・ランボー

妹島和世様

秘密をばらします。僕はあなたの隣でこの手紙を書いています。エール・フランスのストックホルムA.M.六時四十五分発、シャルルドゴール行き便、あなたのヒザには昨日の晩から気になっている、濃紺のツイードのコート。「それどころの」、「うちのおかあさんが、何十年も前に着てたのをひっぱり出してきたの」。何十年前って、ひよっとして、この前話題にした一九七七年のクリスマス頃の頃だったりして…。またまた時間が揺らぎはじめた。

この前は、あなたと、赤ワインで気持ちよくなりながら、チリのバルパライソの町を歩きましたね。崖の昇り降りに使

う不思議な「公共エレベーター」に詰め込まれて。ちよっとコワイ思いました。あなたが、あの雑然としたバルパライソが好きだっていうのがとってもおもしろい。僕はあの町の建築を覆っている波板が気になってしかたがなかった。波板の断面が揃いすぎて、すなわち粒子が見事なまでにコントロールされていて、ヤラセ感が強すぎると思った。世界遺産に登録されると、どうしてもキレイにしようっていう気持ちが出すぎて、ヤラセ感が出ちゃう。

今も、こんなふうによく、「キレイすぎる」って僕は感じる、悪いクセがあります。原広司先生とアフリカ調査に行った、一九七七年の頃より、このクセ、病は悪化している。ハラケンを受ける理由は、ハラさんから学びたいなんていう殊勝なものでは全然なくて、要するに、キタなくて、危ないところに旅行したかつ

たんですね。ハラケンがそういう場所を集落調査と称して、旅行する研究室だつてことを聞いて、その旅行がしたい一心だった。



原研究室の集落調査で、サハラ砂漠横断中

LIXIL
Link to Good Living

株式会社 LIXIL

私たちは、優れた製品とサービスを通じて、豊かで快適な住生活の未来を創造する住まいと暮らしの「総合住生活企業」です。

